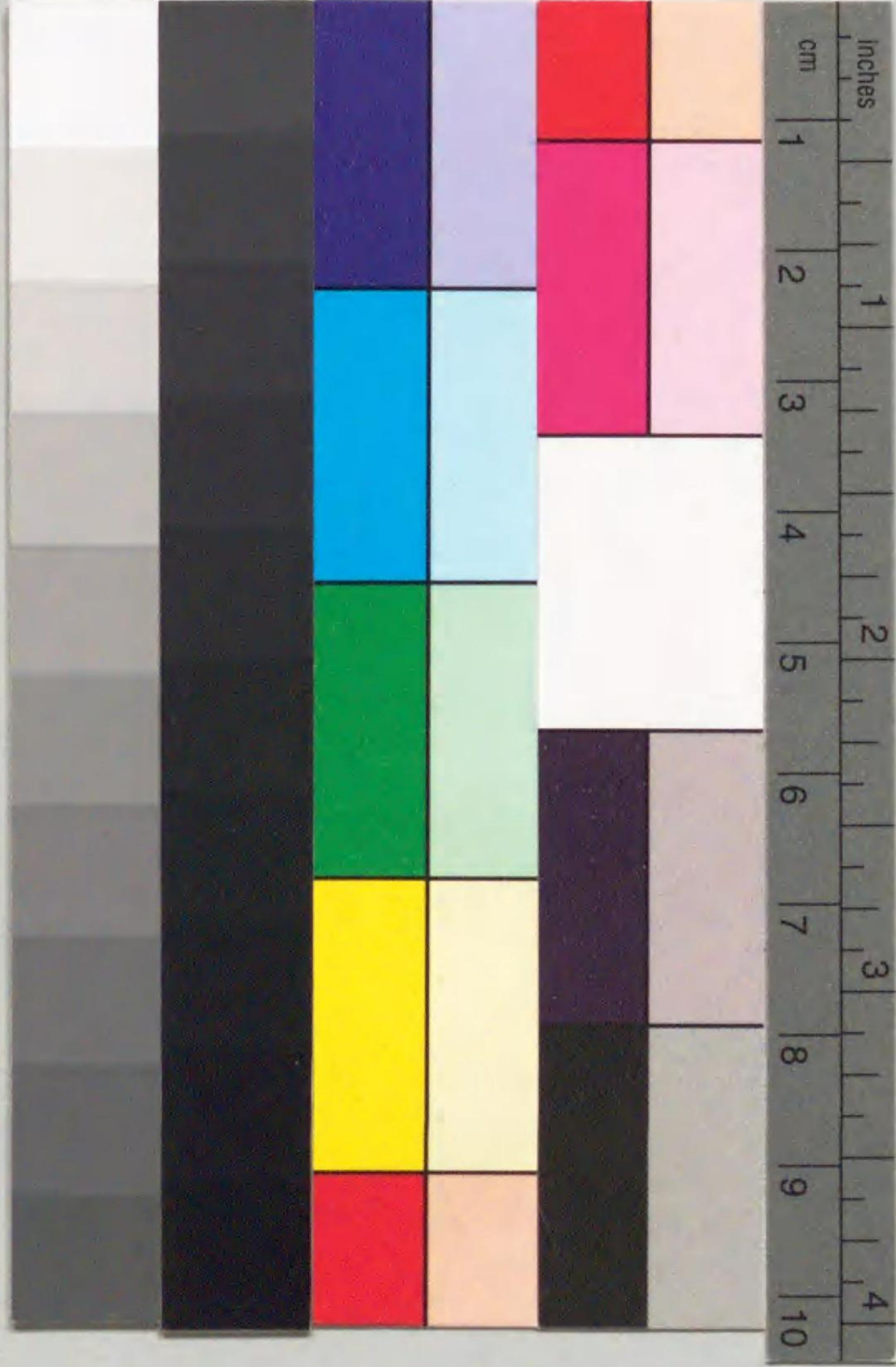


188.8  
Ko548  
K



00289605





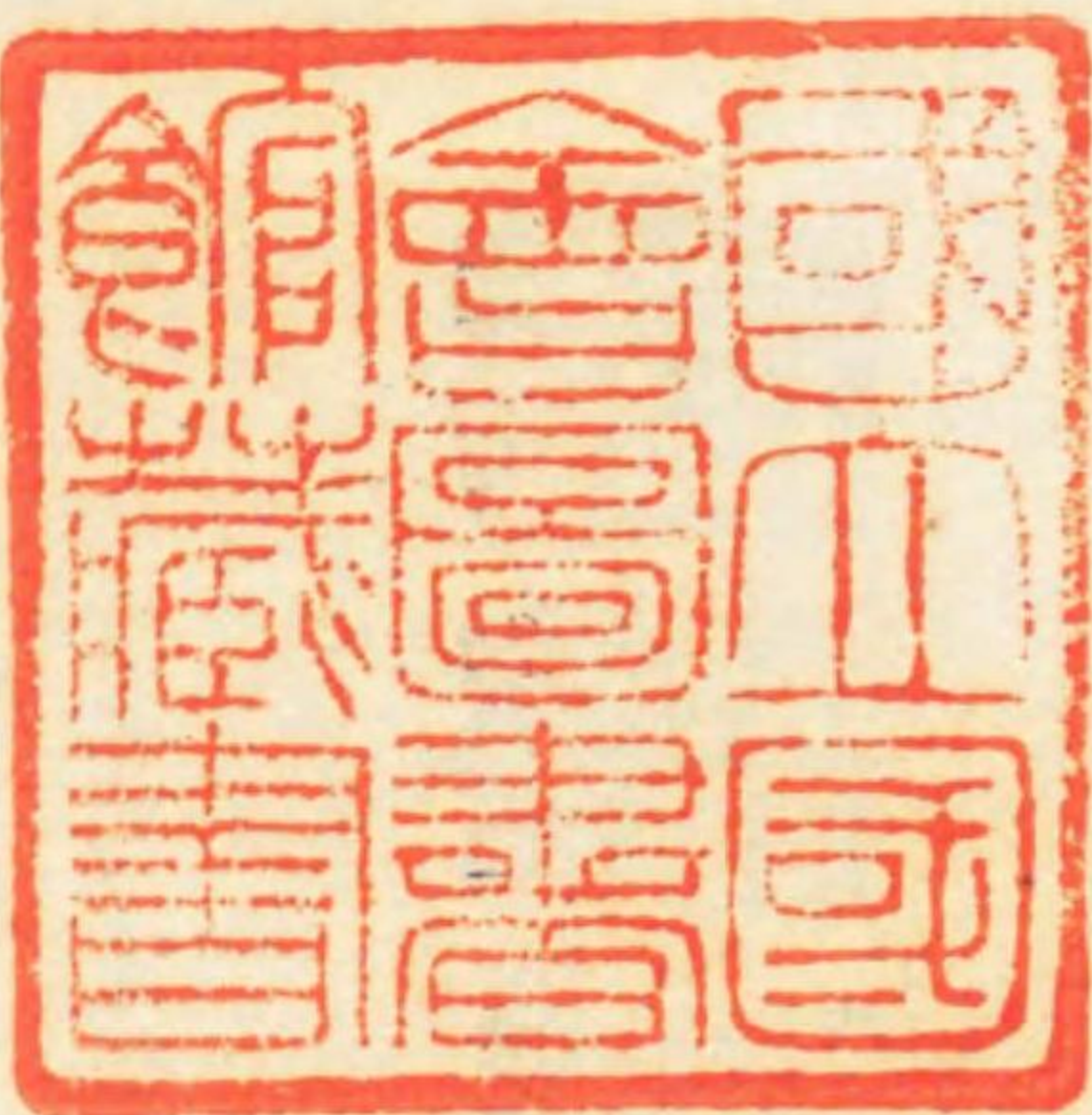




國譯禪學大成

第十六卷





289605

國譯禪學大成第十六卷凡例

一、本大成第十六卷に收載する所の書は、希叟和尚五家正宗贊一卷及び博山和尚參禪警語二卷の二部三卷なり。

一、以上二部の書中、希叟和尚五家正宗贊は、略して「五家正宗贊」とも言ひ、支那宋代の僧希叟紹曇禪師の撰述する所のものなり。本書は夙に我が國に渡來し、南北朝時代即ち貞和三年に、嵯峨天龍寺の雲居庵に於て春屋妙葩が初めて刊行し、降りて慶長十三年、西京花園の一枝軒にて木活を以て印刷せられ、次いで寛永十一年及び萬治三年に重刻せられたり。而して其の卷數も、慶長及び萬治の刊本は六卷より成り、寛永本は四卷より成る。今回、國譯するに當り、主として萬治本に據ると雖も、卷數は編輯上の都合により一卷に纏め、校合に際しては、間々古版本をも參照せり。

一、博山和尚參禪警語は一に略して「博山警語」又は「博山禪警語」とも稱し、支那明代博山の僧元來無異禪師が參禪者の爲に、當時に於ける禪病を指摘して、其の指針を開示したる警語を集めたるものにして、編者は首座の正成なり。而して本書は明の萬曆三十九年に刊行せられ、我が國に於ては徳川時代、元祿二年に初めて印板に附せら



れ、次いで明和二年に重刻を見、爾來、禪衲の間に盛んに愛誦せられたり。今次、國譯するに際しては、専ら元祿二年刊行の頭注本に基づき、卷末の原文も亦之れに遵據せり。

一、以上二部の書は、孰れも支那古徳の撰述に係り、就中、五家正宗賛は支那に於ける臨濟・曹洞・潯仰・雲門・法眼の五派の老漢、都べて七十人の略傳を通して、其の宗風を窺ふには、蓋し本書に過ぎたるものはなく、また博山警語に至つては、支那明末に於ける禪風の大概を知るには好箇の書たると共に、參禪學道の士の爲には最も好き指南車たり。

昭和五年三月

編者 黃楊道人識す

國譯禪學大成 第十六卷

目次

國譯希叟和尚五家正宗賛解題……………一三

國譯希叟和尚五家正宗賛序……………一一

國譯希叟和尚五家正宗賛……………一一九

希叟和尚五家正宗賛原文……………一一四



國譯博山和尚參禪警語解題

..... 一一二

國譯博山和尚參禪警語序

..... 一一七

國譯博山和尚參禪警語

..... 一一三

博山和尚參禪警語原文

..... 一一四

國譯希叟和尚五家正宗贊

解題

達磨大師、震旦に來りて無上の眞宗を慧可に傳へてより、四傳して大鑑慧能に至る。慧能の輪下に青原・南嶽の二大龍象あり。而して青原の弟子石頭、之れを藥山に傳へ、藥山之れを雲巖に傳へ、雲巖之れを洞山に傳へ、洞山また之れを曹山に傳ふ。乃ち此の洞山・曹山以下の宗派を世に曹洞宗と稱す。又南嶽は之れを馬祖に傳へ、馬祖之れを百丈に傳へ、百丈之れを黃檗に傳へ、黃檗之れを臨濟に傳ふ。乃ち此の臨濟義玄以下の一派を世に臨濟宗と呼ぶ。次に百丈の法、滄山に傳はり、滄山又之れを仰山に傳ふ。乃ち此の一派を滄仰宗といふ。又、青原下に石頭あり、石頭の下に天皇あり、天皇の下に龍潭あり、龍潭の下に德山あり、德山の下に雪峰あり、雪峰の下に雲門・玄沙の兩師あり。乃ち此の雲門文偃は雲門宗の祖、而して玄沙の弟子羅漢桂琛は之れを法眼に傳ふ。此の法眼文益は乃ち法眼宗の祖なり。以上は支那に於ける五家の宗派の概要なり。

本書五家正宗贊は、支那徑山の無準師範禪師の法嗣希叟紹曇禪師が、初祖達磨大師以下、此の五家に屬する老漢、都べて七十人を拉し來つて、一々其の略傳を述べ、終りに皆四六文より成る贊語を以て



其の功德を讚稱せり。而して其の載する所の人物は、先づ第一に初祖達磨大師以下、雪峯眞覺禪師に至るまで十二人、臨濟宗に於ては、宗祖臨濟慧照禪師以下、密庵咸傑禪師に至るまで二十六人、曹洞宗に於ては、開祖洞山悟本禪師以下、自得慧暉禪師に至るまで十人、雲門宗に於ては宗祖雲門匡眞禪師以下、月堂道昌禪師に至るまで十四人、瀉仰宗に於ては、瀉山大圓禪師以下、芭蕉繼徹禪師に至るまで五人、法眼宗に於ては、清涼法眼禪師以下、永明智覺禪師に至るまで三人、都べて七十人、是れなり。而も其の用語は古雅にして文章卓絶、之れに加ふるに詩藻豊かにして、誠に五家の禪風を窺ふには最良の書となす。故に本書は夙に我が國に傳來して、叢林の間に流布すること久しく、其の刊本及び寫本、注釋書などは甚だ多し。

著者紹曇の傳を案するに、師の名は紹曇、字は希叟、西蜀の人なり。徑山（今の浙江省杭縣にある興聖萬壽寺）の佛鑑禪師無準師範に從つて、其の法を嗣ぐ。宋の淳祐九年（我が後深草帝の建長元年、皇紀一九〇九）正月八日、佛隴山（浙江省、天台山の一峯）に住し、同じく寶祐二年の秋、杭州靈隱山の放山堂にありて、本書を著す。景定元年六月、法華寺（河南省嵩山にあり）に移り、同じく五年四月、慶元府（今の浙江省慶元縣）の雪竇山資聖禪寺に轉住す。尋いで咸淳五年三月、同府の瑞巖山開善崇慶禪寺の請を受け、高く法幢を掲げて四來の大衆を接化す。此の頃、我が北條時宗の使僧溫・英の二禪師、海を航して師に謁し、時宗の爲に提誨の語を請ふ。是に於て師は「日本、平將軍に示す」の法語を作り、溫・英の二僧に付して寄せらる。而も當時、我が國の禪僧にして宋に入るもの、悉く師の會下に參じて其の法を聽かざる者なしと云ふ。彼の聖一國師の法嗣白雲惠曉の如きは、就中、其の尤も著明なるものにして、師の誨示を蒙ること深し。故を以て其の歸朝に際し、財を捨て、禪師の語録一卷を刊行せり。惜しむらくは師の寂年、世壽を詳かにせず。遺稿に希叟和尚語録一卷、希叟紹曇禪師廣録七卷あり、今猶ほ叢林の間に流布せり。



國譯希叟和尚 五家正宗贊并序

① 聖人の門に遊ぶ者には言を爲し難しと、此れ特に 閨門の兒女子、軟紅輕襪、地を踏んで痛みを  
 怕るゝの論なり、又焉んぞ參學の法と爲すに足らんや。 衲僧家、千聖の頂顛に 玄樞を警轉し、鐵面  
 皮を翻して、爺も也た識らず、一機を示すと  
 きは大火聚の如く、一言を出すときは生鐵槌の  
 如し。 爾が近傍の處なく、爾が咬嚼の處なし。  
 古今を針砭して必死の疾を活す、又何の聖をか  
 稱すべく、何れの門にか遊ぶべく、何れの言を  
 が忌むべき、終日言ひて盡く道なり。 言天下に  
 満ちて口に過なし、或は褒或は貶、或は抑或  
 は揚、曲げて其の奥を盡す、褒も勸節にも非ず、  
 貶も窮郷にも非ず、抑も人を兼ねるに非ず、揚  
 も善を擧ぐるに非ず、鯨を息め劔を補ひ、鶴を

國譯希叟和尚五家正宗贊并序

① 五家とは臨濟、曹洞、雲門、  
 馮仰、法眼の五宗を指す。  
 ② 遊聖人門云々は孟子の語な  
 り、觀二於海者、難レ爲レ水、  
 遊二聖人之門者、難レ爲レ言云  
 々。  
 ③ 宮中の門の小なる者を閨門と  
 云ふ、上圓下方にして圭の如  
 し、故に閨門と云ふ、今爰に  
 は高貴の婦人と云ふ意味な  
 り、軟紅は貴妃の着する錦襪  
 の類。  
 ④ 玄樞とは宗門の玄要、警轉と  
 は頓機なり。  
 ⑤ 爺は佛祖を指す。  
 ⑥ 椀は足がせ、楮は手がせ、楹  
 は獸を養ふの具。  
 ⑦ 罽は白黒相次ぎ、鼈は黒と青  
 と相次ぐ。婆沙論に云く、虛  
 空を畫かんと欲せば五色と成  
 さしむ、只だ畫いて自ら勞す  
 るのみ云々。  
 ⑧ 金錘は涅槃經に云く、迦葉善  
 薩、佛に白して言く、佛性は  
 云何ぞ甚深にして見難く入り  
 難きや、佛の言く、盲人の目  
 を治せんがために、良醫に詣  
 るが如し、良醫、金錘を以て



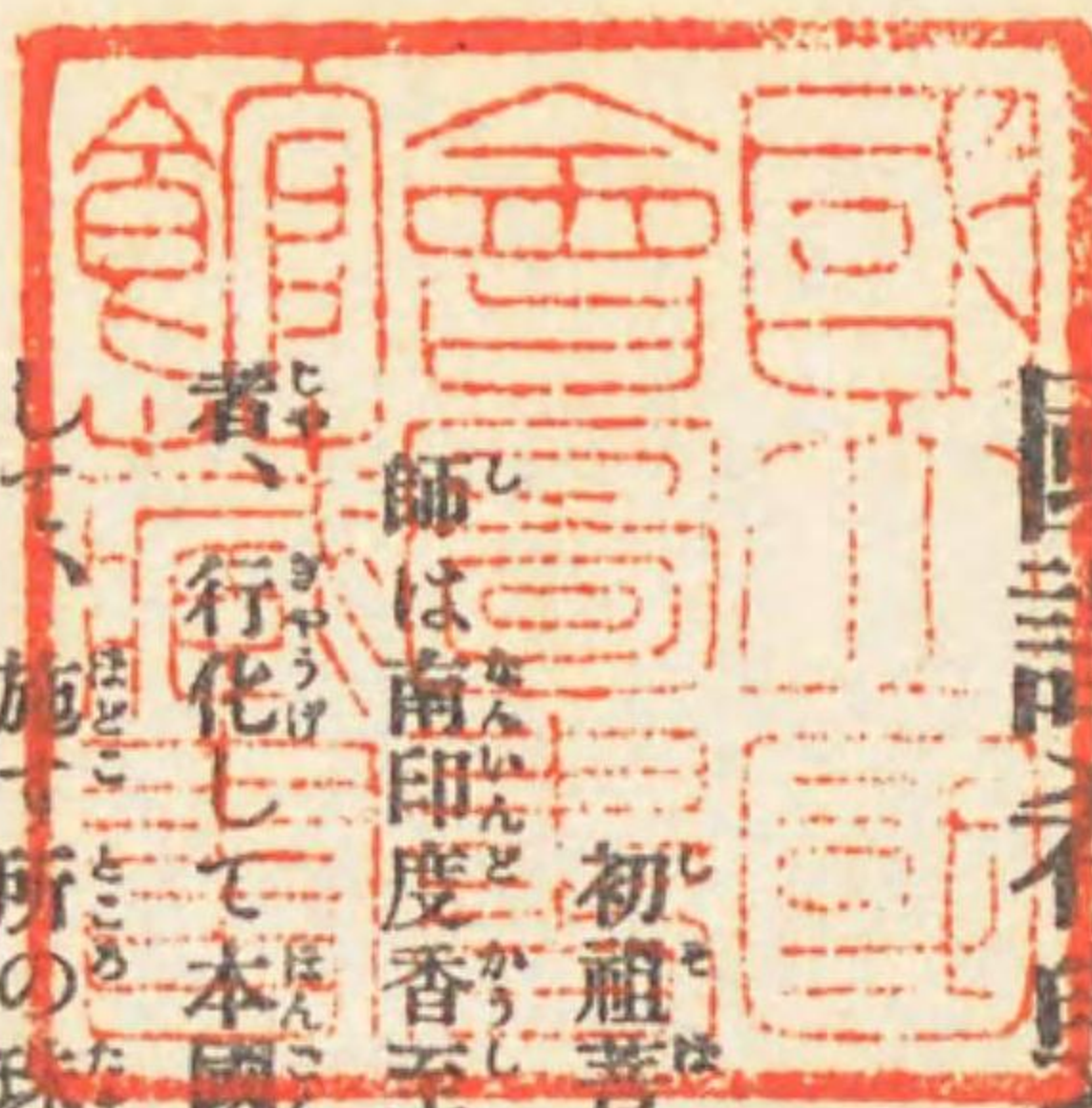
截り髪を續ぐ、倒用横施し、著々出身の路あり、肯て、桎梏籠檻せられて、分に甘じて淺丈夫とならんや。愚、生や魯なり、瘦藤に月を挑げ、破竺に雲を包む、江湖に奔走すること幾ど

其の眼膜を刮る云々、と。  
①寶祐は宋の理宗皇帝の年號、日本の建長六年に當る。  
②靈鷲は靈隱寺の方丈の額、放山室は室中の額也。

五十歳、透關の眼未だ甚だ明かならず、至理の言未だ甚だ的しからずと雖も、然も古人不恰好の處に於て略ぼ涯溪を窺ふ。試に五彩を將て太虚を、黼黻す、其の力を量らざるに似たり。前に謂ゆる褒貶抑揚、當に、金鐘膜を刮つて語を出せば、群を驚かす者を俟つて、重ねて爲に點發すべし。然りと雖も翠巖の眉毛、寧ろ地に拖くことを免れんや。

③寶祐甲寅、西蜀の比丘、紹曇百拜して、靈鷲の放山堂に書す。

# 國譯希叟和尚五家正宗贊



初祖菩提達磨大師

師は南印度香至王の子なり、姓は刹帝利にして本名は菩提多羅と云ふ。因みに二十七祖般若多羅尊者、行化して本國に至る、其の王無價の寶珠を施す、時に王に三子あり、尊者其の所得を試みんと欲し、施す所の珠を以て三王子に問うて曰く、「此の珠圓明なり、能く此に及ぶものありや否や。」師曰く、「此は是れ世寶、未だ上と爲すに足らず、諸寶の中に於て法寶を上とす。

此は是れ世光未だ上となすに足らず、諸光の中に於て智光を上となす。此は是れ世明未だ上となすに足らず、諸明の中に於て心明を上となす。此の珠、光明なれども自ら照すと能はず。要す智光を假りて此を光辨せんこと、既に此を辨じ已つて即ち是れ珠なることを知る。既に是れ珠なることを知つて、即ち其の寶なることを明む。若し其の寶を明むれば、寶自ら寶ならず、若し其の珠を辨すれば珠自ら珠ならず。珠自ら珠とせざれば要す智珠を假りて、而して世珠を辨す。寶自ら寶ならざれば要す智寶を假りて以て法寶を明めん」と。然らば則ち師に其の道あれば、其の寶即ち現す。衆生道あれば心寶も亦然り。

④正宗贊は、初祖を首として臨濟、曹洞、靈門、鴻仰、法眼、五家の正傳諸師の繼統を記述したるものなり。



尊者其の辨慧なることを歎じて、改めて菩提達磨と號す。香至厭世の後に及んで遂に出家しぬ。師六宗を降す、一には有相と曰ひ、二には無相と曰ひ、三には定慧と曰ひ、四には戒行と曰ひ、五には無得と曰ひ、六には寂靜と曰ふ。後に異見王の三寶を輕毀するに値ふ。弟子宗勝と云ふものあり、潛かに王の所に至つて廣く法要を説き、往返徵詰す。師懸かに宗勝が義墮することを知つて、遽かに波羅提に告げて曰く、「汝速かに救ふべし。」羅提稟して云く、「願はくは神力を假らん。」言ひ已つて雲、足下に生ず。王の前に至つて默然として住す。時に王正しく宗勝に問ふ、忽ちに羅提が雲に乗じて至るを見て、愕然として其の問答を忘る。曰く、「空に乗するの者は是れ正か是れ邪か。」答へて曰く、「我れ正を邪とするに非ずして、來つて邪を正にす、王の心若し正しければ我に正を邪とする無けん。」王驚異すと雖も、而も慢心方に熾なり、即ち宗勝を擯して出さしむ。羅提曰く、「王既に有道なり、何ぞ沙門を擯する、我解なしと雖も願はくは王問を致せ。」王怒つて問うて曰く、「何者か是れ佛。」答へて曰く、「見性はれ佛。」王曰く、「師見性するや否や。」答へて曰く、「我佛性を見る。」王曰く、「性何れの處にか在る。」答へて曰く、「性は作用に在り。」王曰く、「是れ何の作用ぞ、我今見ず。」答へて曰く、「今見、作用す、王自ら見ず。」王曰く、「我に於て有りや否や。」答へて曰く、「王若し作用せば是ならざる有ることなけん、王若し用ひずんば體も亦見難し。」王曰く、「若し用ふる時に當つて幾處にか出現する。」答へて曰く、「若し出現する時、當に其の八を有つべし。」王曰く、「其の八の出現、當に我が爲めに説くべし。」羅提、

偈を説いて曰く、「胎に在りては身れたりとなす、世に處しては人と爲り、眼に在りては見と曰ひ、耳に在りては聞と曰ひ、鼻に在りては香を辨じ、口に在りては談論し、手に在りては執捉し、足に在りては運奔す、遍く現すれば俱に沙界を該ね、收攝するときは一微塵に在り、識る者は是れ佛性なることを知る、識らざれば喚んで精魂と作す。」王偈を聞き已つて、心即ち開悟し、乃ち前衆を悔謝し、法要を咨詢す。師一日曰く、「吾れ赤縣神州を觀るに大根器あり、遂に海を踰え漠を越えて法の爲めに人を求む。初め至つて梁の武帝に見ゆ。帝問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。」師曰く、「廓然無聖。」帝曰く、「朕に對する者は誰ぞ。」師曰く、「不識。」帝契はず、遂に蘆を折つて江を渡つて少林に至り、面壁九年、二祖を深雪の中に得たり。曾て謂つて曰く、「外諸縁を息め、内心喘ぐことなし、心牆壁の如くにして以て道に入るべし」と。後に衣を傳へ偈を付して曰く、「吾本茲の土に來つて法を傳へて迷情を救ふ、一花五葉を開いて結果自然に成す。流支光統數々藥害を加ふ。」第六度に至つて遂に救はず、識して曰く、「江槎玉浪を分つ、管炬金鎖を開く、五口相共に行く、九十にして彼我なし。」師縁の盡くることを知つて、天竺に返らんと欲し、弟子をして各其の志を言はしむ。道副は皮を得、總持は肉を得、道育は骨を得、二祖は髓を得たり。師入滅の後、熊耳に葬る、後に宋雲西域に使用して還る、師に葱嶺に遇ふ。師を見るに手に隻履を携へて返る。歸つて帝に奏す。壙を開くに果して空棺隻履の存するを見る。



贊に曰く、「隆準龍顏碧暉天の相あり。」

金輪を棄て聖道の爲めに出家す。寶珠を辨じて阿師と相抗す。

足雲を生ず、弟子を驅つて異見の邪を除く。舌瀾を翻す、合國の六宗の謗を起すに聽す。

神州赤縣大乘の根を接す。東土西天禪僧の様を示す。

廓然無聖、龍鱗に逆つて一葦江を横る。寂爾として心を觀す、鬼窟に坐して九年象を摸る。

一花五葉を開く、庭雪の人腰を没するに放す。毒藥醍醐と作る、江

槎の玉浪を分つて笑ふ。

牆の如く壁の如し、幾か會て教外別傳に當らん。髓を分ち皮を分つ、

正に好し手中の痛棒を喫するに。

死を詐つて忙しく隻履を携へて歸る。惜しい哉大唐國一時の人、眼を開いて胡兒に欺誑せらるゝことを。」

曹溪六祖大鑑禪師

師諱は慧能、新州の人、俗姓は盧、家貧しうして樵采して以て給す。一日樵を負ひて市に至る。金剛經を誦するを聞き、應無所住而生其心の處に至つて、悚然として客に問うて曰く、「此れ何の法ぞや、何人にか得たる。」客曰く、「此は金剛經と名く、黃梅の忍大師に得たり。」師遂に其の母に白す。「黃梅

に至つて五祖に謁せん」と。祖曰く、「汝何れよりして來る。」曰く、「嶺南。」祖曰く、「何事を須めんと欲す。」曰く、「惟作佛を求む。」祖曰く、「嶺南の人佛性無し、若爲か作佛せん。」曰く、「人に南北あるも佛性

豈然らんや。」祖之を異とし、乃ち曰く、「槽廠に着き去れ。」と。師禮して退く。遂に石を負うて米を舂く。後に人、北秀の頰を擧するを聞く、曰く、「身は菩提樹に似て心は明鏡臺の如し。時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かむることなけれ。」師即ち人を倩ふて偈を其の傍に書して曰く、「菩提本樹なし、

明鏡亦臺に非ず。本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん。」祖因みに衣鉢を付して潛かに大庾嶺に至らしむ。明上座之を逐ふ、師衣を以て石上に置いて曰く、「此の衣は信を表す、力を以て争ふべけんや。」明曰く、「我來つて法を求む、衣の爲めにするに非ざるなり。」師曰く、「不思議不思議、正恁麼の時如何んが是れ明上座が父母未生以前、本來の面目。」明大悟す。師、儀鳳元年丙子正月八日に於て南海に届る。印宗法師の法性寺に於て經を講ずるに遇うて、二僧の風幡を辨ずるを聞くに、一りは風動くと云ひ、一りは幡動くと云ひ、これを争うて已まず。師曰く、「俗流の輒く高論に預ることを容すべけんや否や、直ちに風幡の動くに非ず、自心を動ずると云ふを以てのみ。」印宗之を聞いて遂に與に披剃す。韶州の刺史韋據大梵寺に請うて法論を轉じ、并に無相心地戒を受く。門人紀錄して目けて壇經と爲す。南嶽の讓和尚因みに嵩山の安和尚之を啓發す。乃ち直に詣つて師に參す。師問うて曰く、

相抗。抗は抵なり、敵なり、「たてつく」と譯す。

黃梅の上に願の字を加へ、祖曰の上に既にして黃梅に至るの九字を加へたらば、文意通曉し易し。

槽廠は碓房なり、吾が邦の謂ゆる米搗部屋なり。

五祖の高足神秀大師なり。披剃は衣を披き頭を剃り、六祖の弟子となるを謂ふ。



「什麼の處よりか来る。」岳曰く、「嵩山より来る。」師曰く、「什麼物か恁麼に來る。」曰く、「一物を説似するに即ち中らす。」師曰く、「還つて修證を假るや否や。」曰く、「修證は即ち無きにあらず、汗染すること即ち得ず。」師曰く、「即ち此の不汗染、諸佛の護念する所、汝既に是くの如し、吾も亦是くの如し。」と。青原和尚、師に參じて問うて曰く、「當に何の所務か即ち階級に落ちざるべき。」師曰く、「汝曾て什麼をか作し來る。」原曰く、「聖諦も亦爲さず。」師曰く、「何の階級にか落つる。」原曰く、「聖諦も尚ほ爲さず、何の階級かこれあらん。」師深く之を肯ふ。師將に順寂せんとするときに新州に往かんと欲す。衆曰く、「師此より去つて 早晚却回せん。」師曰く、「葉落ちて根に歸す、來時口無し。」又偈を説いて曰く、「心地諸種を含む、普雨に悉く皆生ず、頓に花情を悟り已つて、菩提果自ら成ず。」と。

贊に曰く、「靈旦の心宗、嶺南の蠻種。一字書を識らず、採薪母の奉を勤む。黄梅の確頭、棘に和して搗き出す。石墜ちて腰の輕きを覺ゆ。新州市上平地に顛翻す、擔折れて柴の重きを知る。鱷魚の眼睛光轉々、明上座の衣鉢の爲めに争ふことを喚る。毒蛇の口氣冷氷々、印宗僧風幡の

① 説似。の似は呈似の似。「しめす」と訓す、碧巖一に、「似過份」とあり。  
② 早晚。本義を轉じて「いつか」「いまごろ」「ほどなく」などの義あり、今は「いつか」と譯すべし。今ごろはゆくであらうと云ふを肯ふ。早晚想の是れ去らんと云ふほどなり。回りますと云ふを早晚回來と云ふ、又何の時ぞと云ふことにもなる。雲門錄中十七、「今日早晚也」とあり、これは曲禮の視日蚤莫に基くなり。  
③ 石墜。墜は「ぶらさげる」なり。初祖の耳に墜金環、或扇墜とあり、皆同じ。

動するに非ざることを斥る。

汗染すること得ず、南岳の家財を蕩かして一物無し。聖諦すら尚ほ爲さず、青原の波浪を鼓して

千尋湧く。

作家の爐竈を開く、村獠猿幾塊の精金を收む。成帙の壇經を説く、臭皮囊許多の骨董をか盛る。

葉落ち根に歸る來時口無し、死款翻し難し。地諸種を含んで普雨

に皆生ず、眼を開いて夢を説く。

千古曹溪鏡樣清し、劈箭截流の機に非ずんば、浸殺する底は何の用を作

すに堪へん。」

江西馬祖禪師

師諱は道一、漢州什邡の人、姓は馬氏、容貌奇異にして、虎の如く視、

牛の如く行く、法を南岳に得たり。後蜀に歸る、鄉人喧しく之を迎ふ。

溪邊の婆子云く、「將さに謂へり、何の奇特か有る、元是れ馬簸箕家の小子

なり。師遂に曰く、「君に勸む郷に還ること莫れ、郷に還らば道成せず、溪邊の老婆子我が舊時の名を喚

ぶ。」再び江西に返る。西天の二十七祖般若多羅、識して云く、「金鷄一粒の粟を啣むことを解して、十方

の羅漢僧に供養す。」六祖南嶽に謂つて云く、「爾後一馬駒を出して天下の人を踏殺し去ること任らん」

④ 村獠猿。村は「いなか」と云ふこと。獠猿は猿表の左右にある夷なり、蟲鼠などを食ふ、正字通に詳かなり。  
⑤ 死款。死罪に極つた口書きなり、難翻は「しなほされぬ」なり、口書きを「しなほす」を翻款と云ふ、碧巖に番に作る。  
⑥ 劈箭。矢をきつてはなつなり、劈は勢をかたどる字なり。



と。石鞏、獵を爲せし時、師の庵前より過ぐ。師見て問うて曰く、「汝は是れ何人ぞ。」曰く、「獵者。」師曰く、「汝射を解すや否や。」曰く、「射を解す。」師曰く、「汝一箭に幾箇をか射る。」曰く、「一箭に一箇を射る。」師曰く、「汝は射を解せず。」曰く、「和尚射を解すや否や。」師曰く、「射を解す。」曰く、「一箭幾箇を射る。」師曰く、「一箭に一群を射る。」曰く、「彼此生命なり、何ぞ他の一群を射ることを用ひん。」師曰く、「汝既に是くの如きことを知らば、何ぞ自ら射ざる。」曰く、「若し某甲をして自ら射さしめなば、直に是れ手を下す處無けん。」師曰く、「者の漢曠劫の無明、一時に頓に息む。」鞏遂に弓箭を擲つて師に投じて出家す。師百丈と行く次で、水鴨を見る、師問ふ、「水鴨子何れの處に在る。」丈曰く、「飛び過ぎ去れり。」師遂に丈の鼻を捏る、丈痛の聲を作す。師曰く、「又道ふ、飛び過ぎ去ると。」丈乃ち省あり、遂に寮中に歸つて大いに哭す。同事問うて曰く、「何の事か有る。」丈曰く、「汝去つて和尚に問へ。」同事方丈に往いて問うて曰く、「知らず海侍者何事有つてか哭する、某甲をして來つて和尚に問はしむ。」師曰く、「汝自ら去つて他に問へ。」同事歸つて問ふ、丈大いに笑ふ。同事曰く、「適來は哭し、而も今は笑ふ。」丈曰く、「適來は哭し、而も今は笑ふ。」龐居士參する次で、問うて曰く、「萬法と侶たらざるものは、是れ什麼人ぞ。」師云く、「汝が一口に西江水を吸盡せんことを待つて、即ち汝に向つて道はん。」士此に於て省あり。師百丈、南泉、智藏と月を翫ぶ次で、師曰く、「正恁麼の時如何ん。」藏曰く、「正好修行。」丈曰く、「正好供養。」南泉拂袖して便ち行

① 適來。「さきほど」「いまがた」と譯す、適纒、適間とも云ふ。

く。師曰く、「經は藏に歸し、禪は海に歸す、唯普願のみ有つて獨り物外に超ゆ。」後寂を泐潭に示す。

贊に曰く、「虎視牛行、虬髯鐵面。」

菩提達磨の心宗を滅し、般若多羅の懸識に應ず。

金雞一粒の粟を啣むことを解す、禍蘖潛かに萌す。馬駒天下の人を踏み殺す、惡聲掩ひ難し。

鹿を射て石鞏無明の蕩除を印す。鴨を過して百丈の鼻頭を將て捏轉す。

江を吸ふ口、龐公を壑殺し。月を翫ぶ機、普願を坑埋す。

八十四人阿鞞々、團を成して破驢脊上の蒼蠅の如し。七千餘里走つ

② 壑殺。壑、同音、築拳は「にぎりこぶし」にてつくりなり。

て區々、人に馬篋箕家の小団と喚ばる。

赤手にして曹溪の正脈を返す、古今宗派を分つて滔々たり。即心臨濟の克家を得、兒孫傳燈に上

つて衰々たり。

稽首す真空の大法王、蕩々乎として民得て稱すること無けん。踪由を竟めんと擬すれば太虛の閃

電。

南嶽石頭禪師

師は青原に嗣ぐ、諱は希遷、端州の人、姓は陳氏。俗に在りし時、毎に鄉洞の民の淫祀多きことを厭うて、輒ち牛を奪ひ祀を毀つて歸る、郷老禁すること能はず。師青原に參す。原書を馳せて南嶽に



與へしめて曰く、「汝書を達し了つて速かに吾に回れ、箇の鉗斧子あり、汝に與へて住山し去らしめん。」師彼に至つて未だ書を呈せず、便ち問ふ、「諸聖をも慕はず、己靈をも重せざる時如何ん。」讓曰く、「子か問、太高生何ぞ向下に問はざる。」師曰く、「寧ろ永劫に沈淪すべくとも、諸聖の解脱を求めじ。」讓便ち休す。師回る、原問うて曰く、「子去ること未だ久しからず、書を送つて達するや否や。」師曰く、「信も亦通せず、書も亦達せず、去りし時和尚の箇の鉗斧子を許すことを蒙る。」便ち請ふ、原一足を垂る、師禮拜す。異日に問ふ、「曹溪大師還つて和尚を識るや否や。」原曰く、「汝還つて吾を識るや否や。」師曰く、「識るとも又争でか能く識らん。」原曰く、「衆角多しと雖も一麟足れり。」と。師一日夢らく、六祖と與に一龜に乗じて深池に游泳す、覺めて之を原して曰く、「靈龜は智なり、池は聖海なり、吾れ祖師と同じく靈智に乘じ聖海に遊ぶ。」と。師天寶の間衡山に之く。南寺の東に石あり、狀臺の如し、乃ち庵を其の上につく、時に石頭和尚と號す。鄧隱峰、馬祖を辭す、祖問ふ、「甚麼の處にか去る。」峯曰く、「石頭に去らん。」祖曰く、「石頭路滑かなり。」峯曰く、「竿木身に隨ふ、場に逢うて戯を作さん。」便ち行く、師の處に到りて禪床を繞ること一匝、錫を振ふこと一下して、乃ち問ふ、「是れ何の宗旨ぞ。」師曰く、「蒼天々々。」峯無語、卻回して祖に舉似す、祖曰く、「更に去つて問へ、他

①原之。原夢は「ゆめはんじ」の事なり。原は推原也と注す。正字通に「占夢以決吉凶」曰「圓夢」唐音にて原は「よゑん」圓は「ゑん」也、音相近し。②對馬にて朝鮮の使者渡る時、以厨庵へ「かるわざ」師を連れ來つて、藝をなさしむるに、竿柱綱などを持ち來り、庭に柱を立て、竿綱をわたし、樂に合せて「かるわざ」をするこ

の答有らんを待つて、汝嘘すること兩聲せよ。」峯再び去つて前の如くに問ふ。師嘘する兩聲、峯又語無し、回つて祖に舉似す。祖云く、「汝に向つて道ふ、石頭路滑かと。」藥山一日石上に在つて坐す、師見て問うて曰く、「汝者裏に在つて什麼をか作す。」山曰く、「一物も爲さず。」師曰く、「恁麼ならば則ち閑坐せり。」山曰く、「閑坐ならば即ち爲さん。」師曰く、「汝道ふ、爲さずと、箇の什麼をか爲さざる。」山曰く、「千聖も亦識らず。」師乃ち偈を以て之を歎じて曰く、「從來共に住して名を知らず、任運に相將めて只麼に行く、古より上賢猶ほ識らず、造次の流豈明むべけんや。」と。僧問ふ、「如何か是れ禪。」答へて曰く、「碌碌。」「如何か是れ道。」答へて曰く、「木頭」と。師參同契、草庵歌を著はす、世に行はる。賛に曰く、「端州の生緣、曹溪の得度。鰲鼻蛇の毒人を傷つくることを要するや、破鏡鳥の心専ら母を食す。洞民多く淫祀することを厭ふ、叢祀を毀つて牛を奪うて歸る。嶽僧の與に信書を通ず、鉗斧を挾んで住山し去る。衆角多しと雖も一麟足れり。又争でか能く青原を識得せん。深池同じく一龜に載せて遊ぶ、竟に

となり、唐土の「かるわざ」師は竿木等を持ちあるき、所望の場所にて戯をすることを見ゆ。鄧隱峰の石頭路滑の答語に用ひられし、「かるわざ」と見てよく當るなり。「かるわざ」師なれば路のすべる位の事は苦にせぬと云ふ意なり、違場作は戯は演劇の事にも用ふれども、竿木隨身と云ふにて「かるわざ」の事になるなり、楞嚴義疏疏方語解に引く。水滸傳二十六回に曰く、「江湖上の行院妓女之人、他の們是衝」府邊場作戲云々、と、これは旅がけの舞兒芝居の様子を云ふなり。



何ぞ曾て夢にも六祖を見ん。

機に臨んで滑路多し、隱峯を推して手を束ねて懸崖より墮す。共に住して名を知らず、藥山に對して熟睡譚語饒し。

貼身の死計、磐石に坐して雲を生ず。口に信せて禪を答ふ、碌碌抛つて雨に似たり。

青松下閑かに一曲を謠ふ、草庵の歌宮商に落ちず。亂山の中狂叫すること數聲、參同契是れ何の言句ぞ。

惜しいかな曹溪旁ら一枝を出して、情忘じ義斷する時に到つて、五逆の孫を生じて不孝の子に繼がしむることを。」

南泉願禪師

師諱は普願、鄭州の人、姓は王氏、初め馬祖に見えて契悟し、後南泉に住す。上堂に曰く、「王老師少きより一頭の水牯牛を養ふ、溪東に向つて牧せんと擬すれば、他の國王の水草を食ふことを免れず。如かず分に随つて些々を納れて總に見得せざらんには。山下に一庵主あり、人謂つて曰く、「近日南泉和尚出世す、何ぞ去つて禮拜せざる。」曰く、「但南泉の出世のみに非ず、直饒ひ千佛出興すとも我れ亦去らじ。」師聞いて乃ち趙州をして、去つて勸せしむ。州去つて便ち禮を設く。主願みず、州西より

貼身は身をはなれぬ身にせまつた也、貼肉汗衫の貼肉の意、死計はせんじつめた計なり。納は年貢を納めるなり。

東に過ぎ、東より西に過ぐ、主亦願みず。州曰く、「草賊大敗」と。遂に簾子を扱き下す、便ち歸りて

師に舉似す。師曰く、「我れ從來者の漢を疑着す。」と。師一日莊に到る、莊主預め油糍を備へて迎奉す。

師曰く、「老僧居常出入人の與めに知らず、何ぞ排辨すること此くの如くなるを得たる。」主曰く、「昨夜

土地報じて道ふ、「和尚今日來らんと」と。師曰く、「王老師修行力無くして鬼神に覩見せらる。」時に

僧あり、問ふ、「既に是れ大善知識、什麼としてか卻つて鬼神に覩見せらる。」師曰く、「土地前に更に一

分の飯を下せ。」一日兩堂首座、貓兒を争ふ、來つて師に白す、師刀を持ち

貓兒を提起して曰く、「道ひ得ば即ち貓兒を救取せん、道ひ得ずんば即ち斬

卻せん。」二り俱に對なし、師便ち之を斬る。晚に至つて趙州外より歸る。師

前話を舉して之に示す。趙州鞋を脱して頭上に安んじて便ち出づ。師曰く、「子若し在らば貓兒を救ひ得ん。」衆に示して曰く、「王老師身を賣り去ら

ん、阿誰か買はん。」時に僧あり、衆を出で、曰く、「某甲買はん。」師曰く、「貴きことを作さず、賤きことを作さず、汝作廢生か買はん。」僧對なし、僧

問ふ、「師丈室に居る、何を將てか指南せん。」師曰く、「昨夜三更牛を失卻す、天明起き來つて火を失

卻す。」師山に在り、作務する次で、僧問ふ、「南泉の路甚れの處に向つてか去る。」師鎌子を拈起して云

く、「我者の鎌子三十錢買ひ得たり。」僧曰く、「茅鎌子問はず、南泉の路甚れの處に向つて去る。」師曰く、

①草賊、書叙指南に盜の藏避を穿草石と謂ふと、又山栖草藏とも曰ふ。  
②土地神なり。  
③一人前の飯なり、一人扶持を一分の請受と云ふ。  
④衆の上に師一日の三字を置けば見易し。  
⑤手あやまちなり。



①「我使ひ得て正に快なり。」陸亘大夫、人と雙陸する次で、師を見る、陸散子を指して曰く、「慙麼不慙麼、彩に信せ去る時如何ん。」師散子を拈起して云く、「臭骨頭十八」と。陸又問ふ、「弟子家中に一片の石あり、或時は坐し或時は臥す、如今鐫つて佛と作さん、得てんや否や。」師曰く、「得てん。」陸曰く、「得ざることなしや否や。」師曰く、「得ざらん。」師、住庵の時、一僧到る、師向つて道ふ、「我れ山上つて作務せん、齋時を待つて飯を作して自ら喫したつて、一分を送つて上來せよ。」少時あつて其の僧自ら作して喫したつて、一時に、家生を打破し、師の床に就いて臥す。師待てども來らず、歸つて僧の床上に臥するを見て、師も亦邊に就いて臥す。僧便ち起ち去る。師後に曰く、「我往前に住庵の時、箇の伶俐の道者あり、今に至るまで消息を見ず。」陸亘一日師に向つて道ふ、「肇法師また奇怪、道ふことを解す、天地と我と同根、萬物我と一體と。」師庭前の花を指して曰く、「大夫時の人、此の一株の花を見て夢の如くに相似たり。」陸測ることなし。師座主に問うて曰く、「我が與めに經を講じ得てんや。」座曰く、「某甲、和尚のために經を講せん、和尚、某甲のために禪を説かば始て得てん。」師曰く、「金彈子を將て銀彈子に博へ去るべからず。」と。上堂に曰く、「諸和子、王老師十八上にして活計を作すことを解す、如今活計を作すことを解するものありや、出で來れ、汝と共に商量せん。須らく是れ住山の人にして始

- ① おれが使ふ鎌、よくきれるなり。
- ② 穀音當、繫に博陸の采具、故に臭骨頭と云ふ、十八は出た采の目なり。
- ③ 采の目の出しだいななり。
- ④ 道具なり、會元に家事に作る、即家具なり。
- ⑤ 牡丹花なり。

めて得べし。良久して大衆を顧視して合掌して曰く、「珍重無事、各自に修行せよ。」一日甘贊行者來つて粥を設けて云く、「請ふ、和尚念誦せよ。」師云く、「甘贊行者粥を設く、請ふ、大衆狸奴白牯の爲めに摩訶般若波羅密を念せよ。」贊禮拜して便ち出で去る。師厨内に到つて鍋子を打破す。贊に曰く、「咄這の王老師、遍地に荆棘を栽う。牯牛を東西の溪上に牧す。索頭手に在りて未だ放牧することを會せず。猫兒を上下の堂前に斬る。暗地に繩を緝す、曲直を分ち難し。亂りに散子を抛つ、臭骨頭十八點喝し成す、錯つて路頭を指し、茅鎌子三十錢に買ひ得たり。貴と作さず賤と作さず、渾身を賣る、誰か肯て商量せん、火を失卻す、丈室に居して何の奇特かある。鬼神に戯見し了らる、莊上に片油糍を喫す。趙州と相見し來る、鎮州に大蘿蔔を出す。一株の花夢の如くに相似たり、孰か云ふ天地同根と。十八歳活計做成す、兒孫をして則を取らしむ。陸亘に坐石を開鐫することを許す、惡を逐ひ邪に隨ふ。甘贊が爲めに粥鍋を打破す。門を開いて賊を放つ。

佛出世すとも亦去らず、誓頭の庵主未だ狐疑を免れず。

飯飽いて後恣に瞌眠す、靈利の道者消



息を知らず。

金彈子を將て銀彈子に換ふ、長處多きことなし。

硬ひて阿鞞々の善知識と做らんことを要す。」

百丈大智禪師

師は馬祖に嗣ぐ、諱は懷海、福州の人、姓は王氏。師再び祖に參じ、侍立する次で、祖繩床角の拂子を目視す。師曰く、「此の用に即するか、此の用を離るか。祖曰く、「汝向後兩片皮を開いて何を將てか、人の爲めにせん。」師、拂子を取つて堅起す。祖曰く、「此の用に即するか、此の用を離るか。」師拂子を舊處に掛く。祖威を震ひて一喝す。師便ち禮拜す。後に檀信洪州新吳の界に請じて、大雄山に住せしむ。居處巖巒峻嶮、故に百丈と號す。師之に處し、未だ期月ならざるに、參立の士四方より群集す。瀉山、黃檗其の首に當る。一日師衆に謂つて曰く、「佛法は是れ小事にあらず。老僧昔馬大師に一喝せられて直に得たり、三日耳聾することを」と。黃檗聞いて覺えず舌を吐く。師曰く、「子、已後に馬祖に承嗣し去ることなしや。」葉云く、「然らず、今日和尚の擧するに因つて馬祖の大機大用を見ることを得たり、然れども且つ馬祖を識らず、若し馬祖に嗣がば已後に我が兒孫を喪せん。師曰く、「見、師と齊しうして師の半徳を減す。見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり、子甚だ超師の見あり。」葉便ち禮拜す。師上堂する毎に一老人有り、衆に隨うて法を聽く。一日衆退く、唯老人のみ去らず。師問ふ、「汝は是れ何人ぞ。」老人曰く、「某は非人なり、過去迦葉佛の時に於て曾て此の山に

住す。因に學人間ふ、「大修行の人還つて因果に落つるやまた無や。」某曰く、「因果に落ちず、遂に五百世野狐身に墮す。今請ふ和尚代つて一轉せよ、貴はくば野狐身を脱せんことを。」師曰く、「爾、問へ。」老曰く、「大修行の人還つて因果に落つるやまた無や。」師曰く、「不味因果」と。老言下に於て大悟し、作禮して曰く、「某已に野狐の身を脱して山後に住す、敢て乞ふ、亡僧の津送に依れ。」師維那をして白槌して衆に告げしめ、「食後に亡僧を送らん」と。食後に師、衆を領めて山後の巖下に至り、杖を以て一死狐を挑出す。乃ち法に依つて火葬す。司馬頭陀、湖南より來つて師を見て云く、「瀉山奇絶、千五百の衆を聚むべし。」師曰く、「老僧住せんと欲する、可ならんか。」陀曰く、「和尚の所住に非ず。」師曰く、「何ぞや。」陀曰く、「和尚は是れ骨人、彼は是れ肉山、設ひ之に居るとも徒干に盈たす。」師曰く、「吾が衆中人の住し得ることなしや否や。」陀曰く、「待て、之を歴觀せん。」師侍者をして第一座を喚び來らしむ。師曰く、「此の人如何ん。」陀警效して行くこと數歩せしむ。曰く、「此の人不可なり。」又典座を喚び來らしむ。陀曰く、「此れ正に是れ瀉山の主なり。」師是の夜祐を召して室に入れ、囑して曰く、「吾れ化緣此に在り、瀉山の勝境、汝當に之に居るべし、吾が宗を嗣續して廣く後學を度せよ。」時に華林之を聞いて曰く、「某甲忝くも上首に居す、祐公何ぞ住持を得ん。」師曰く、「若し能く衆に對して一轉語を下し得て出格ならば、當に住持を與ふべし。」即ち淨瓶を指して問うて曰く、「喚んで淨瓶と作すことを得ざれば、汝喚んで什麼と作さん。」華曰く、「喚んで、木楔と作すべからず。」師肯はず。乃ち祐に問ふ、祐淨瓶を



踢倒す。師笑つて曰く、「第一座山子に輸卻す。」と。祐遂に往く。師清規を作  
る。賛に曰く、「出格の 胚暉、鈞陶の巧匠。

瘦骨稜々玉削り成す、碧眸閃々星流の様。

野狐を脱して不味因果、知んぬ歴代賛すること幾何ぞ、罵ること幾何ぞ。  
水鴨を闘はしめて便宜に落盡す、走つて家に歸つて哭一笑一上。

淨瓶踢倒、山子の鏝を荷ふて干峯に入つて放す。拂子拈じ來  
る、馬師の平地に青幃を埋むることを怪しむ。

一生鼻頭痛し、骨を刻む冤消融し易からず。三日 耳朶聾す、心に入  
つて毒卒に洗蕩し難し。

共に惡業蛟龍の窟に遊ぶ、黃檗を子とし龐公を友とす。同じく生瘡  
虎兇の胎を奪ふ、南泉を兄とし知藏を弟とす。

清規井々、深く人を陥る、坑を掘る、華胃細々、密に縵天の網を布く。  
奇助を策つること叔孫通に減せず、老々 臊胡の輿に萬古の城池と作る、  
阿誰か近傍せん。」

趙州眞際禪師

師は南泉に嗣ぐ、諱は從諗、曹州の人、姓は郝氏。一日南泉に問うて曰

く、「如何んが是れ道。」泉曰く、「平常心是れ道。」師曰く、「還つて趣向すべき  
やまた無や。」曰く、「向はんと擬すれば即ち乗く。」師曰く、「擬せずんば争で

か是れ道なることを知らん。」曰く、「道は知にも屬せず不知にも屬せず、知  
は是れ妄覺、不知は是れ無記、若し眞に不疑の道に達しぬれば、猶ほ太虚の廓然虚豁たるが如し、

豈に強ひて是非すべけんや。」師言下に於て理を悟る。僧あり、五臺に遊ぶ、婆子に問うて曰く、「臺山  
の路甚れの處に向つて去る。」婆曰く、「慕直に去れ。」僧便ち去る。婆曰く、「好箇の師僧、又恁麼に去

る。」と、後僧、師に舉似す。師曰く、「我が去つて勘破せんを待て。」明日便ち去つて問ふ、「臺山の路甚れ  
の處に向つて去る。」婆云く、「慕直に去れ。」師便ち去る。婆曰く、「好箇の師僧、又恁麼に去る。」師歸つて

僧に謂つて曰く、「臺山の婆子、汝が爲めに勘破了せり。」と、僧問ふ、「久しく趙州の石橋と響く、到來す  
れば只略約を見る。」師曰く、「汝只略約を見て石橋を見ず。」曰く、「如何なるか是れ石橋。」師曰く、「驢

を度し馬を度す。」一日眞定の帥王公、諸子を携へて院に入る。師坐して問うて曰く、「大王會すや。」王  
曰く、「不會。」師曰く、「小より持齋して身已に老ゆ、人を見て禪床を下るに力無し。」王尤も禮重を加

ふ。僧問ふ、「狗子に還つて佛性ありやまた無や。」師曰く、「無。」僧云く、「一切衆生皆佛性あり、狗子甚  
に因つてか却つて無き。」師曰く、「伊が業識の在る有るが爲めに。」と。師黃檗に到る、檗來るを見て便ち

①木楔。未詳、教誠律儀指要鈔  
不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>著<sub>二</sub>木楔<sub>一</sub>向<sub>二</sub>尊宿前<sub>一</sub>  
行立<sub>上</sub>鈔、木楔者是木屐乎、  
證<sub>二</sub>木屐<sub>一</sub>又同十五、凡着<sub>二</sub>履  
襪<sub>一</sub>先令<sub>二</sub>脚根着<sub>レ</sub>地<sub>一</sub>勿<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>作  
聲、鈔、根合<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>跟<sub>一</sub>。  
②胚暉。當に坏墀に作るべし、  
正字通に、坏は佩の平聲と。  
瓦の未だ焼けざるなり。埤音  
魂、土なり、胚暉は、やきもの  
のしたちなり。  
③耳朶は耳を云ふなり、都べて  
ひつこり出でたことを朶と云  
ふ。成道記の註に、妙高山頂  
有<sub>二</sub>四朶<sub>一</sub>、每<sub>レ</sub>朶有<sub>二</sub>八天<sub>一</sub>と、  
江湖集に曰く、「朶々湖山千古  
佛、」と、靈隱の飛來峰又名<sub>二</sub>  
小朶峰<sub>一</sub>。富士山の寶永山の如  
し。一朶の雲、一朶花は一片  
の雲一輪の花なり。杜詩に「黃  
四娘家花滿<sub>レ</sub>蹊、千朶萬朶壓<sub>レ</sub>  
枝低と。眼根を滿朶朶に喩  
ふ、朶は一つふなり。字彙に朶  
曠は、小高貌、擊吐火切。」と。

④曠。説文に禾奥なり、字典に  
凡肉の腥き者、皆曰<sub>レ</sub>曠、老腥  
胡は初祖を抑下する辭なり、  
胡人は曠奥多き者なり、虚堂  
録に胡作<sub>レ</sub>曠。



方丈の門を閉づ。師乃ち火を把つて法堂に於て叫んで云く、「火を救へ火を救へ。」藥門を開き把住して曰く、「道へ、道へ。」師曰く、「賊過ぎて後、弓を張る。」と。茶菓に到り、主杖を法堂上に執へて東より西に過ぐ。莫曰く、「什麼をか作す。」師曰く、「水を探る。」莫曰く、「我が者裏は一滴もまた無し、箇の什麼をか探る。」師杖を以て壁に倚せさて、便ち行く。僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師曰く、「庭前の拍樹子。」と。後法眼、覺鏡背に問ふ、「聞く、趙州に柏樹子の話あり、是なりや否や。」覺曰く、「先師に此の語無し、先師を謗ることなくんば好し。」僧、雪峰に問ふ、「古澗寒泉の時如何ん。」峯曰く、「瞠目して底を見ず。」曰く、「飲む者如何ん。」曰く、「口より入らず。」師聞いて曰く、「鼻孔裏より入るべからず。」僧便ち問ふ、「古澗寒泉の時如何ん。」師曰く、「苦。」曰く、「飲む者如何ん。」曰く、「死。」と。僧雪峰に舉似す、峰遙かに望んで作禮して曰く、「趙州は古佛なり、此より答話せず。」嚴陽問ふ、「一物不將來の時如何ん。」師曰く、「放下著。」曰く、「既に是れ一物不將來、箇の什麼をか放下せん。」曰く、「放下下ならば、擔取し去れ。」と。嚴省あり。贊に曰く、「禪は口皮邊に在り、衲僧の眼を換盡す。

南泉の毒に中る、太虛寥廓豈に強ひて是非せんや、雪峰の心を死せしむ。古澗寒泉分明に剖判す。大王に見えて床を下つて接せず、吾が宗の法を尊ぶに人有ることを表す。庵主を勸して簾を拽下して歸る、王老の者の漢を疑着することを知る。

⑤ 瞠。目をみはるなり。

茶菓に水を探る、杖を靠くれば立どころに根を生ず。黄檗焚を救ひ、門を開いて膽を驚落す。

狗子無佛性、露刃劍冷鋒霜を含む、臺山婆を勘破す、葛藤椿一刀に截斷す。

覺鏡背先師に此の語無しと謂ふ、口を費して分疏す。嚴尊者一物

不將來を問ふ、全肩に荷擔す。

略約を架して唯馬を度し臚を度すのみに非ず、百世に亘つて沈迷を援

けて摩訶衍の岸に平歩せしむ。」

黄檗斷際禪師

師は百丈に嗣ぐ、諱は希運、閩人。初め天台に遊び一僧に逢ふ。之と言

笑すること舊識の如し。熟々之を視れば、目光人を射る、乃ち偕に行く、

澗水暴漲するに杖を植てて止る。其の僧、師を牽いて同じく度らんとす。

師曰く、「兄自ら度れ。」彼れ即ち衣を褰げて、足を躡んで波を履むこと地の

如し。師を回顧して曰く、「渡り來れ、渡り來れ。」師咄して曰く、「者の、自了の漢、吾れ早く知らば當に

汝が脛を斫るべし。」僧嘆じて曰く、「眞の大乗の法器なり、我が及ばざる所なり」と言ひ訖つて見えす。

百丈、一日師に問ふ、「甚れの處にか去り來る。」師曰く、「大雄山下に菌子を采り來る。」丈曰く、「還つ

て大蟲に見るや。」師便ち虎の聲を作す、丈斧を拈じて斫る勢を作す、師丈を打つこと一擲す、

② 分疏。「いゝわけ」と譯す。輾

耕録に「人之自辨白其事之是非こと、是を俗に分疏と云ふ。

又碧巖集の分疏不下は、「いひほどきえぬ」の義なり、疏疎同じ。

③ 自了の漢は聲聞の自利を求むるを謂ふ。

④ 大蟲とは、本草綱目に、「虎或曰ニ於菟、或曰ニ大蟲、或曰ニ李耳」とあり。

⑤ 擲は古獲切、靈要に掌にて打つなり。「ひらてゝたゝく」なり。



丈吟吟として笑つて便ち歸る。上堂曰く、「大雄山下に一の大蟲あり、汝等諸人也た須らく好く看よ、百丈老漢、今日親く一口に遭ふ、と。師南泉に在りて首座と作る。一日鉢を持して南泉の位に向つて坐す、泉堂に入り見えて、師に謂つて曰く、「首座幾時か行道する。」師曰く、「威音已前。」泉云く、「猶ほ是れ王老師が兒孫なること在り。」師遂に第二位に過ぐ。師辭す、泉門送して師の笠を提起して曰く、「長老、身材没量なるに大笠子は太だ小生なる。」師曰く、「然りと雖も、大千世界總に裏許に在り。」泉曰く、「王老師、寧ろ師笠を戴いて便ち行く。師鹽官に在りて殿上に佛を禮する次で、時に唐の宣宗沙彌たり。問うて云く、「佛に着いても求めず、法に着いても求めず、僧に着いても求めず、長老禮拜何の所爲なるべき。」師曰く、「佛に着いても求めず、法に着いても求めず、僧に着いても求めず、常に禮することは是の事の如し。」彌曰く、「禮を用ひて奚にかせん。」師、彌を掌す。彌曰く、「太巖生。」師曰く、「者裏是れ什麼の所在ぞ、庵と説き細と説く。」後へに隨つて又掌す。宗の即位に及んで乃ち封じて危行の沙門となす。裴相國之を諫めて曰く、「三掌は陛下の爲めに三際を斷ず、易て斷際となす。師曾て六人の新到あり、五人は禮を作す、中に一人あり、坐具を提起して一圓相を作す、師曰く、「我れ聞く、一隻の獵犬あり、甚だ悪しと。」僧曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」師曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」僧曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」師曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」

①吟々、唐音に「にんく」と譯す。字書に曰く「無笑義」と身裁にも作る、「からだ」の事なり。  
②寧ろ、差しつけた事。  
③宣宗なり。

に到るなし。曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」曰く、「羚羊の跡を尋ね來る。」則ち死羚羊なり。師便ち休し去る。明日陸堂曰く、「昨日羚羊を尋ねる僧出で來れ。」僧便ち出づ。師曰く、「昨日の公案未了、老僧休し去る。彌作廢生。」語なし。師曰く、「將に謂へり、是れ本色の衲子と、元來是れ義學の沙門と云ふて打出す。」示衆に云く、「汝等諸人盡く是れ。麴酒糟の漢、恁麼に行脚せば何れの處にか今日あらん。還つて大唐國裏に禪師なきことを知るや。」時に僧あり、出でて云く、「只諸方に徒を匡し、衆を領するが如き、又作廢生。」師曰く、「禪無しとは道はず、只是れ師なし。」と。師俗の時居貧しうして母老いたり、師の黄檗に住すと聞いて特に來つて相見す、師顧みず、母爲めに飢寒す、大義渡の頭にに至つて、失脚して顛死す。後果して天に生る。師に夢みえて曰く、「我當時若し汝が一粒の米を受けば、當に地獄に墮すべし、寧ろ今日あらんや」と再拜して去る。師一日拳を捏つて云く、「天下の老和尚、總に者裏に在り、我れ若し一線道を放さば汝が七縱八横なるに従す、若し放過せずんば一捏を消せず。」問ふ、「一捏を消せざる時如何ん。」師曰く、「普。」と。裴相國、一尊佛を捧げて前に跪いて曰く、「請ふ、師名を安せよ。」師喚んで、「裴休と曰ふ。」休曰く、「諾。」師曰く、「汝が興めに安名し竟れり。」千頃の南師に參す、師曰く、「未だ三界の影像を現せざる時如何ん。」南曰く、「即今豈是なることありや。」師曰く、「有無は且く置く、即

④麴酒糟、噎は玉篇に、「本醜醜」と。ほんの酒は得飲まず、糟を食ふて酔ふたやうな氣でゐると云ふ意也。即ち未得謂レ得、未證謂レ證の義なり。  
⑤問の上に僧字を加へて見るべし。



今如何ん。南曰く、「古今に非ず。師曰く、「吾れの法眼は已に汝が躬に在り。師曰く、「且く人事に當つて宜しく體會し得ること能はざるべし。但、言語を學んで皮袋裏に向つて安着することを知つて、到處に我れ禪を會すと稱し、還つて生死を替り得てんや。老宿を輕忽して地獄に入ること箭の如くならん。」

贊に曰く、「麤行の沙門、略ぼ拘檢なし、

大唐の天子を掌す、面血の紅なるに似たり、臨濟の⑤厮兒を打す棒雨

の點するが如し。

大雄山下に虎を突出す、未だ爪牙を具せず、大義渡頭に娘を擲殺す、恩

怨を分たす。

威音已前に在つて行道坐位を争うて、平地に⑥喫交す、百丈三日耳

聾すと云ふを聞いて驚いて舌を吐き、根に和して翻轉す。

羚羊蹤跡を絶す、軒かに獵犬の尋ね難きを知る、澗水波濤を漲らす、卻つて胡僧に⑦欺騙せら

る。

小笠大千世界を藏す、甚の處にか王老師を着けん、龜拳天下の師僧を捏る、有時一絲線を通

ず。

千頃の南を法眼汝に在ると謂ふ、剛ひて鬼分臈を要す、裴相國の爲めに古佛に名を安す、⑧白かに渠に汚染せらる。

盧酒糟の濃遠つて大唐國裏に禪師無きことを知るや、老僧を輕忽す、地獄に入ること箭の如し。

陸州陳尊宿

師諱は道蹤、俗姓は陳、江南、李王の裔なり。因に開元寺に遊び、佛を禮し僧を見ること故の如くす。歸つて父母に白し、出家を願求す、これを許す。受具して游方して旨に黃檗に契ふ。後四衆の爲めに請じて觀音寺に住す。常に百餘衆の學者咨扣す、問に隨つて速かに答ふ、詞語峻峻にして以て其の鋒に嬰るもの無し。是に由つて諸方尊宿を以て之を稱す。嘗て黃檗に首座となる。時に臨濟方に衆に入る、師目けて大器と爲し、指して檗に見えしめて佛法の主旨を問はしむ。檗三度棒を賜ふ。雲門初め師に參す、師、門を扇して雲の脚を撻折す。乃ち云く、「秦の時の⑨轆轤鎖。雲大悟す、仍つて雪峰に見えしむ。師後に開元に歸り、母の老いて親奉するなきを以て、閑房に居し、日に蒲鞋を織り、米に瀾いで供奉す、故に陳蒲鞋と號す。巢寇境に至る、師大履を城門に標す。巢力を盡せども擧ること能はず。歎じて陸州に大聖人ありと云ふて、城を舍てて去る、遂に擾ることを免る。師座主に問ふ、「什麼の經をか講す。」曰く、「涅槃經。」曰く、「一段の義を問はん、得てんや。」曰く、「得てん。師脚を以て

⑤ 厮兒は「でつち」と譯す。厮使は賤也、那斯(あやつ)這斯(こやつ)など。  
⑥ 喫頭と同じ、「こける」なり。大惠武庫願華嚴の章に「道一交一道、一交萬兩黄金也、合消」と。  
⑦ 騙は「かたる」事なり、杜騙新書と云ふ小説あり、「いろく」のたたりのはなし」を集めたる者なり。  
⑧ 白字「あからさま」と訓す、「みす／＼に」と云ふ意、白々地、平白地など云ふ。水滸傳十三回に「平白地要陷我做賊。」と  
⑨ 轆轤鎖は無用の者といふ義。



空中を踢つて吹一吹して曰く、「是れ什麼の義ぞ。」曰く、「經中に此の義無し。」曰く、「脱空謔語の漢、五百の力士石を掲ぐる義、却つて無しと道ふ。」一秀才あり、師を訪ふ、「二十四家の書を會す」と稱す。師拄杖を以て空中に點一點して曰く、「會すや。」才測ることなし。曰く、「二十四家の書を會すと道ふに永字の八法もまた識らず。」僧參する次で、師問ふ、「汝は是れ新到なりや否や。」曰く、「是。」曰く、「且つ葛藤を放下せよ、會すや。」曰く、「不會。」曰く、「擔枷 陳狀 自領出去。」僧便ち去る。師曰く、「來れ來れ、我實に汝に問ふ、甚れの處よりか來る。」曰く、「江西。」師曰く、「泐潭和尚、汝が背後に在りて爾が亂道することを怕る、見るや。」僧無語。師機に應じて多くして云ふ、「擔板漢」と。門牆峻峻にして許可あること少し。後に陳操尙書一人を接す。

贊に曰く、「者の漢一擔板、背て它人に移換せられんや。佛祖の命脈を斷ず、鉛刀を假らず、衲僧の眼睛を換ふ、只泥彈を消す。臨濟を指して黃檗に參せしむ、生蝮竹筒に入る、雲門を接して雪峰に嗣がしむ、烏龜鵝卵を生ず。五百の力士掲石の義、脚尖を將て處々に踢翻す、二十四家は破體の書、主杖を以て空中に點じて看せしむ。」

① 過状ともあるなり、狀は告狀、訴狀なり、擔枷陳狀は科定つて、枷を「おひなむら」告狀を「さし出す」なり。  
 ② 自領出去。これは決斷所の辭にて、「かゝりあひなし、」引きませいと云ふことなり。是は自身に「ひけ」と云ふことなり。阿役人が「つれかへる」は保領回家と云ふ。保は保人、うけ人なり、領は引領、「つれ」義なり。又領「自領」命の領と見ても可なり。  
 ③ あしの指のさきなり。

新到を叱して江西の爛葛藤を放下せしむ、沒巴鼻秦時の鞍轡鑽を抛出す。閑房に母を養ふ、破蒲鞋能く幾文の錢にか直る。古寺に身を藏す、潑家私甚の破漆椀にか當らん。門に當つて大履を懸く、虚しく聖人の名を得たり、分座類綱を振ひ、人天の眼を瞎卻す。

氣牛斗を衝く、諸方を薄て、死雀を將て地に就いて彈することを、機關を用ひ盡して末後に只箇の俗漢を接待す。

徳山見性禪師

師諱は宜鑑、龍潭に嗣ぐ。簡州の人、姓は周氏、初め金剛經を講じて名成都に冠たり、時に周金剛と稱す。嘗て同學と與に曰く、「一毛海を呑む、海性虧くることなし。織芥針に投ず、鋒利動せず、學と無學と唯我れこれを知る。」と。南方の禪席、頗る盛なることを聞いて、師の氣不平なり。乃ち曰く、「出家兒干劫に佛の細行を學し、萬劫に佛の威儀を學しても成佛することを得ず。南方の魔子敢て直指人心見性成佛と言はんや、當に其の窟宅を破し、其の種類を滅し、以て佛恩に報すべし。」と、遂に青龍鈔を負つて蜀を出で、禮陽に至る。路上に一婆子の餅を賣るを見て、因つて肩を息へて買ひて點心せんとす。婆擔を指して曰く、

④ 潑家私、「やくざ」道具なり。「やくざ」者を潑才と云ひ、又潑皮とも云ふ。家私・家生・家事・家具皆同じ。  
 ⑤ 就地彈雀、方語。必死今死雀と云へば、語龜むざうさにとれたれども、何の役にもたぬ者じやなり。又活きた雀でさへむざうさなるに死雀はなほさらなり。



「者は是れ什麼の文字ぞ。」曰く、「青龍の疏鈔。」曰く、「何の經をか講す。」曰く、「金剛經。」曰く、「我に一問あり、若し答へ得ば即ち與へて點心せしめん、答へ得ずんば且く別處に去れ。經の中に道く、「過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得」と、未審し、上座那箇の心をか點せん」とす。師無語。徑ちに龍潭に往いて曰く、「久しく龍潭と響く、到來するに及んで、潭も又見えす、龍も又現せず。」潭曰く、「子親しく龍潭に到れり。師對なし。遂に止息す。一夕侍立する次第、潭曰く、「更深し何ぞ下せざる。」珍重して便ち出づ、卻回つて曰く、「外面黒し。潭紙燭を點じて度與す。師接待す、潭便ち吹滅す、師大悟、便ち禮拜す。潭曰く、「子箇の什麼をか見る。」師曰く、「今より向去更に天下の老和尚の舌頭を疑はず。」と、來日に至り、潭陸座、衆に謂つて曰く、「箇の中箇の漢あり、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回らさず、他日孤峯頂上に向つて吾が道を立し去ることに在らん。師遂に疏鈔を將て法堂前に堆んで火を擧げて曰く、「諸々の立辯を窮むるも一毫を太虚に置くがごとし、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投するに似たり。」と云ふて遂に之を焚く、是に於て禮辭す。直に瀉山に抵り、<sup>①</sup>複子を挾んで法堂に上り、東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、方丈を願

① 珍重。叢林の禮語。早起に不審と云ふ、夜間に珍重と云ふ。不審は「よくおやすみなされしかいかや」と云ふ辭なり。珍重はおみを大切に「よくやすみ五へ」と云ふ辭なり。此方の「おひるなりましたか、おやすみなされ」の挨拶の如し。  
② 複子。字書を考ふるも復は「あわせ、わたいれ」の類なり。音韻、唐音ふを。積は音伏、唐音うをなれば積と通するに非ず。然れども碧巖第四則に「舉徳山到瀉山一挾複子、云々」と評も、包亦不詳云々とあれば、包袱の積と俗に通じ用ふと見ゆ。

視して曰く、「有りや有りや。」山坐して顧みず。師「無々」と曰うて便ち出で、門首に至つて乃ち曰く、「然りと雖も、また草々たることを得ず」と。遂に威儀を具して再び入つて相見す。纔に門に跨つて坐具を提起して曰く、「和尚、」と。山拂子を取らんと擬す、師便ち喝して袖を拂つて出づ。晚に至つて首座に問ふ、「今日の新到在りや否や。」座曰く、「當時法堂を背卻して、草鞋を着けて出で去る。」山曰く、「此の子已後孤峯頂上に向つて草庵を盤結して佛を呵し、祖を罵り去ることあらん。」師「日齋遅し、自ら」托鉢して堂を過ぐ、時に雪峰典座となる、曰く、「鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに托鉢して甚れの處にか去る。」師便ち方丈に歸る。峯、巖頭に舉似す。頭曰く、「大小の徳山未だ最後の句を會せず。」師聞いて侍者をして巖を請じて至らしめ、謂つて曰く、「汝老僧を肯はざるな。」巖密に其の意を啓す。次の日上堂便ち尋常と同じからず。巖僧堂前に於て掌を撫して曰く、「且喜すらくは堂頭老漢最後の句を會せり、然りと雖もまた只三年を得ん。」後三年に果して遷化す。示衆に曰く、「汝但事に無心にして心に無事ならば、自然に虚にして靈に、空にして妙ならん。若し毫端許りも之の本末を言はば、皆自ら欺くとす。何が故ぞ毫釐も繫念すれば三途の業因、譬爾として情生すれば、萬劫の羈鎖、聖名凡號總に是れ虚聲、殊相劣形皆妄色となる。汝之を求めて累なきことを得んと欲するや、其の之を厭ふに及んで、又大患となりて終に益する所なし。」と。雪峯師に問ふ、「從上宗乘の事、

① 托は手に「すえさらける」事なり。托塔天王、茶托(ちやだい)托根(もちあげる)、内托(いえじにあげる)の訓などの如し。



某甲還つて分ありやまた無しや。師曰く、「甚麼とか道ふ。」峯省あり、廓侍者問ふ、「從上の諸聖甚れの處に向つてか去る。」師曰く、「作麼、作麼。」廓曰く、「飛龍馬を勅點すれば、跋鷲出頭し來る。」師休し去る。來日浴に出づ、廓湯を度して師に與ふ、師背を撫つて云く、「昨日の公案如何ん。」廓曰く、「者の老漢今日方に始めて瞥地。」師休し去る。師一日瓦棺と同じく山に入つて木を斫る。師一椀の水を將て棺に與ふ、棺接得して便ち喫す、師曰く、「會すや。」棺曰く、「不會。」師又一椀の水を將て棺に與ふ、棺接得して便ち喫す、師曰く、「會すや。」棺曰く、「不會。」師又一椀の水を將て棺に與ふ、棺接得して便ち喫す、師曰く、「會すや。」棺曰く、「不會。」師曰く、「何ぞ不會を成褫取せざる。」棺曰く、「不會又箇の什麼をか成褫せん。」師曰く、「大いに箇の鏡檝に似たり。」と、師江を隔て高亭を見て云く、「不審。」師乃ち扇を搖し之を招く、高亭開悟して、便ち横趨して去る。師凡そ住院佛殿を拆卸して、獨り法堂を存するのみ。

贊に曰く、「鈔を擔ふて南方に走る、誓つて諸の魔子を滅す。」

臭老婆の三心を點出するに逢ふ、小當仁の啞して一語なきことと看る。

龍潭紙燭を吹滅す、家財を破蕩す、德嶠草庵を盤結す、佛祖を呵罵す。

瀉山に到つて草鞋を背著して出づ。目前の機を活弄す、巖頭に老僧を

肯はざる那と問ふ、末後の句を會得す。

●小當仁。箇の擲談にて、可レ答不能レ答、曰小當仁の説あり。

虚にして靈に、空にして妙なり、人に逢ふて爛泥團を抛擲す、毛海を呑み芥針に投す、衆に對して金剛の杵を拗折す。

熬鼻蛇の毒宗乘の事に因つて心に入る、飛龍馬の驟つて作麼の中に向つて馳歩す。

木を斫つて瓦棺の成褫して便ち休することを要す、扇を搖かして高亭の横に趨つて去ることを喜ぶ。

誠に所謂る佛殿を拆く、咬猪狗、人情に近からざる底の老尊慈なり。想ふに是れ花錦地に繁華を戀ふ

央痒底の座主にあらず。」

巖頭齋禪師

巖頭齋禪師

師諱に全齋徳山に嗣ぐ。泉州の人、姓は柯氏。一日山に參じ、方に門に跨つて便ち問ふ、「是れ凡か、是れ聖か。」山便ち喝す、師禮拜す。僧あり、洞山に舉似す、山曰く、「若し是れ齋公にあらずんば大いに承當し難し。」師曰く、「洞山老人好惡を識らず、錯つて名言を下す、我れ當時一手は擡げ一手は搦ふ。」と。一日雪峰、欽山と聚話する次で、一椀の水を見る、欽曰く、「水清うして月現す。」峰曰く、「水清うして月現せず、師踢して去る。師雪峰と同じく徳山を辭す。山問ふ、「甚れの處にか去る。」師曰く、「暫く和尚を離れ去る。」山曰く、「子他後作麼生。」師曰く、「和尚を忘れず。」曰く、「子何に憑つてか此の説ある。」師曰く、「豈聞かすや、智、師と齊しければ、師の半徳を滅す、智、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。」



曰く、「如是、如是、善く自ら護持せよ。」と。師鄂州の巖頭に在りて、沙汰に値ひ、湖邊に於て渡子と作り、西岸に各一板を掛く、人有つて渡り過ぎんとするときは、板を打つこと一下すれば、師曰く、「阿誰ぞ。」曰く、「那邊に過ぎ去らんと要す。」師乃ち棹を舞して之を迎ふ。一日因に婆子、一子を抱き來つて乃ち曰く、「焼を呈し、棹を舞すことは即ち問はず、且く道へ、婆子手中の兒、甚れの處より得來る。」師便ち打つ。婆曰く、「婆七子を生ず、六箇は知音に遇はず、只者の一箇もまた消得せず」と云うて、便ち水中に抛向す。師後洞庭の臥龍山に庵す。徒侶臻り集る。僧問ふ、「師無くんば還つて出身の處有らんやまた無しや。」師曰く、「者前の古菴爛。」上堂云く、「吾嘗て涅槃經を究ること七八年、中に於て一兩段の義有つて、衲僧の説話に似たり。」又云く、「休みね、休みね。」時に僧あり、出でて作禮して云く、「請ふ、和尚衆の爲めに舉せよ。」師遂に云ふ、「吾が教意は、字の三點の如し、第一は東方に向つて一點を下して、諸菩薩の眼を點開す、第二は西方に向つて一點を下して諸菩薩の命根を點す、第三は上方に向つて一點を下して諸菩薩の頂門を點開す。此は是れ經中第一段の義、吾が教意は摩醯首羅の面門を

①沙汰。晋書孫綽傳に、「沙汰之瓦礫在後」と。正隱字書に、「沙汰群吏三百餘人」と。沙汰は石沙をゆりて其中で金を「よりわけける」ことなり、故に公儀より僧尼の善惡を吟味し、惡しき者を選俗させるを沙汰と云ふ。會昌五年には善惡に拘はらず、僧數を定め、其數ほど殘し、其餘は皆選俗させたるなり、岩頭なども其數に入りたるなり。佛祖統記に、「唐武德九年詔、僧道戒行虧闕者、悉令罷道、月餘停前沙汰、又開元二年沙汰僧尼偽濫者萬二千人、並令還俗、又會昌五年詔檢按天下寺院僧尼數、勅兩都左右街、留寺四所僧各三十人、天下州郡各留一寺、上寺二十人、中寺十人、下寺五人、僧尼歸俗者二十六萬五千人」と。

劈開して一隻の眼を、堅亞するが如し。此は是れ第二段の義、吾が教意は塗毒鼓の如し、撃つこと一聲すれば遠近聞く者俱に喪す。此は是れ第三段の義。時に小巖上座問ふ、「如何なるか是れ塗毒鼓。」師兩手を以て膝を按じて、身に亞いて曰く、「韓信朝に臨む底。」巖對なし。羅山、石霜に謁して問ふ、「去住寧からざる時如何ん。」霜曰く、「直に須らく盡卻すべし。」山意に慚はず。乃ち師に參じて問ふこと前語に同じ。曰く、「他の去住に従す、他を管して作麼にかせん。」遂に服膺す。一日又問うて曰く、「和尚豈に是れ三十年前、洞山に在つて洞山を肯はざるにあらざらんや。」曰く、「是。」又曰く、「和尚豈に是れ徳山に嗣いで徳山を肯はざるにあらざらんや。」曰く、「是。」曰く、「徳山を肯はざることは則ち問はず、只洞山の如きんば何の虧缺か有らん。」師良久して曰く、「洞山は好佛、只是れ光無し。」山禮拜す。師僧に問ふ、「甚れの處より來る。」曰く、「西京より來る。」師曰く、「黃巢過ぎて後、還つて劍を收得するや。」曰く、「收得す。」師近前して頸を引いて云く、「因。」僧云く、「師の頭落ちぬ。」師呵々大笑す。僧後に雪峯に到る、峯問ふ、「甚れの處より來る。」曰く、「巖頭より來る。」曰く、「巖頭何の言句か有りし。」僧前話を舉す、峯打つこと三十棒して趁ひ出す。僧問ふ、「如何なるか是れ道。」曰く、「破草鞋、湖邊に抛向し著せよ。」僧問ふ、「古帆未だ掛けざる時如何ん。」曰く、「小魚大魚を呑む。」曰く、「掛くる後如何ん。」曰く、「後園の驢草を喫す。」瑞巖問ふ、「如何なるか是れ本常の理。」師云

②堅亞。廣韻、亞就也「たつにきてある」也。  
③身を「かすめうつむく」なり、白居易の詩に曰く、「亞竹亂籬多」正字通に曰く、「亞枝謂臨水低枝也」と



く「動なり。」曰く「動の時如何ん。」曰く「是れ本常の理にあらず。巖沈思す、師曰く「肯はゞ則ち未だ根塵を脱せず、肯はずんば則ち永く生死に沈む。巖言下に於て頓悟す。後ち凡そ佛を問ひ、法を問ひ、禪を問ひ、道を問ふことあれば、皆嘘聲を作す。一日衆に謂つて曰く「老漢去らん時、大叫一聲了つて去れ」と。一日賊大いに至る、責むるに供饋無きを以てして、遂に刃を刺す。師神色自若、大叫一聲して終ふ、數十里に聞ゆ。唐の光啓三年四月八なり。

贊に曰く「智、師に過ぎたり、誰か憫を信せん。」

一喝せられて大いに承當し難し、一嘘を用ひて全く巴鼻なし。

横に點頭すること三十載、洞山を佛に光なしと謂ふ、塗毒を搦つこと一

兩聲、韓信が朝に臨む底に聽す。

棹を洞庭湖畔に舞す、臭老婆を引いて兒を抛卻す、雪に鰲山店頭に阻て

らる、魔頭の僧を呵して去つて打睡せよと。

聲前の古菴爛、謾に機籌に當る、後園の驢草を喫す、是れ何の宗旨ぞ。

劍收めてより後鋒に嬰り去る、錯つて者の僧に頭を付す、鐘未だ鳴らざる時托鉢して回る、密に先

師に意を啓す。

大道端倪の處を問ふ、急に須らく草鞋を颯下すべし、同行と共に話する間、惜しむべし椀水を踢

翻することを。

羅山を他の去住に従すと謂ふ、未だ寧からざる時あらず、瑞巖の根塵を脱せざることを肯はしむ、

是れ本常の理にあらず。

生平脱洒にして生死を視ること園林に遊戲するが如し、末後大いに叫ぶこと一聲、數十里に聞ゆ。」

雪峯眞覺禪師

師諱は義存、泉州曾氏の子なり、嶺を出で首め鹽官に謁す、三たび投子に到り、九たび洞山に上る。因縁契はずして後、徳山に參じて、遂に言下に悟る。師洞山を辭す、山問ふ、「子甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「嶺に歸り去る。」山云く、「當時甚れの路よりか出づ。」師云く、「飛猿嶺より出づ。」山云く、「今甚れの路よりか去る。」師云く、「飛猿嶺に去る。」山云く、「一人ありて飛猿嶺より去らざる、子還つて識るや。」師云く、「識らず。」山云く、「甚麼として識らざる。」師云く、「他面目なし。」山云く、「子既に識らずんば争でか無面目なることを知らん。」師對なし。師巖頭と同じく澧州の鰲山店に到つて雪に阻てらる。頭は唯打睡し、師は一向に坐禪す。一日巖を喚んで曰く、「師兄起き來れ。」巖曰く、「作麼ん。」師曰く、「今生に便を着ず、文遂と共に箇の漢行脚、到處他に帶累せらる、師兄如今又只管に打睡す。」巖喝し

①嘘。正韻、音虛、聲唇吐氣曰吹、虛口出氣曰嘘、「くち」を少し開き、「ほな」と云ふ聲なり。  
②斬。兼音恣、挿刀なり。字典に「東方人以物挿地、皆爲「刺」と、又通つて作「傳」、「つきこむ」なり。

①文遂云々。江湖集に曰く、「自從龍朔那年一來」と、水滸傳に、「便將氣種那字去」了毛傍「など」とあり、俗語多く此の如し。  
②連累も同じ難義の「る」と、「そばつゝ」にあふ事なり。  
③碧巖不二抄に、「楞伽云、謂如七家村里泥壘成底、土地神相似坐而不動也。」と云々。



て云く、「瞳眠し去れ、毎日恰も七村裏の土地に似たり。他時後日に人家の男女を魔魅し去ることならん。師點頭して云く、「某甲の這裏未だ穩かならざるあり。巖曰く、「將に謂へり、爾他後に孤峰頂上に向つて草庵を盤結して、佛を呵し祖を罵り去ることならん。猶ほ者箇の語を作すか。師曰く、「我れ實に未だ穩かならざる在り。巖曰く、「若し實に此の如くならば、汝が見處に據つて一々に通じ來れ、是處をば備がために證明し、不是處をば備が與めに刻卻せん。師曰く、「我れ初め鹽官に到りて色空の義を擧するを聞いて箇の入處を得たり。巖曰く、「此を去つて三十年、切に忌む擧著することを。師曰く、「又洞山過水悟道の頌に因つて、箇の省處あり。巖曰く、「若し恁麼ならば自ら救ふもまた了せず。師云く、「某甲因に徳山に問ふ、從上宗乘中の事、學人還つて分ありやまた無しや。山打つこと一棒して云く、「甚麼と道ふぞ、我れ當下に桶底の脱するが如くに相似たり」と。巖頭に威を震ふて一喝せられて云はる、「豈道ふことを聞かずや、門より入る者は是れ家珍にあらず」と。師曰く、「如何が即ち是ならん。巖曰く、「他後若し大教を播揚せんと欲せば、須らく一々自己の胸襟より流出し將ち來つて、我が與めに蓋天蓋地し去るべし。師言下に於て大悟、連聲に叫んで曰く、「師兄今日始めて是れ驚山成道」と。師行脚の時、烏石の觀に參じて纒かに門を敲く。觀問ふ、「誰ぞ。曰く、「鳳凰兒。曰く、「來つて作麼にかせん。曰く、「來つて老觀を啗まん。觀便ち門を開き、搦住して曰く、「道

①家珍。「たから」なり。雲門錄に曰く「家珍作寶」と。  
 ②搦住は「ひつとらまへる」こと也。搦は楚尤切、拘也、又搦と同音。小説多く搦字を用ふ。

へ道へ。師擬議す、觀、托開して門を閉卻す。師住院の後、衆に示して曰く、「我れ當時若し老觀の門に入得せば、爾、者の一隊の窟酒糟の漢、甚れの處に向つてか摸索せん。上堂、南山に一條の驚鼻蛇あり、汝等諸人切に須らく好く看るべし。時に長慶出でて云く、「今日堂中大いに人の喪身失命するあり。雲門拄杖を以て面前に、擲向して怖る、勢を作す。僧玄沙に擧似す、沙云く、「須らく是れ稜兄にして始めて得べし、然れども是くの如しと雖も、我は即ち然らず。僧云く、「和尚作麼生。沙云く、「南山を用ひて作麼せん。上堂、盡大地撮み來れば粟米粒の大きさの如し。面前に抛向す。漆桶不會鼓を打つて普請して看よ。玄沙一日師に謂つて曰く、「某甲如今大いに用ひ去らん、和尚作麼生。師三箇の木毬を將て一時に輓出す。沙、牌を斫るの勢を作す。師曰く、「爾親しく靈山に在つて方に此の如きを得たり。沙曰く、「また是れ自家の事、閩帥、銀交牀を施す。僧問ふ、「和尚大王の如き供養を受く、何を將てか報答せん。師、手を以て地を托へて曰く、「輕しく我を打て。と。師象骨巖に人を接す、後松山に往いて寺を建て衆を安んせんと欲し、大師に問うて庵の基を借らんとす。尼肯はず、因つて與に坐禪して約し

③托開、「つきはなす」と譯す。巖五十一則に「托三庵門」と、「つきあける」なり。托は字典に、「同、拓手推物也」とあり。擲は擲なりと註す、「そのうちすべし、はしらす」氣味也。擲檢も「すべし」なり。贊中の「驚鼻蛇擲來」も「つる／＼とばふ」なり。西游記六十七回に、蛇の「はふ」とに用ふ。人や馬などの「はしる」事に、もなる、水滸に見ゆ。擲檢を擲檢にも作れば、「二字同義なり。④悉曇廟の例年の神事の相撲に勝ちたる者。其利物を獲らず取り、又翌年廟前に高き牌を立て。此者に相手になる者なれば、利物を「たゞどり」にし、又其翌年も其通りにする也、若し相手にならふと思ふ者あらば、其牌を打碎き獻盤へ上げる、これを劈牌坊



て曰く、「未だ七日に満たず、定を出でん者は輸くるならん。」と、尼六日に至つて眼を開く、師遂に其の基を奪ふて寺を建つ。師親しく牌を磨院に書して云く、「山前竟日狼虎無く、磨下終年雀兒を絶す。」と、今に至るまで虎雀絶えて無し。

贊に曰く、「得處頗る辛勤、用ふる時巧妙無し。」

飛猿嶺に入りて一人を識らず、蠱毒の郷に生る寧ろ少過無からんや。

焦磚打着す連底の凍、徳山に就いて點發す多談を假らず、赤眼撞着す、

火柴頭、巖頭と同行只一箇を消す。

猿山店頭に成道、半夜發狂す、象骨巖下に踪跟して、全身放倒す。

圓木毬輓出す、立沙火急に牌を作る、驚鼻蛇擲じ來る、雲門郎忙して草を打つ。

門を開いて輕しく擬議す、老觀に擲住せられて鳳凰兒に非ず、鼓を打ち普請して看よ、盡大地撮

し來るに粟粒の大きさの如し。

千七百人の善知識、盡く杓頭上より偈み來る、五六十里の雪峰山、只蒲團頭に向つて奪ひ了る。

松山の小塔卵石子、亂疊幾層ぞ、古澗寒泉牛蹄渦、能く深きこと多少ぞ。

山前竟日狼子無し、且く老僧が行くに聽す、磨下終年雀兒を絶す、齋米の耗ゆるを愁へず。

一生大王の供養を受く、何を以てか恩を報せん、手地を托して疾く呼ぶ、輕しく我を打て、輕しく我を打て。

對(亦日定對)と云ふ。永澤傳第七十四回に、燕青といふ者、匾擔を以て任原の牌を打ち碎き、見事に相撲に勝ちたることを説く。  
① 銀づくりの「たまみしやき」なり、交は「あし」を入れちがへるなり。  
② 以手托地、畜生の前足を地に「わがへるまれ」なり、故に輕打我と云ふ也。  
③ 山庵雜錄に、「作「狼狼、慌忙也。」と、耶狼と同音通。



臨濟宗

臨濟慧照禪師

師諱は義玄、曹州邢氏の子、初め黄檗に在りて衆に隨ふて參得す、時に堂中 第一座、勉めて問話せしむ。因つて方丈に上つて問ふ、「如何なるか是れ佛法的々の大意。」衆便ち打つ。是くの如く三たび問うて三たび打たる。遂に告げて座を辭して曰く、「激勸を承つて問話唯だ和尚の棒を賜ふことを蒙る、且く諸方に往き去らん。」座曰く、「汝須らく和尚を辭して始めて得べし。」座卻つて堂頭に往いて告げて曰く、「問話の僧後生なりと雖も、甚だ是れ如法なり、若し來り辭せば方便して接取し給へ。」來日に上つて辭す、衆高安に往き、大愚に參せしむ。師大愚に到る。愚問ふ、「甚れの處より來る。」曰く、「黄檗より來る。」曰く、「黄檗何の言教か有りし。」曰く、「某甲三度佛法的々の大意を問うて三度打たる、未審し什麼の過かある。」愚曰く、「黄檗恁麼に老婆、汝が爲めに 微困なることを得たり、更に者裏に來つて有過無過と問ふか。」師云く、「元來黄檗の佛法 多子なし。」愚把住して曰く、「者の 尿牀の鬼子、適來有過無過と問うて、而今却つて道ふ、黄檗の佛法多子なしと。」

① 第一座は隨州陳尊宿なり。  
 ② 微困。「しんみにほれをる」と譯す、親切勸勞の義也。  
 ③ 無多子。大きなことではない、「ぎやうさんなことはない」と云ふ意也。  
 ④ 尿牀の鬼子。「ゆばりたれ」と譯す。鬼子は罵る辭也。  
 ⑤ 我事云々。「おれがしつたことではない」と譯す。非干我事と點すれば能く通す。非の字多く不に作る、矢張り非の義に見るべし。干渉の干なり、「しつた」と云ふ譯よく當る、不干爾事など同じ。

汝箇の什麼の道理を見てか便ち恁麼に道ふ。」師愚の肋下に於て築こと三拳、愚拓開して曰く、「汝が師は黄檗なり、我事に干るに非ず。」師回る。衆見て便ち問ふ、「來々去々甚の了期かある。」師曰く、「只老婆心切なるが爲めなり。」衆曰く、「大愚饒舌、見んを待つて痛く一頓を與へん。」師曰く、「什麼の見るを待つとか説かん、即今便ち打たん。」衆曰く、「者の風顛漢、卻つて者裏に來つて虎鬚を拵つ。」師便ち喝す、衆參堂し去らしむ。徑山に五百の衆あり、毎日行道して觀音を念す、一人の參請するなし。山書を作つて衆に與へ、具に其の事を言ふ、衆師をして去らしむ。師徑山に到り、裝腰して直に法堂に上る。山纔かに頭を擧ぐ、師便ち喝す、山口を開かんと擬す、師拂袖して便ち行く。尋で僧あり、山に問ふ、「適來者の僧、甚の言句有りてか、便ち和尚を喝す。」山云く、「者の僧黄檗より來る、爾知らんと要せば、自ら去つて他に問へ。」是の時五百衆太半分散す。洛浦侍者となる、契はすして辭し去る、師後に云く、「可の中箇の赤梢鯉あり、頭を搖し尾を擺ひ、南方に向つて去る、知らず誰家の齏糞裏にか淹殺せられん。」師臨終の時に云く、「吾が滅後汝等吾が正法眼藏を滅することを得る勿れ。」三聖曰く、「争でか敢て和尚の正法眼藏を滅せん。」師曰く、「向後忽ち人あり、汝に問はば伊に向つて什麼とか道はん。」聖便ち喝す。師曰く、「誰か知らん、吾が正法眼藏者の瞎瞞邊に向つて滅することを。」と。



贊に曰く、「廣廈の梁、清廟の器、霜を刮る面、冷燄人に逼る、獸を伏する威、腥風地を捲く。

睦州に見えて始めて、籬を跳り牆を轟ぐるを學ぶ、黄葉を掌して便ち行を擡き市を奪ふことを解す。

寛を報する六十棒、大愚の肋下に向つて築拳す、五百の僧を喝散し、徑山の胸中をして短氣ならしむ。

三玄の戈甲を展ぶ、遍地觸體寒し、四種の料棟を示す、平地波濤起る。炎天雪雹を飛ばす、單に向上の機籌を明む、赤脚にして氷稜に驟る、自らは是れ一般の標致。

惜しい哉正法眼藏、三聖の瞎驢邊に滅向することを、知んぬ赤梢鯉魚、誰家の罌甕裏にか淹殺する。之を贊する者は拔舌泥犁、之を毀る者は洋銅沸尿。

遺風餘烈百世を繼いで猶ほ存することあり、鸞膠の絃を續がんことを求めば遠うして遠し。

興化獎禪師

師諱は存獎、魏州の人、初め臨濟に見ゆ。濟、師をして侍者とならしむ。濟問ふ、「新到甚れの處よりか來る。」曰く、「變城。」曰く、「事あり、借問せん、得てんや。」曰く、「新戒不會。」曰く、「大唐國を打破して、箇の不會の人を覓むるに得難し、參堂し去れ。」師問ふ、「適來の新到、是れ伊を成禪する那。」

濟曰く、「我れ誰か爾が成禪不成禪を管せん。」師曰く、「和尚即ち死雀を將て地に就いて彈ずることを解す、一轉語を將て蓋覆卻することを解せず。」濟曰く、「爾又作麼生。」師曰く、「請ふ和尚新到と作れ。」濟遂に曰く、「新戒不會。」師曰く、「卻つて是れ老僧が罪過。」濟曰く、「爾が語、鋒を藏す。」師擬議、濟便ち打つ。晚に至つて濟又曰く、「我れ今日新到に問ふ、是れ死雀を將て地に就いて彈じ、窠裏に就いて打つ、爾が語を出し得るに及んで、又喝起して青雲裏に向つて打す。」師曰く、「草賊大敗。」濟便ち打つ。師後に三聖に到つて請じて首座と爲る。常に曰く、「我れ南方に向つて行脚すること一遭、拄杖頭に會て一箇の佛法を會する底を撥著せず。」聖聞き得て、問うて曰く、「爾什麼の眼をか具する。」師便ち喝す。聖曰く、「須らく是れ爾にして始めて得べし。」大覺聞いて乃ち云く、「作麼生か風吹いて大覺の門に入り來ることを得ん。」と、師後大覺に到り、請じて院主となる。一日覺喚んで曰く、「我れ爾が道ふことを聞く、南方に向つて行脚すること一遭、拄杖頭に會て一箇の佛法

に於邑は短氣也、前漢中書王傳に、「爲之於邑」と、於邑は「むれんがる」と、字典に於邑は氣逆結不下也とあり、「むれふさがる」なり。希叟錄十二に「結夏小參、釋迦老子不善用心、掘罽埋人、無一個出頭得、只得短氣」と、短氣は「むれんがり、かなしがりなどしてむれふさがる」なり。

標致。「きりやう」と譯す、男女の「きりやうよき」を十分の標致と云ふ。

籬を跳る云々、「むすびと」のする所なり、跳は飛び越えるなり。鶯は説文に「上馬」なり、と又超越なり。

行を擡き云々、「ひるとんび」の類なり。字典に擡は此兩切、搶と同じ、争ひ取るなり、「とんび」がちにするなり。律法に有「白晝搶奪」と、これは「ひるとんび」なり。又碧巖一、十七に曰く、「王令稍嚴不許擡奪行市」と、同八、廿八に「道僧既做箇道理、要擡他行市居家必用」と、辛集六十一に、「擡奪謂擡先取其利也」と、勅修清規下一、五十二に曰く、「或使疥癩、宜後入浴、不得擡先」と、これは「まんがち」に物を賣買し、或は買ひしめなどするとなり、方語の注に、奪二人買賣」とあり。

短氣。楚辭の九章に「於邑而不可止」と、前漢成帝の贊に「言之可爲於邑」と、注



を會する底を撥著せず』と。爾什麼の眼をか具する。師便ち喝す、覺棒を拈す、師擬議、覺便ち打つ、師又喝す、覺又打つ。次の日師法堂より過ぐ、覺院主と召す、「我れ直下に爾が昨日の兩喝を疑はず、爾試みに説け、看ん。師曰く、「我れ三聖師兄の處に於て箇の賓主の句を得たり、總に師兄に折倒し了らる、某甲に箇の安樂の法門を與へよ。覺曰く、「者の瞎漢、者裏に來つて敗缺を納る。」と云ふて、袈衣を卸下して痛く打つこと一頓、師言下に於て、臨濟先師の黃檗の處に在りて棒を喫する底の道理を薦得す。後開道、香を拈じて云く、「此の一炷の香、若し三聖の爲にせば、三聖は我が爲めに太だ孤なり、若し大覺の爲めにせば、大覺は我が爲に太だ賒なり、如かじ、我が臨濟先師に供養せん。」と。雲居、三峰に住せし時、師問うて曰く「權に一問を借りて以て影草と爲す時如何ん。」居對なし、師曰く「想ふに和尚者の話を答ふることを得じ、如かじ、禮拜したつて退かんに」と。後二十年、居云く「如今思量すれば、當時箇の何必と道ふことを消せず。」と、後に化主をして師の處に到らしむ、師曰く「和尚三峰に住する時、老僧この話を問ふに、答へ得ず、如今道ひ得るやまた未しや。」主前話を擧す、師曰く「興化は則ち然らず、争でか箇の不必と道ふに如かん。」僧、師に問ふ、曰く「四方八面來の時如何ん。」師曰く「中間底を打たん。」僧禮を作す、師曰く「興化今日箇の村齋に赴く、中路に一陣の卒風暴雨に遇ふ、

●影草。探竿影草未だ明解を見ず。人天眼目四喝の注に、探竿は漁具なりと即ち、「東三鵝羽一揮竿頭、探竿水中一衆三鵝魚於一處、然後以網流之」と。探竿の用處は本朝の鵜繩なり。影草は刈草浸り水中、則群魚潛影、以網流之、是皆漁者衆魚之方便也、善知識於三學者亦復如是。即ち方便の義ならん。

却つて古廟裏に去つて避け得て過ぐ。示衆に曰く「我聞く長廊下にもまた喝し、後架にもまた喝す、諸子盲喝亂喝することなけれ、直饒爾興化を喝し得て、三十三天に上せて卻つて撲下來して、一點の氣もまた無きも、興化が蘇息し起き來らんを待て、欸々地に爾に向つて未在と道はん。何が故ぞ我未だ會て紫羅帳裏に向つて眞珠を撒して、爾諸人に與へざることあり、虚空裏に胡喝して什麼か作さん。師、克賓維那に謂つて曰く「汝久しからずして當に唱導の師となるべし。」賓曰く「者の保社に入らじ。師曰く「會し去つて入らざるか、會せずして入らざるか。賓曰く「總に不恁麼。師便ち打ち、乃ち衆に白して云く「克賓維那、法戰に勝たず、罰錢五貫鑽飯一堂に設けて、仍つて飯を喫するを得ず。」即ち趕つて院を出す。師同參の來り纔かに法堂に上るを見て、師便ち喝す、僧も亦喝し、行くこと三兩歩、師又喝す、僧も亦喝す、師近前して棒を拈す、僧又喝す、師云く「爾看よ者の瞎漢、猶は主と作ることに在り。」僧擬議す、師便ち直に法堂を打ち下す。時に僧あり、問ふ「者の僧甚の和尚に觸忤することある。」師云く「是れ伊れ適來、また權あり實あり照あり用あり、手を將て伊が面前に向つて横に兩横するに及んで、便ち去ることを得ず、者般の漢に似らば、打たずして更に何の時をか待たん。」僧問

●紫羅帳。方語に盡情揭示とあれば、心底を露さず打ち出して見せる義なり。羅殿は「うすもの」故、はつきりとは見えれども見えすく者也、眞珠は光る者にて、外から見えず故、喻とする也。又此書に「宏智上堂、黃閣簾垂誰傳家信、紫羅帳合時撒眞珠、人天眼目内生領、紫羅帳合君臣隔、黃閣簾垂誰制空、古轍言既與父合、體則臣僚隔絶、以二其體無爲一也、古抄紫羅帳合、言二君臣深奧也、と、これは洞家の義にて、取り探別のやうなり。



ふ、寶劍師の藏すること已に久しきことを知る、今日場に當る、略借せ、看ん。師曰く、「借さじ。」曰く、「什麼として借さざる。」師云く、「是れ張華が眼にあらずんば、徒らに斗を射る光を窺はん。」曰く、「用ふる者如何ん。」師曰く、「身を横へて宇宙に當る、誰か是れ出頭の人。」と。同光帝師に問ふ、「朕中原を收めて一寶を獲たり、未だ人の價を酬ゆるあらず。師云く、「陛下の寶を借せ、看ん。」帝手を以て幞頭脚を引いて之を示す、師云く、「君王の寶誰か敢て價を酬いん。」帝大に悦び衣號を賜ふに、受けず、乃ち馬を賜ふ、師馬を驟らしめて、忽ち驚いて地に墜ちて足を傷く、柎子に憑りて行く。僧に問うて曰く、「還つて老僧を識るや否や。」曰く、「争でか和尚を識らざることを得ん。」師曰く、「跟脚の法師、説き得て行ふこと得ず。」と。

贊に曰く、「臨濟の的兒、三聖の首座、

熱喝雷奔に似たり、 龜膽天大の如し。

皮下に血なし、大覺に見えて痛棒を喫して先師を薦得す、 板齒に毛を生ず、雲居に到つて一問

を借つて以て影草となす。

村齋に赴いて暴風卒雨に遇ふ、古廟裏誰か云ふ渾身を躡得すと。 南方に向つて虎穴魔宮を探る、

拄杖頭未だ曾て一箇を撥著せず。

聲を揚げて喝を止む、紫羅帳裏に明月の珠を撒す、 眼有りて筋なし、幞頭脚邊に君王の寶を辨す。

同行を勘して手を將て面門に横ふこと兩上、死伎已に窮まる。 克賓を打つて院を出し鑽飯一堂を

罰す、人を欺くこと少からず。

寶劍を借つて場に當つて看る、光斗を射る窺ふて生盲に遇ふ。 死雀を將て地に就いて彈す、語録を

藏す功過ちを補ひ難し。

龍顔に對して御馬に乗ず、一場の榮を得ると雖も、蹶雙脚、祖道を窮む力

を盡して行すれども到らずし。

南院願禪師

師は興化に嗣ぐ、河北の人、法の諱は慧願、俗名は寶應。師上堂曰く、「諸方只啐啄同時の眼を具して、啐啄同時の用を具せず。」と、僧便ち問ふ、「如何が是れ啐啄同時の用。」師曰く、「作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。」曰く、「此れ未だ是れ學人が問處にあらず。」曰く、「汝が問處作麼生。」曰く、「失。」師便ち打つ、僧肯はず、衆に示して云く、「赤肉團上。壁立千仞。」時に僧あり、出で、問ふ、「赤肉團上。壁立千仞、豈に是れ和尚の語にあらずや。」師云く、「是。」僧便ち禪床を 掀倒す。師云く、「爾看よ、者の瞎漢の亂做なることを。」僧擬議す、師便

① 掀倒。うはれかへす」と譯す、掀起笠貌と云ふは、笠を「はれあげてぬぐ」也。水滸傳楔子に、「一道黑氣從穴裏一委將來(まきあがつて)、掀塌(はれくづした)了半箇殿角。」とあり。

② 板齒生毛。前板齒生せば、上下の四枚を云ふ也。生毛とは「かびのはえる」ことなり。板齒生毛生れ瞶と同じ。開口不得の義、書言故事の據言に、「劉魯風投語」所知、爲三典語者「所阻」と、詩の略に云ふ、名紙生毛とも不爲通。



ち打つて院を趁ひ出す。僧問ふ、「二王相見の時如何ん。」曰く、「十字街頭に尺八を吹く。」又問ふ、「從上の諸聖、甚れの處に向つてか去る。」曰く、「天堂に上らずんば則ち地獄に入らん。」曰く、「和尚又作麼生。」曰く、「還つて寶應に落處を知るや。」僧擬議す、師打つこと一拂、師僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」曰く、「襄州。」曰く、「是れ什摩物か恁麼に來る。」曰く、「和尚試みに道へ、看ん。」曰く、「適來禮拜する底。」曰く、「錯。」曰く、「禮拜底箇の什麼をか錯まる。」曰く、「再犯容さす。」曰く、「三十年馬駒を弄す、今、驢に撲る、瞎漢參堂し去れ。」僧問ふ、「人碧眼に逢ふ時如何ん。」曰く、「鬼漆桶を争ふ。」僧問ふ、「古殿重ねて興る時如何ん。」曰く、「明月瓦簷に挿む。」僧曰く、「恁麼ならば、則ち莊嚴し畢つて備へ去らん。」曰く、「草を斬れば蛇頭落つ。」僧問ふ、「警喜警嘆の時如何ん。」曰く、「涙を傾け嶽を倒す。」僧問ふ、「如何か是れ無縫塔。」曰く、「七花八裂。」曰く、「如何か是れ塔中の人。」曰く、「頭梳らず、面洗はず。」僧問ふ、「祖意教意是れ同か是れ別か。」曰く、「黃尚書李僕射。」曰く、「噫旨如何ん。」曰く、「牛頭は北に向ひ、馬頭は南す。」師、僧に問ふ、「近離甚の處。」曰く、「龍興。」曰く、「發足して葉縣を離ること莫からんや、また無しや。」僧便ち喝す、曰く、「好々に汝に問ふ、又、發惡して作麼。」僧曰く、「喚んで惡發と作し得てんや。」師却つて喝して曰く、「

①驢は馬よりは「よわき」者也、撲は前足でふむを云ふ。水滸傳武松打虎の處に、虎の人を取るに一撲一揪とて三種の働きあり、撲は前足を、そのへとびついて「人をおさへる」を云ふ、猫の風を取るがごとし、揪は「うしろむき」に後足で「はねける」也、翦は尾を以てしわぐなり。委しくは水滸傳に見えたり。  
 ②七八口花裂の互文也、落花微塵となるの意。  
 ③惡發も同じ「はらたてる」也。

く、「爾既に惡發、我もまた惡發、近前來、我もまた沒量の罪過、爾もまた沒量の罪過、瞎漢參堂し去れ。」贊に曰く、「一語綱宗を定む、作家は啐啄せず。」

興化的子、氷藥の胸懷、臨濟の親孫、麟龍の頭角、赤肉團、上壁立千仞、禪床を掀して棒瞎驢を打す、十字街頭二王に相見す、尺八を吹いて聲雅樂を亂る。

諸聖甚れの處にか去る、謾に云ふ地獄に入つて天堂に上らず、何物か恁麼に來る、灼然として馬騎を弄して今驢に撲る。  
 一機一境、斗を換へ星を移す、警喜警嘆、涙を傾け嶽を倒す。  
 頭梳らず面洗はず、塔中の人描畫すとも未だ全く眞ならず、馬は北に向ひ牛は南に向ふ、祖教意擲量するに俱に是れ錯。

老作に従游す、廊侍者と一再同參、<sup>①</sup>小家を弄出す、龍興の僧に隨つて遞に相發惡す。千聖の眼を彈して蹤由を覓めんと擬す、白日青天風雷雨雹。」

①初心などと譯す。

風穴沼禪師  
 師諱は延沼、餘杭劉氏の子、初め講肆に遊び、止觀を習ふ。棄て去つて鏡清に謁す、清問ふ、「近離甚れの處ぞ。」曰く、「東を離れてより來る。」曰く、「還つて小江を過ぐるやまた無や。」曰く、「大舸獨り空



に飄へる、小江濟るべきなし。曰く、「鏡水秦山、鳥飛び度らず、且く道に聽いて途に説くこと勿れ。」曰く、「滄溟尚ほ鱗輪の勢を怯る、列漢も帆を飛ばして五湖を渡る。清、拂子を豎して云く、「者箇を争奈何せん。」曰く、「者箇是れ什麼ぞ。」曰く、「果然として識らず。」曰く、「出沒卷舒、師と同じく用ふ。」曰く、「杓卜虚聲を聽く、熟睡して瞻語饒し。」曰く、「澤廣うして山を藏し、理能く豹を伏す。」曰く、「罪を赦し愆を放す、速かに須らく出で去るべし。」曰く、「出で去らば即ち得」と云ふて便ち去る。北のかた襄沔に遊び、華嚴に依止す。嚴問うて曰く、「我に牧牛の歌あり、輒ち請ふ、閑梨和せよ。」師曰く、「羯鼓鞭を掉ひ、牛豹跳、遠村の梅樹背慮都。」後南院に見ゆ、院師に問ふ、「南方の一棒、作麼が商量する。」曰く、「奇特の商量を作す。」卻つて問ふ、「此の間の一棒、作麼が商量する。」院横に拄杖を按じて云く、「棒下の無生忍、機に臨んで師を見ず。」師言下に於て大悟し、風穴に出世して南院に嗣ぐ。僧問ふ、「古曲音韻なし、如何が和し得て齊しからん。」曰く、「木鷄子夜に啼き、芻狗天明に吠ゆ。」僧問ふ、「如何が是れ和尚の家風。」曰く、「鶴に九臯あり、翼を翥い難し、馬に千里なし、謾に追風す。」示衆に云く、「若し是れ上流ならば、各證據あらん者は、略箇の程限に赴け、未だ證據せざらん者は、各自に英雄當處に出生し、隨處に滅盡す。龜紋を爆するが如し、爆すれば即

①理能く云々。祖庭事辨に依れば、雪竇拈古、伏豹當レ作伏物、於教切、狼戾也、見遠淨山録、大慧普説四、所謂理能伏物、纔到三道理上、自然教備禮拜、四巖録下、作伏豹、楚石録十一、三、狸能伏豹。按するに此語種々の説あれども取り難し、普説には澤廣の句なく、大慧の論義に座主を風伏させられたる處にあり、狸や豹の喻は一尙當らぬ場合あり、左すれば事宛と普説に従つて可ならん。

ち兆と成り、爆せざれば鈍と成る、爆せんと欲して爆せずんば直下に便ち捏す。鄧州の牧、請じて衙に就く、陞座して曰く、「祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり、去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す、只去らず住せざるが如きんば、印するか即ち是、印せざるか即ち是。時に盧陂長老あり、出でて問ふ、「某甲鐵牛の機あり、請ふ、師、印を掛けされ。」曰く、「鯨鯢を釣つて巨浸を澄ましむるに慣れて、却つて嗟く蛙歩の泥沙に蹶ることを。」陂佇思す、師喝して曰く、「長老何ぞ進語せざる。」陂擬議す、師打つこと一拂して云く、「還つて話頭を記得するや、試みに擧せよ看ん。」陂口を開かんと擬す、師又打つこと一拂。牧主曰く、「佛法は王法と一殺。」師曰く、「什麼を見見る。」主曰く、「斷に當つて斷せざれば返つて其の亂を招く。」師便ち下座す。僧問ふ、「如何が是れ佛。」曰く、「如何が是れ佛にあらざる。」曰く、「未だ玄言を曉さず、請ふ、師直指せよ。」曰く、「家は海門の東に住す、扶桑最も先づ照す。」僧問ふ、「有無俱に無にし去る時如何ん。」曰く、「三月游に懶し花下の路、一家愁へて閉づ雨中の門。」僧問ふ、「語默離微に涉る、如何か不犯を通せん。」曰く、「嘗て憶ふ、江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」贊に曰く、「卯金刀、眞の跳竈、

②鯨鯢を釣つて云々。碧巖三八則評に、巨浸は乃ち十二頭の水牯牛、爲釣餌却只釣得一蛙出来ると、澄一本作沈、浸は漬也と註すれば、巨浸は大浸也。鵬を碧巖三十三則破に作る、三十八則には鵬に作る、字彙に鵬鵬同じ、玉篇に鵬は轉也。碧巖方語解に、吳明卿の詩、王元美の文を引いて巨浸を海なりとす、然れども圓悟の評歴然たり、誤ふべからず。又曰く、沈は釣具なり、邵康節が漁樵問答に云ふ、「樵者問三漁者曰、子以何道而得魚、曰、吾以三六物具而得



天台の止觀を習ふ、幼にして蹄躩に泳ぐ、少室の單傳を究む、直に閻  
奥に趨る。

棒下の無生忍、南院の毒に中てられて苦心に入る、杓卜虚聲を聴く、鏡  
清の理能く豹を伏することを抗す。

芻犬明に吠へ木鷄夜に啼く、古曲を調べて音韻成さず、老鶴翼を翥ぐ  
る、病馬風を追ふ、家風を話して狼籍少からず。

生滅の處を管窺す、爆龜の紋鈍兆未だ分明ならず、祖師の心を蠶測す、  
鐵牛の機去住印破し難し。

海に近き扶桑最も先づ照す、直指の事要且つ瞞肝、遠村の梅樹背盧都、  
牧牛の歌廣和することを爲し難し。

有無俱に坐斷す、一家愁へて閉づ雨中の門、語默離微に渉る、三月亂れ  
啼く花下の鳥。

玄中の玄、妙中の妙、瀟洒たる浙僧更に兩箇無し。

首山念禪師

師は風穴に嗣ぐ、諱は省念、萊州狄氏の子、師、真圓頭と同じく上つて、穴に問訊す、穴真に問うて

魚云々、と。六物は竿也、綸也、浮也、沈也、釣也、餌也、然れば沈巨浸と點すべしと。愚按、兼辨其意するに、浮也沈也とは、綸の中のうきをつけて「うかす」處と釣をつけて「しづめる」處を云ひ、六物のそらふたる處で魚を得、其中の綸の沈む處ばかりを取つて、魚を釣ることにはいかぬ也、矢張り評語の意に依つて沈は餌を「はめる」と見て可なり。祖庭事苑に蛙を陸と見て、溷陸の馬の事は引くは、驥字玉篇に馬輾臥土中也、廣韻、馬土浴する也と註する故なり。正しく圓悟の碧巖評語に、「釣得一蛙」とあるにて分明なり、從容錄にも、風穴衆吼集と雪竇の著語とを擧げてこれを駁す。

曰く、「作廢生か是れ世尊不説の説。」真曰く、「鶉鳩樹上に啼く。」穴曰く、「汝許多の痴福を作して作廢、何ぞ言句を體究せざる。」卻つて師に問ふ、師曰く、「動容に古路に揚る、悄然の機に墮せず。」穴、真に謂つて曰く、「汝何ぞ念法華の下語を省ざる。」一日白兆の楚、汝州に至つて宣化す、穴、師をして往いて傳語せしむ、纔かに相見して坐具を提起して便ち問ふ、「展ぶるか即ち是、展べざるか即ち是。」兆曰く、「自家に看取せよ。」師便ち喝す、兆曰く、「我曾て親しく知識に見え來る、未だ嘗て輒ち敢て恚麼に造次ならず。」曰く、「草賊大敗。」兆曰く、「來日若し風穴和尚に見えば、一々に舉似せんを待て。」曰く、「一任一任忘卻することを得ざれ。」師回つて先づ穴に舉似す、穴曰く、「今日又爾に一員の草賊を收下せらる。」曰く、「好手は名を彰さず。」兆次の日、纔かに相見して便ち前話を擧ぐ、穴曰く、「但昨日のみに非ず、今日臆に和して捉敗す、此に因つて名著はる。」師、衆に示して曰く、「佛法は國王大臣有力の檀那に付囑して、燈々をして相續不斷ならしむ。大衆且く道へ、箇の什麼をか續ぐ。」良久して曰く、「須らく是れ迦葉師兄にして始めて得べし。」時に僧あり、出でて問ふ、「靈山の一會、何ぞ今日に異ならん。」曰く、「坑に墮ち墮に落つ。」曰く、「什麼として此くの如くなる。」曰く、「瞎。」問ふ、「如何が是れ和尚の家風。」曰く、「一言に干江の口を截斷して、萬仞峯前に始めて玄を得たり。」曰く、「如何なるか是れ佛法の大意。」曰く、「楚王城畔汝水東に流る。」上堂曰く、「若し此の事を論せば實に一元字脚を掛けず。」便ち下座、僧問ふ、「如何か是れ梵音の相。」曰く、「驢

碧巖解に出づ。元和脚元祐脚  
葛藤後篇四三既也。



鳴犬吠。曰く、「如何か是れ佛。」曰く、「新婦驢に騎れば、阿家牽く。」曰く、「未審し、此の語甚の句中にか收むる。」曰く、「三玄收め得す、四句豈に能く該ねんや。」曰く、「此の意如何ん。」曰く、「天長地久、日月齊しく明かなり。」上堂曰く、「第一句下に薦得すれば、佛祖のために師となるに堪へ、第二句に薦得すれば、人天のために師となるに堪へ、第三句下に薦得すれば自救不了。僧問ふ、「如何か是れ徑截の一路。」曰く、「或は山間に在り、或は樹下に在り。問ふ、「從上の諸聖甚れの處に向つてか行履する。」曰く、「犁を牽き杷を拽く。問ふ、「如何か是れ道。」曰く、「爐中に火あり、撥するに心なし、處々縦横意に任せて遊ぶ。」如何か是れ道中の人。」曰く、「坐して看る煙霞の秀、白雲と齊しからざることを。」と。

贊に曰く、「海に戯る蒼龍、群を空する良馬。

鳥喙の藥を喫して、骨に和して換へ來る、止啼の金を將て、情を盡して拋舍す。

動容に古路に揚ぐ、風穴窖を掘つて深く埋まる、好手名を彰はさず、白兆を將て賊に和して捉敗す。

潑家風郎當少からず、千江の口萬峯の前、徑截の路迂回轉た多し、或は山間或は樹下。旨に和して勃牽として瞎す、靈山の一會を推して壘に落ち坑に墮せしむ、惡毒未だ懷に忘せず、從上の諸聖を驅つて犁を牽き杷を拽かしむ。驢鳴犬吠梵音の相、誰か敢て聞かんことを願はん、地久天長眞の佛身、未徹在なることを保す。

三句を將て天下の衲僧を驗すと雖も、我れ且く爾に問はん、新婦驢に騎れば阿家牽く、是れ何の語話ぞ。

汾陽昭禪師

師諱は善昭、太原の人、俗姓は俞、初め首山に調し、上堂に遇ふ。出でて問ふ、「馬祖陞堂、百丈席を卷く意旨如何ん。」山曰く、「龍袖拂開して全體現す。」曰く、「師の意如何ん。」山曰く、「象王行く處、狐蹤を絶つ。」師言下に於て大悟す。示衆凡そ一句語、須らく三玄門を具すべし、一玄門毎に須らく三要路を具すべし。

照あり時あり、或は先照後用、或は先用後照、或は照用同時、或は照用不同時、或は先照後用。且く爾と共に商量せんことを要す。或は先用後照、また須らく是れ箇の人にして始めて得べし。或は照用同時、爾又作麼生か當抵、或は照用不同時、爾又作麼生か湊泊せん。衆に示して云く、「汾陽に三訣あり、衲僧辨別しがたし、更に如何と問はんと擬せば、拄杖驀頭に楔たん。」と。僧問ふ、「如何か是れ初機を接する句。」曰く、「汝は是れ行脚の僧。」如何か是れ衲僧を辨する句。」曰く、「西方日は卯に出づ。」如何か是れ正令行する句。」曰く、「千里持ち來りて舊面を呈す。」如何か是れ乾坤を定むる句、曰く、「北俱盧洲の長粳米食する者喜なく亦嗔なし。」僧問ふ、「如何か是れ賓中の賓。」曰く、「庵前に合掌

龍袖。左右の袖をかき合すを云ふ。唐才子傳に、「溫庭筠每試、已塚中曰温八吟。」又曰く、「叉手成八韻、名温八又」と。然れども龍袖の字義解しがたし。按するに、龍籠同音假借、江湖集に、「惠山煮茶、萬壑松風供一吸、自籠雙袖、水邊行」とあり。



して世尊を問ふ。「如何か是れ賓中の主。」曰く、「對面儔侶なし。」如何か是れ主中の賓。」曰く、「陣雲海上に横はる、劔を抜いて龍門を攪す。」如何か是れ主中の主。」曰く、「三頭六臂天地を擊ぐ、忿怒の那吒帝鐘を撲つ。」僧問ふ、「如何か是れ學人著力の處。」曰く、「嘉州、大像を打す。」如何か是れ學人轉身の處。」曰く、「陝府に鍊牛に灌ぐ。」如何か是れ學人親切の處。」曰く、「西河に師子を弄す、北地苦寒なり。」と。師夜參を罷む、異比丘あり、錫を振ふて至る、師に謂て曰く、「會中に大士六人あり、奈何ぞ說法せざる。」言ひ訖つて空に陞つて去る。師記するに偈を以て曰く、「胡僧金錫光る、法を請ふて汾陽に到る、六人大器を成ず、勸請して爲めに敷揚せしむ。」

贊に曰く、「孤高世を絶つ靜退倫を離る。

寶鼎芝房清廟の瑞、瑤林瓊樹滄海の珍。

大象經行すれば狐蹤を絶す、頓に言外の旨を明む、吹毛拔出して龍門を攪く、誰か主中の賓を識らん。

箭鋒の機を發す、三玄門擊開照あり用あり、乾坤を立する句、長鞭米喫著喜もなく噴もなし。西河に師子を弄す大いに瓜牙を欠く、親切と道ふて親切ならず、陝府に鍊牛に灌ぐ氣力を用ひ盡す、轉身を要して轉身し難し。

賊機關千聖も知らずと謂ふ、衲僧を辨ずるに三訣あり、鬼脚跡胡僧に覷破せらる、大器を成す只

六人。

葉縣の輿に過從す、同坑に異土なし、慈明を逐ふて怒罵す、餓飯 閑神

閑神。野鬼閑花野草など、閑野は「やくざな」ことを云ふ。

電捲き風旋る、七十二員の善知識に參ず、拖泥帶水の處に到つて、最も苦しきは是れ十智同眞。」

葉縣省禪師

師は首山に嗣ぐ、諱は歸省、冀州賈氏の子、師、首山に到る、山竹篋を擧げ、問うて曰く、「喚んで竹篋と作さば則ち觸る、喚んで竹篋と作さざれば則ち背く、喚んで什麼とか作さん。」師、竹篋を掣して拗して兩截と作して、地に擲つて曰く、「是れ什麼ぞ。」山曰く、「瞎。」師便ち作禮す。僧問ふ、「法海の一滴、師の指すことを蒙る、向上宗乘の事如何ん。」曰く、「高祖殿前樊噲怒る、須らく知るべし、萬里烟塵を絶つことを。」僧問ふ、「維摩の丈室、日月を以て明となさす。」曰く、「眉八字に分る。」曰く、「未審し、意旨如何ん。」曰く、「雙耳肩に垂る。」僧問ふ、「如何か是れ清淨法身。」曰く、「厠坑籌子。」問ふ、「如何か是れ毗盧の主。」曰く、「僧は夏臘を排し、俗は着年を列す。」問ふ、「如何か是れ深々の處。」曰く、「猫に歎血の功あり、虎に起屍の徳あり。」曰く、「便ち是なることなしやまた無や。」曰く、「確は東南に搗き、磨に西北に推す。」衆に示して云く、「宗師の血脈、或は凡或は聖、龍樹・馬鳴・天堂・地獄・鑊湯・爐炭・牛頭・獄卒・森羅萬象・日月星辰・他方此界・有情無情。」手を以て畫一畫して云く、「俱に此の宗に入



る、此の宗門の中亦能く人を殺し、亦能く人を活す、殺人は須らく是れ殺人刀なるべし、活人は須らく是れ活人の句なるべし、作廢生か是れ殺人刀活人の句、道ひ得る底、衆に對して道へ、看ん、若し道ひ得ずんば即ち平生に孤負せん。師面目嚴冷にして衆の敬畏する所なり、天衣の懷、浮山の遠、二人至つて住を求めんと欲す、正に雪の寒に値ふ、師水を將て旦過に灌ぐ、其餘は皆怒つて去る。唯二人衣を整へて坐に復る。晚に至つて師到つて呵して曰く、「爾更に去らずんば我爾を打たん。」遠近前して曰く、「某數千里、特に來つて和尚の禪に參ず、豈一杓の水、潑ぐを以て便ち去らんや。若し打殺すともまた去らじ。」師笑つて曰く、「爾兩箇參禪を要するか、却つて去りて掛搭せよ。」續いで遠を請じて典座に充つ、事武庫に見えたり、茲に具に載せず。

贊に曰く、「項鍊重きこと千斤、倔強人の敵するなし。」

首山の活業を分つて自ら支撐す、臨濟の家私を將て盡く狼籍たり。

清淨身、廁籌子倒用横拈、觸背の機、潑竹篋胡抛亂擲。

高祖殿前焚噲怒る、宗風を把つて凌辱すること太だ多し、維摩の丈室日月明かなり、意旨に當つて人信じ及ばず。

毗盧の師法身の主疆ひて分疎す、僧は夏臘を排し俗は耆年を列す、起屍の徳歆血の功錯りて註解す、確は東南に搗き磨は西北に推す。

黄檗の肚腸霜面に冷し、天衣に潑いで凍つて氷と成さしむ、煉銅の肝膽鍊を心と爲し、浮山を逼めて走つて壁に上ることを得せしむ。

沒巴鼻 惡情惊を弄出す、活人の句、殺人刀、晴空裏に箇の霹靂を轟かす。

浮山圓鑑禪師

惡情惊。「わるこんじやう」と譯す、玉篇に惊は慮也とあり。

師諱は法遠、圓鑑と號す、葉縣に嗣ぐ、鄭州の人、王氏の子、上堂云く、「諸佛出世、化門を建化す、三身智眼を離れず、亦摩醯首羅の三目、圓伊の三點の如し。何が故ぞ一隻眼は水泄げども通せず、緇素辨じ難し、一隻眼は大地全く該ぬ十方通暢す。一隻眼は高低一へに顧みて萬類齊しく瞻る。然れども是くの如しと雖も、若し是れ本色の衲僧、驀路に相逢はゞ、別に正眼を具して始めて得ん。所以に道ふ三世諸佛有ることを知らず、狸奴白牯卻つて有ることを知る。且く道へ箇の什麼有ることを知る、良久して「深秋簾幕千家の雨、落日樓臺一笛の風。」五祖演和尚游方して師に參ず、師曰く、「子來ること晩し、吾老たり、白雲に依るべし。吾未だ識らずと雖も渠が臨濟三頓棒の話を頷するを見るに、甚だ誦當なり。」と、演遂に往いて雲に見えて旨を得たり。師青華嚴を接して、授くる所の大陽の衣履を以て之に付して、洞上の宗を續がしむ。偈に曰く、「須彌太虚に立つ、日月附して而も轉ず、群峯漸く他に倚る、白雲方に改變、少林風叢に起る、曹溪洞簾捲く、金鳳龍巢に宿す、宸苔豈車に輾らんや。」と。初め歐陽文忠公は師の奇逸なるを聞いて、師を見て未だ以て之を異することあらず。因に客と碁す、師旁



に坐す、公碁を收む、師を請じて碁に因つて説法せしむ。師即ち鼓を搥たしむ。上堂曰く、「若し此の事を論せば、兩家の碁を著つが如くに相似たり、何の謂ぞや、敵手知音ならば機に當つて譲らず、若し是れ ①五を綴り三を饒さば、又 ②一路を通じて始めて得ん。一般底あり、只だ ③門を閉ぢ活を作すことを解して、角を奪ひ關を衝くことを會せず、硬節虎口と齊しく彰る、局破れて後、徒に ④連幹を勞す。所以に道ふ、肥邊は得易く、瘦肚は求め難し。 ⑤思ひ行けば即ち往々に粘を失す、心危なれば乃ち時々 ⑥頭撞す。國手に誇つて謾に神仙を説くことを休めよ、局を贏つて籌に輸くることは即ち問はず、且く道へ、黑白未分の時、一著甚れの處に落在す。 ⑦良久して云く、「從前の ⑧十九路、幾多の人をか迷悟する。 ⑨し、公加嘆すること之を久しうす。師、會聖巖に退休す、佛祖の奧義を叙して九帯を作りて曰く、「若し圓極の法門に據らば、本十數を具す、今此の九帯、已に諸人の爲めに説き了れり、更に一帶あり、還つて見るや、若しまた見得分明ならば卻つて請ふ、出で來つて説け看ん。説き得て分明ならば爾に許す、前の九帯に通じて道眼を圓明することを。若し見親切ならず、説いて相應せずし

①五を綴る云々。王荆公詩話に、太宗の時有待詔買支者、常侍上碁、太宗饒之、支三子、支常輸二路。鶴林玉露一八、碁工連貫一局、乃起謝曰、某是臨安第一手の碁、凡來著者皆饒之。一先、今官人之碁、反饒得某一先、天下無敵子。矣と按するに饒は多也の義にて、碁の劣りたる方より石を先に置くは、敵手より石數多し、故に石を置くを饒一先は、先をする也、饒多とばかりも云ふ、今饒三は三日置くこと、綴五は五日置くことなり、綴は形を以て云ひ、饒は數を以て云ふ也。  
②又通一路。五目三日置いたら又其上に一手あしらふなり、「まける」を輸二路と云ふ、路は盤にて云ひ、子は石にて云ふ、通の字通線路の意、相

て、唯吾が語に依つて己が解と爲さば、則ち謗法と名く。諸人此に到つて如何ん。 ①乘無語、師叱して之を去らしむ。師少き時、達觀の穎薛大頭と七八人、蜀に入つて香林遠和尚に水晶宮に見え、雲門の宗旨を探る。幾んど横逆に遭ふ、智を以て脱することを得たり。衆師の吏事を曉すを以ての故に、遠録公と號す。師晚年資侍者を得て甚だ之を喜び、凡そ人を接する皆資に委す。

贊に曰く、「活衲僧、只一箇。

口餓うる時佛祖を將て吞む、脚到る處叢林を把つて攪く。

蠶龍の匣に鳴る吹毛の劍、威萬國の中に行ふ、老蚌の胎を出づ明月の珠、

光八絃の表に透る。

老東山を指して白雲正傳の印を奪はしむ、己が欲せざるを人に施す、青

華嚴を逼めて明安密付の衣を受けしむ、殃備に及ばし過我に在り。

神仙一局の碁密に盤裏に排す、機路の上關を衝く、摩醯三隻の眼頂

門を墜亞す、觸體前に失照。

雲門の宗旨を探る、破草鞋蜀山の雲を踏斷す、葉縣の家風を苦しむ、鑰

碁なれば容捨なしに打てども、五目三日置かず手合なれば、置いた上に又一手あしらうてうつ、そこで弱手も相應に打てる意なり。綴五饒三の語は置くにも置かずにも通ず、此は又字あるゆゑ置かずの方也、又はその上にまた也。①閉門作活。目を「こしらへていさん」とする也。  
②奪角衝關。字の如く解すべし、又碁の詞に衝は「さしいる」にて關は「一けん」なり。  
③硬節虎口。或説に硬節は敵の石切り難き處、石を二つづつ雙ふを竹の節と云ふ、これ「どうしてもきれぬ」手也、虎口は敵の石地へ入り難き處を云ふ。  
④連幹。碁の詞、緯は「はれかける」、幹は「へだつ」。  
⑤肥邊易得瘦肚難求。頭書肥局の四邊の地也。或は言はく、石



匙を竊んで擅に香積の鎖を開く。

深秋簾幙千家の雨、三世の諸佛未だ擲揄することを許さず、落日樓臺一

笛の風、白牯狸奴甚の分曉をか討ねん。

横に九帯を拖く、葛藤窠裏出頭し來る、萬機を休罷す、會聖巖中に枕を

高くして臥す。

少時落頼、録公の名を贏ち得たり、年老いて魔と成り、資侍者を引いて全

身草に入らしむ。」

慈明圓禪師

師諱は楚圓、汾陽に嗣ぐ、全州李氏の子、少くして書生となり、母賢に

して出家せしむ。谷泉埒瑯等と汾陽に見えて旨を悟り、後大愚の數輩と同

じく陽を辭す。相讓つて肯て參頭と爲らず、陽偈を示して曰く、「天頭なし

吉州城畔に戈矛を展ぶ、將軍の疋馬林下に過ぐ、員州城裏鬧啾々。」師曰く、

「某甲は何人ぞ敢て此の記前きまへに當る。」と。遂に首と爲つて辭し去る。後福嚴

に住す、黃龍、師に見ゆ、氣を以て自負す、師痛く之を叱す、趙州勸婆の話

を擧して龍に問ふ、龍對なし、數日に至つて方に省す。頰を呈して曰く、

の多處とあり。四角のことか、角には手の多き者なれば、一通りは下手でも「かため」やす

きもの故、肥邊は易得と云ふか。瘦肚は瘦局の中心なり。或は言ふ、石の少處とあり、真中では目を持つこと難し、上手に掛けては猶さら真中で活きること六づかしき者也、故に瘦肚難求と云ふか。

⑤ 思行。行は進む意、むしやうに「進めば失粘心鹿なれば、頭を「うつ、おさへらるゝ」意、甚の詞に粘はつぐことを云ふ。

⑥ 頭撞。「つきあたる、ゆきあたる」也、「むかうへゆかれぬ」意なり。

⑦ 羸局輪籌。ロ十二番碁戦のうち勝てども、石にては二目負け也。局は番數にて云ひ、籌は碁石にて云ふ。

⑧ 十九路。碁盤の横堅各九筋あるものなり。

「叢林に傑出す是れ趙州、老婆勘破して來由なし、而今四海清うして鏡の如し、行人路を以て籬となす

なかれ。」仍ち掌中に於て有の字を書す、師見て謂つて曰く、「好は則ち好なるも、中の有の一字不是

なり。」龍遂に掌を開いて之を示す、師印可す。楊岐參する次で、問ふ、「幽鳥語喃喃、雲を辭して亂

峯に入る時如何ん。」師曰く、「我は荒草裏に行けば、汝は又深村に入る。」岐曰く、「官には針をも容れ

ず、更に一問を借らん。」師便ち喝す、岐曰く、「好喝。」師又喝す、岐も亦喝す、師連喝兩喝す師、泉大

道の來るを見て問うて曰く、「片雲谷口に横ふ、游人何れの處にか來る。」泉顧視して云く、「夜來何れの

處の火ぞ。古人の墳を焼出す。」師云く、「未在、更に道へ。」泉、虎聲を作す、師打つこと一坐具、泉便

ち師を推して坐に就かしむ。師、虎聲を作す。泉曰く、「我れ七十餘員の善知識に見ゆ、今日方に作家

に遇ふ。」と、時に眞點胸、善侍者の爲めに折難せられ、金鑿より還る、師呵して曰く、「解夏未だ一月なら

ず、乃ち已に此に至る、叢林を破壊して何の忙はしきことある。」眞曰く、「大事未だ透脱せざるのみ。」

師曰く、「汝何を以てか佛法の要切となす。」眞曰く、「雲の嶺上に生ずる無ければ、月の波心に落つるあ

り。」師詬りて曰く、「面皴み齒豁にして猶ほ此の見解をなすか。」眞曰く、「願はくは爲めに之を決せよ。」

師曰く、「汝我に問へ。」眞前話を理す、師曰く、「雲の嶺上に生ずる無し、月の波心に落つるあり。」と。眞

遂に契悟す。師、同人の至るに因つて上堂曰く、「颯々たり涼風景、同人寂寥を訪ふ、茶を煮る山上の水、

鼎を焼く洞中の樵、珍重。」と。楊李の二公、師と法友たり、問答は師の本傳に見えたり。



贊に曰く、「未だ母胎を出でざる時、已に超方の志を具す、儒冠を厭ふて東魯の書を棄つ、祖室に入つて西來意を叩く。

隨緣放曠、千尋の浪戯に吞舟の魚を容る、大智洞明九曲の珠、穿つことは絲を引くの蟻に類る。

身を軍伍に竄す、汾陽に塞草叢中に見ゆ、老婆を勘證す、黃龍を南金爐裏に煮る。

骨董箱斯文の重寄を荷ふ、一縷千鈞を繋ぐ、將軍の馬城畔の戈矛を展ぶ、隻身萬騎に嬰る。

深村荒草、楊岐と轍を同じくして途を同じうせず、野火古墳、谷泉の自ら倒れて還つて自ら起る

に聽す。

鷹嶽頂に搏つ、殺氣雲を蒸す、虎霜華に踞す、腥風地を捲く。

痴兒の狂見解を掃ふ、波心の月ありて嶺頭の雲なし、<sup>①</sup> 同人の寂寥を

訪ふを謝す、洞中の樵を焼いて山上の水を煮る。

① 同人。同志人也、周易、同人二人同心其利斷金。

祖庭秋晩る、尋思して公侯の捍城を要す。且つ楊翰林李都尉を擒下す。」

楊岐會禪師

師諱は方會、冷氏に生る、袁州宜春の人なり。慈明南原に住する時、師往いて參依す。石霜に遷る

に及んで、師俱に自ら請ふて監寺と作る。明飯罷んで必ず山行す、師其の出でて未だ遠からざるを闌

つて即ち鼓を搥つて衆を集む。明遽かに還つて曰く、「什麼を作す。」師曰く、「晩參。」明遂に示衆あ

り、叢林因つて晩參と號す、後出世纔かに座に陞れば僧便ち出づ。師曰く、「漁翁未だ釣を擲げず、躍

鱗浪を衝き來る。」僧便ち喝す。師云く、「道ふを信せずや。」僧掌を撫して衆に歸す。師云く、「龍王多少

の風をか消得する。」僧問ふ、「如何が是れ佛師。」云く、「三脚の驢子蹄を弄して行く。」曰く、「只者の便ち

是なること莫しや。」師云く、「湖南の長老。」示衆罷んで下坐。九峯の勤、把住して曰く、「且喜すらくは

箇の同參を得しことを。」師曰く、「同參底の事作麼生。」曰く、「楊岐、犂を牽けば九峯把を拽く。」曰く、

「正與麼の時、楊岐前に在るか、九峯前に在るか。」勤擬議す。師拓開して曰く、「將に謂へり、同參と元

來不是。」是より名諸方に聞ゆ。上堂曰く、「楊岐乍に住して屋壁疎なり、滿牀盡く布く雪の眞珠、

項を縮卻して暗に嗟吁す。」良久して云く、「翻つて憶ふ、古人の樹下に居りしことを。」と、慶舟峯、師

を贊して曰く、「會は玉人の瑠璃を治するが如し、碓硯棄つるのみ。故に光明盛大にして克く其の家

を世ぐもの、蓋し碧落の碑、厝本無ければなり。」と。

贊に曰く、「神機穎悟、逸氣軒渠。

道を問うて亂峯喃々たる幽鳥を引く、鈎を垂れて浪を衝く鱖々たる游魚を釣る。

慈明を逼つて晩參、裳を褰けて鼓を搥つ、九峯と伴を合せて、把を拽き犂を扶く。

三脚の驢に跨がる、象龍の頂を踏む、單丁の院に住す、滿床氷雪の珠を撒す。

栗棘蓬白雲端の吞吐することを要す、打脚鑪保寧勇に付して提持せしむ。

國譯希叟和尚五家正宗贊

六五



斤削鏗鏘、匠石の瓊瑩を去るに擬す、鉗鎚妙密、玉人の璠瑀を治するが如し。故に少室の單傳掌握に歸す、後人の揣らす衣を竊み譽を沾ふことを視れば、師に愧ざることを得んや。

黃龍南禪師

師諱は慧南、慈明に嗣ぐ、信州章氏の子、懷玉山に度を受く。初め泐潭の印證を受け、衆を領じて游方、氣を以て自負す。偶々雲峯の悦に會して同じく西山に遊ぶ。夜話の間、因に泐潭授くる所の旨を問ふ、師其の要を言ふ。悦曰く、「泐潭授くる所は藥汞銀の如し、徒に玩ぶべし、煖に入れば即ち流る、公決して此の事を明めんと欲せば、須らく慈明に見えて始めて得べし。」と、師怒つて枕を以て之に投ぐ、悦與に語らず、師黙して之を計つて曰く、「悦翠巖を師とす、我をして明に見えしむ、縦ひ得る所有りとも、悦に於て何か有らん。」黎明に遂に行く、中路に至りて慈明の事を事とせざるを聞いて遂に往かす。福嚴に寓止す、賢、師に命じて書記を掌る。俄かに賢卒す。郡守、明を以て之に繼がしむ。師曰く、「悦我をして渠に見えしむ、今此に坐して以て待たん。」と、明至る、望み見るに心容俱に肅む。晚參に及んで痛く諸方の邪解を叱す。師乃ち曰く、「大丈夫此の事の爲めに決擇を求む、豈に疑を胸中に置くべけんや。」香を懷にして指示を求む。明曰く、「書記徒を領じて行脚、事あらば坐して商推すべし。」と、侍者をして榻を進めしむ、師固辭す、明曰く、「書記、雲門禪を學ばば必ず其の旨を善くせん。洞山に三頓棒を放すと曰ふが如きんば喫すべきか喫すべからざるか。」師曰く、「喫すべし。」明色

を莊にして言、「棒の聲を聞いて便ち喫すべし」と言はゞ、且より暮に至るまで鴉鳴鵲噪、鐘魚鼓板の聲を聞いても亦棒を喫すべきか、棒を喫せば何時か當に已むべけんや。」と、師面熱し汗下る、後に方に旨を悟る。師、黃龍に住す、佛手驢脚生縁を以て學者を勘驗す、黃龍の三關と號す。慈明に角虎たり、人贊して曰く、「石霜の角虎、眼光百歩の威を搖かす。」と。書に云く、「明月の珠、夜光の璧、暗を以て之に投すれば、則ち劍を按じて之を視ざることなし。」

贊に曰く、「懷玉山に經を受け、故紙堆に鑽出す。」

天地に塞がる壯膽氣沖々たり、江湖に満ちて 匾頭の名籍々たり。

枕子を擲ちて雲峯の悦を打つ、汞銀の煖に入れば即ち流ることを 怪しむ、胸次を指して慈明の圓を扣く、痛棒の聲を聞いて喫すべしと云ふことを愧づ。

會監寺の栗棘蓬と、十歲同參、澄散聖の冬瓜の印を搭けて、半生屈を受く。

通衢に坐して物を嚮ぐ、遺簪墮珥之を探つて意消す、三關を立して以て人を驗む、佛手驢脚之に近づけば魂失す。

角虎の眼を奪ひ、光百歩の威を搖かす、黃龍の鼻を奮つて九因の蟄を衝起す。

匾頭。匾方典切。韻會に器之薄者曰匾、ひらたきことを云ふ。ひらたくなつていがむを匾々地拜伏など云ふ。西游鳥を罵りて匾毛畜生と云ふ、羽毛のべつたりしたる故也。② 恠承銀。恠は怒ること云ふ。「おはらたてられな」と云ふを恠と云ふ。



寶覺心禪師

夫れ是れこれを臨濟克く其の家を世ぐ、古を照し今を照し、明月の珠、夜光の璧と謂はん。

師諱は祖心、黃龍に嗣ぐ、南雄の人、姓は鄔氏、幼にして儒業を習ひ、年十九にして目を亡ふ。母之を禱つて復明かなり。出家して詩を獻す。得度の初め雪峰に謁して留る三年、次に黃龍に依る、四年入處なし。一日湯を傾け手を沃いで省あり、而も機未だ發せず、後石霜に止りて傳燈を讀み、僧、多福に問ふ、「如何か是れ多福一叢の竹。」福曰く、「一莖兩莖斜なり。」僧曰く、「不會。」福曰く、「三莖四莖曲れり」と云ふに至つて頓に二師垂手の處を見る。「後龍入滅す、師繼いで住持す、室中多く拳を擧げ、曰く、「喚んで拳頭と作さば則ち觸る、喚んで拳頭と作さざれば則ち背く。」衆契ふことあるもの少し。張無盡、師に見えて頌あり、曰く、「久しく黃龍山裏の龍と響く、到り來れば只住山翁を見る、須らく知るべし、背觸拳頭の外、別に靈犀一點の通することなし。」當時諸方歎服せざることなし。大慧云く、「山僧後來見得、惜しいかな無盡已に死することなし。彼云く、須らく知るべし、背觸拳頭の外、別に靈犀一點の通することなし。若し此の頌を將つて晦堂を見んと要せば、亦遠からずや。」靈源贊して曰く、「三關逆に摧く、玄機を鷲嶺に超え、一拳垂示赤體を龍峯に露はす。聞く時富貴見て後貧窮、年老いて浩歌す、歸り去つて樂しむ、從教人の喚んで住山翁となすことを。」魯直聞いて笑つて曰く、「無盡靈犀一點と言ふ、此の蕙草虛空の爲め耳穴を安す、靈源贊を作つて之を分雪す。是れ一字を寫

して畫を著けず、山谷師に參する次で、問うて曰く、「夫子の道く、我を以て隠すとすか、吾れ爾に隠すことなしと如何。」谷屢説けども皆許されず。一日偶同じく閑行す、天香院に滿つ、師谷に問うて曰く、「還つて桂花の香を聞ぐか。」谷曰く、「聞ぐ。」師曰く、「吾れ爾に隠すことなし。」谷遂に省あり。死心參する次で、師拳頭の話擧して參せしむ、二年を経て方に旨を得たり。然れども談辯を尙んで抵牾する所なし、師之を患ふ、與に語つて銳處に至る。師遽かに曰く、「住みねく、食を説いて豈能く人を飽かしめんや。」心窘めて乃ち曰く、「某甲此に到る、弓折れ箭盡く、望むらくは和尚慈悲、箇の安樂の處を指し給へ。」師曰く、「一塵飛んで天に翳す、一芥墮ちて地を覆ふ、安樂の處、政に上座が許多の骨董を忌む、直に須らく無量劫來の偷心を死卻して乃ち可なるべし。」と、心趨かに出でて下板に默坐す。會ま知事、行者を打つ杖聲を聞いて忽ち大悟、趨つて師に見ゆ。一履を納ることを忘る、即ち自ら謂つて曰く、「天下の人は皆是れ學得底、某は是れ悟得底。」師笑つて曰く、「選佛に甲科を得たり、何ぞ當るべけんや。」と。草堂參する次で、師、風幡の話擧げて問ふ、堂、適かに入處なし。時に猫有つて旁らに在り、師因に指して曰く、「子彼の鼠を捕へんと欲するを見るや、雙目瞪視して瞬せず、四足踞地して動かす、諸根傾向して首尾一直なり、擧するに中らざるはなし、子能く是の如くにして、心異縁なく、六根自ら靜かにして

分雪。雪も分明の義。雪臥記談上に、「收捉道潛、狂法編管兗州、後來經朝廷雪理文正爲僧」とあり。  
偷心。不正念也、一心妙戒經に詳なり、「わうちやく」と譯す、可也。  
下板。單の下座也。



默然として究めば、萬に一を失はず。堂、言下に於て大悟す。靈源、師に參ず、因に玄沙の語を閲して倦んで經行す。歩促にして履を遺す、俯して之を取つて大悟す、以て師に告ぐ、師曰く、「縁より入る者は永く退失なし。」山谷曰く、「黃龍の子孫、日月を掲ぐがごとし。」又曰く、「衆角多しと雖も一麟足れり。」

贊に曰く、「本色の住山翁、一拳背觸を分つ。」

通方の眼歡睦して又重ねて明かなり、充棟の書弃捐して再び讀むことなし。

斷臂安心密傳の旨を窮む、赤手に湯を沃ぐ、佛手驢脚嶮布の關を透る、峻機鋏を嚙む。

山谷を活埋し了る、巖前の桂香邇遐に散す、親しく多福に見え來る、庭際の竹莖斜曲を分つ。

塵天に飛び翳掃ひ去り難し、閉骨董切に忌む膺を礙ふることを、猫鼠を捕む巧盡きて拙生ず、窮伎倆誰が能く目を控ねる。

縁より入れ失することなし、靈源を殺し鈍鋏吹毛に勝れり、選佛甲科を得たり、死心を藥して砒霜未だ是れ毒ならず。

冷照午夜碧潭の月を缺く、玉斧巧みに修成す、清彈陽春白雪の絃を斷じ、鸞膠親しく接續す。

黃龍の子孫、日月を掲ぐるが如し、數を以て知り難し、衆角多しと雖も此

の一麟儘足れり。」

○儘足。儘は「すぬぶん」と譯す、許す辭也。

白雲端禪師

師諱は守端、衡州葛氏の子、茶陵の郁山主に依つて剃度す。初め楊岐に見ゆ、岐問うて曰く、「聞く汝が受業の師、橋を過ぎ擲を喫して省あり、偈を作る甚だ奇なりと、能く記するや否や。」師即ち誦して曰く、「我に神珠一顆あり、久しく塵勞に關鎖せらる、今朝塵盡きて光生じ、山河萬朵を照破す。」と、岐大いに笑つて起ち去る、師愕然として終夕寐ねず、詰旦復之を咨ふ、岐云く、「子昨夜狐を打するを見るや。」曰く、「見る。」岐曰く、「汝が一籌渠に及ばず。」師大いに駭いて曰く、「何の謂ぞ。」岐曰く、「他は人の笑ふことを愛す、爾は人の笑ふことを怕る。」師、省あり。後出世して岐の衣を受けて子孫に傳ふ。衆に示して曰く、「我が指を按ずるが如き、海印光を發つ。」と、拄杖を拈じて云く、「山河大地、水鳥樹林、情と無情と盡く拄杖頭上に向つて大師子吼を作して摩訶大般若を演説す、且く道へ、南嶽箇の什麼の法門をか説く。南嶽は洞上五位の修行、君臣父子を説き、各其の宜しきを得たり、寒岩異草の青を守ることもなけれ。白雲を坐着するも宗妙ならず、天台は臨濟の三玄・三要・四料・一喝に賓主を分ち、照用一時に行す。箇の中の意を會せんと要せば、日午に三更を打す」と。廬山出來つて道く、「爾兩箇の漢、正に葛藤窠裏に在り、道ふことを見ずや、無間の業を招かざるを得んと欲せば、如來の正法輪を誘るなけれ。此の三箇の見解若し衲僧の秤子の秤に上せば、一箇は重きこと八兩、一箇は重きこと半斤、一箇は半文錢に直らず。但願はくは春風齊しく力を着けて、一時に吹いて我が門に入



り來ることを。拄杖を卓して下坐。示衆に云く、「若し端的に一回汗出づることを得ば、便ち一莖草の上に向つて瓊樓玉殿を現す、若し未だ端的に一回汗出づることを得されば、縦ひ瓊樓玉殿あるも、却つて一莖草に蓋却せらる。作麼生か汗出づることを得去らん。自ら一雙窮相の手あり、未だ嘗て容易に三臺を舞はさす。」と。郭功甫、師に見ゆ、問うて

窮相手。貧なる手の筋也。

曰く、「牛純なりや。」曰く、「純なり。師之を叱す、甫拱して立つ。師曰く、「純なるか純なるか、南泉大瀧も此に異なることなけん。」仍つて偈を贈つて曰く、「牛山中に來れば水足り草足る、牛山を出で去れば東に觸き西に觸く。」又上堂曰く、「上大人丘乙巳化三千七十七士爾小生八九子佳作仁可知禮也。」甫、省あり。師、臨濟三頓棒を頌して曰く、「一拳に拳倒す黃鶴樓、一踢に踢翻す鸚鵡洲、意氣ある時意氣を添へ、風流ならざる處また風流。」浮山聞き得て大いに喜び、五祖を指して師に見えしむ。祖到つて南泉摩尼珠の話を問ふ、師之を叱す、祖領悟す。師、祖をして磨頭と作らしむ、人祖を是非す、師、祖を喚んで問ふ、祖曰く、「然り。師之を掌して退かしむ。祖曰く、「候結算。」次の日、方丈に到り、「某甲婦人に與へ酒肉を買ふ錢あり、三百貫を剩し得て送り、常住に還す。」師大いに驚いて始めて誘ふことを信ず。保寧の二上足處凝・處清、師に參す。凝は侍者となる、師膈氣の病あり、凝常に蘆服を熨して以て不時の需に備ふ。師、傳大士講經因縁の偈を作つて曰く、「大士何を曾て講經を解せん、誌公の方便且相成す、案上を一揮して俱に取ることなし、直に得たり梁王之努眼睛。」凝に謂つて曰く、「努る

底は是も什麼ぞ。此の一句乃ち凝が爲めに老婆禪を説く。凝は天柱に住し、清は太平に住す、機辯あり、五祖之を畏敬す。清、凝に謂つて曰く、「吾弟の禪は乃ち是れ老和尚の爲めに蘆服を熨して換る底なり。」と、叢林傳へて口實とす。

贊に曰く、「弱冠にして師を尋ね、早年にして住院、得處癡痕なし、用時汚染なし。

魔壘を勦除して、袖中に雪刃を藏し光焰々として生ず、衲僧を勘辨して、水上胡蘆を捺す機軸々として、轉ず。

栗棘を呑み、娘生の口を塞斷す、楊岐の毒を懷ふて恨卒に消し難し、青氈を擧げて遠つて舊主翁に與ふ、知んぬ圓通の客情遣り易からざることを。

金鈎を九江の曲に抛げ、可憐生鱉を認めて鯨となす。飯店を白雲の深きに開き、放慕願猷に和して麪を糶る。

葛藤窠裏、三箇の漢の南嶽天台を説くを斥く、毛孔汗中、一莖草を指して瓊樓玉殿と現す。

瞎驢に跨つて溪橋を踏斷し去る、村山主に掩彩せらるること多年、白牛を叱して露地に安眠して休す、窮官人の打成一片なることを喜ぶ。

臨濟三頓の棒を頌す、知音に遇ふこと少なり、摩尼五色の珠を投ず、多く劍を按ずるに逢ふ。

① 娘生口。母の「うみつけた」口也。  
② 放慕願。碧巖五十三則に曰く、「慕願古抄々漫滅不三別白。」と  
③ 掩彩。威光を減するの意。



酒肉を買ふ餘剩の錢物、演閣黎誘られて無根なるを信ず、蘆菔を煨して換得る底の禪、擬侍者をして慚惶満面ならしむ。

最も端なきは他人の屈胸の衣を受けて、萬古叢林惡風相扇ぐことを致す。

保寧勇禪師

師諱は仁勇、四明竺氏の子、少くして天台の教を習ふ。衣を更へて雪竇に謁す、竇熟々之を視て呵して曰く、「中央座主。」と、師の氣不平、發憤して山を下り、雪竇山を望み、大展三拜して、誓つて曰く、「我れ此の生、行脚參禪、名雪竇の如くなる過ぎずんば、斷じて郷に歸らじ。」徑ちに往いて楊岐に見えて旨を悟る。保寧に出世して、道、叢林に播く、果して師の言の如し。師、雲蓋の頰に頰を呈して云く、「柳栗を拈將して路縱横、大地清風颯々として生ず、北斗柄斜にし軽く撥轉す、大唐の人眼直に須らく盲すべし。」上堂云く、「一は是れ一、二は是れ二、三は是れ三、四は是れ四、數目甚だ分明、上下資次に依る何の事かある。」拄杖を以て畫一畫して云く、「大衆一時に六十の甲子を亂却し了れり。」立春上堂、「立春の日春牛を打す、一棒兩棒千頭萬頭、雪花深く覆ふて辨すること得ず、頂門に眼あり、徒に悠悠手を拍つて云く、「囉囉哩。」春風に惱亂して卒に未だ休まず。」上堂、「風條を鳴し雨塊を破る、曉來

①資次、次第の意ならん。進學解に、商財賄之有凶、計二班實之榮輝、と、この資を資給と見たる説あれども、財賄に對すれば二つ物に非ず、且俸祿に高下とは云はれまじきなり、資字書に次第義なし。雜錄上に、「陞二教班實一居二禪之上、入天寶錢四十三、正二禪道揚所班次云、林靈素叨冒資品、素亂朝綱、と、合せ考ふべし。

②囉囉哩。歌曲の「あひにいれる」語也。

枕上罵聲碎く、蝦蟇蚯蚓一時に鳴く、妙徳空生都て會せず、都て會せず三箇群を成し、四箇隊を作す、幼々窈々、飄々飄々、南北東西に向つて、梨花李花を折得て、一佩兩佩、牧童の頰に曰く、「西風浩浩たり楚天の秋、索寞として人なし野渡頭、沙鳥晚來俱に散盡、嗚啞歸去つて倒に牛に騎る。」陳遷秀才に答へて曰く、「胡孫の兒子最も惶々、千年の鬼眼睛を弄することを愛し、懊惱能要相を知らざることを。有時我が頂頭に來りて行く。」

贊に曰く、「四明に家し、保寧に住す。」

鬼眼睛人に逢ふて拈弄す、窮伎倆到る處に施呈す。

棒春牛を打す、深く覆ふ雪花辨すべき難し。杖北斗を挑ぐ、大唐の人眼直に須らく盲すべし。

曉枕上幽鳥吟殘す、梨花を折る一佩兩佩、野渡頭沙禽散じ盡く、嗚啞

を聴く三聲四聲。

達磨を老臊胡と指す、草鞋を著いて他の肚裏より過ぐ、陳遷を胡孫子

と罵る、能要相我が頂額に來りて行く。

杜撰巡官、花甲子指輪上一時に亂了す、中央座主、天台の教脚

跟下十字縱横。

①胡孫。胡孫也、通じて胡孫に作る、惶々は利口などと譯す。②唐土の人を罵る時多く其人を指すことなり、碧巖錄にある、「指三柳樹一罵一槐樹」に同じ。板點に指してとあるは非也。水滸傳十三回に、「雷橫大怒指三着劉唐、大罵通云々、」と、指三罵達磨、指三罵陳遷の互二人也、指着は罵道の語、水滸に多く有り。③花甲子。六十甲子の圓圖也、花は丸きものを云ふ。④中央。荀子に美麗姚冶と、注に、美好の貌、莊子の註を參考すれば、人の器量よく、伊達な様子なれども、ぐにやぐととして氣概のなき様子ならん。大慧普說に、「記得法雲果和



潤歩を行じて雪竇の高蹤と並び駕す、空拳を奮つて楊岐の破屋を把りて  
支撐す。

水銀假なく阿魏に眞なし、人の價を過して會兄に打與するなし。」

眞淨文禪師

師諱は克文、黃龍に嗣ぐ、關西鄭氏の子、師、瀉山に在り、夜間雲門の  
語を誦す。僧問ふ、「佛法は水中の月の如し、是なりや否や。」門云く、「清波透路なし。師、省あり、氣  
を以て自負す、諸方目して飽參となす、其の鋒に嬰る者あること少し。積翠の道、宇宙に喧しきこと  
を聞いて、徑ちに往いて之に見ゆ。凡そ入室下語、翠皆許さず、師怒發して乃ち曰く、「我自ら悟處あ  
り、渠我が語を識らず。」遂に行いて翠巖に至つて順和尚に見ゆ。順問ふ、「甚れの處より來る。」曰く、「  
積翠。」順曰く、「甚れの處の人ぞ。」曰く、「關西。」順曰く、「汝が師は是れ誰ぞ。」曰く、「北塔。」順、聞い  
て乃ち哭す、師其の故を問ふ、順曰く、「昔訥師叔、久しく渠に參す、渠が説話を會せず、某が禪に參  
得するに及んで、渠に見えんと欲す、渠已に死す。」乃ち問ふ、「還つて新黃檗を識るや否や。」曰く、「識  
る。」順曰く、「如何ん。」曰く、「甚だ好なり。」順曰く、「渠一轉語を下し得て、便ち黃檗に住す、佛法は未  
だ夢にも見ざることあり。」師言下に於て頓に積翠の用處を見る。因つて悔て再見せんと欲するも得る  
能はず、遂に順に白す。順曰く、「何ぞ妨げん、我當に書を作りて積翠に與へて子をして歸らしめん。」

尙、此一伴大事須、是一個入  
山撞見大蟲、驚腰捉住、纔作二  
兩截、有如此氣槩、底人、方  
可擔荷、若是映々、祥々、匙挑不  
上、半疑半信、底卒摸索不著、  
誠哉是言云々、と、央庠映祥  
は同音。

師遂に積翠に回る、翠見て問ふ、「甚れの處より來る。」師曰く、「翠巖。」翠曰く、「頼に老僧が在らざるに  
遇ふ。」師曰く、「甚れの處にか去る。」翠曰く、「天台に普請し、南嶽に游山す。」師曰く、「某甲恁麼に自在  
なることを得たり。」翠曰く、「脚下の鞋、甚れの處よりか得來る。」師曰く、「廬山七百五十文に唱へ得た  
り。」翠曰く、「何ぞ曾て自在なることを得ん。」師曰く、「何ぞ曾て自在ならざらん。」翠之に駭く。兜卒の  
悦、道吾に在りて衆に首たり、一日數衲子を領じて雲蓋の智に謁す、智與に語る、未だ數句に及ばず、  
盡く所蘊を知る、智乃ち笑ひ悦に入室を求む。智問ふ、「曾て洞山の文和尚に見ゆるや否や。」曰く、「關  
西子頭腦なし、一條の布裙を拖き、屎臭の氣を作す、甚の長處かあらん。」智曰く、「首座但屎臭氣の處  
に向つて參取せよ。」悦、教に従つて洞山に往いて、依止すること未だ久しからざるに、深く要旨を領  
す。佛眼五祖を辭して歸宗に至つて師に參するの後、祖圓悟に謂つて曰く、「眞淨波瀾闊し、大旗を弄す  
る手段遠し。彼に到りて未だ必ずしも相契はず。」と、未だ數日ならざるに書あり、悟に祇して曰く、「比  
歸宗に到つて偶然として網に漏る。聞く、雲居の清首座、晦堂の眞贊を作る。曰ふことあり、「聞く時の富  
貴、見る後の貧窮。」と、頗る他を疑着す。」と、相見するに及んで果して契合す。年を踰えて復祖山に還  
る、衆請うて秉拂、却つて心と説き性と説く。祖曰く、「遠兄此くの如く説禪す、また他を管するなかれ。」  
無盡兜卒に見ゆ、清素侍者最後の句の事を舉して、相を罷むるに遠んで歸  
宗に過ぐる、夜話此に及ぶ。師輒ち怒つて曰く、「是れ何の嘔血の禿丁ぞ、

●嘔血禿丁、ばちあたりのはげ  
つりかけめ」と譯す。禿は總



脱空護語豈に信受すべけんや。遂に語を終へず。無盡荆溪に居る、覺範往いて之に見え、盡與に語つて曰く、「惜しいかな眞淨、此を知らざることを。」範曰く、「相公只清素末後の句を知りて、眞淨眞業現前するに及んで覺ること能はず。」盡驚いて曰く、「果して此ありや。」曰く、「疑はゞ則ち別に參せよ。」盡言下に於て頓に師の用處を見る。遂に香を炷き、歸宗を望んで悔謝す。東山一日師の提唱を得て之を讀んで甚だ喜ぶ。圓悟に謂つて曰く、

て僧を罵る辭也。禿驢賊、禿々奴老、禿兵など、東坡僧なきらふて、不禿不毒、不毒不禿、轉毒轉禿と罵りたることあり。  
慚愧。「ありがたい」と譯す、戴叔倫の詩に、「知君來得去、石尤風之地。」

慚愧す末法の中、此の眞善知識有ることを。師游方の時、二僧と偕に行き、谷隱の薛大頭の處に至る。問ふ、「三人同行必ず一智あり、如何か是れ一智。」二僧無語、師下肩に立つて聲に應じて便ち喝す、薛拳を擧げて相撲の勢を作す。師云く、「再勸に勞せず。」薛杖を擡いて趁出す、薛、石門の慈照に見ゆ。贊に曰く、「關表に生緣、儒官を顛脱す。」

諸方に走つて氣常に自負す、直指を窮めて心未だ安きこと能はず。雲夢の八九を胸中に吞む、曾て芥蒂することなし、蜀江の八千を舌上に漲らす、儘波瀾あり。雙鞋子甚の處より得來ると問ふ、積翠の南機路を激揚して活す、條布裙を拖いて屎臭の氣を作す、兜率の悅懽體を嗅着して乾く。一生大旗を弄す、元勳を龍蛇陣上に策し、三關驢脚を挫き、十影を驥馬群間に馳す。

最後の句無盡をして疑はゞ則ち別に參せしむ、眞業を點行す、一轉語黃檗に住す、未だ曾て夢にも見ず、疑團を打破す。老東山背後に贊揚す、人に逢ふて頻りに合掌す、薛大頭面前に喝せらる、慚顔を着るに地なし。鳩毛本毒、虎體元斑なり。

妙處言はんと欲して言及ばず、月光影を移して欄干に上す。五祖演禪師

師諱は法演、白雲に嗣ぐ、蘇州鄧氏の子、初め成都に在りて講を聴く時、「西天の外道立義して佛弟子に問うて云く、「菩薩成佛の時、神、智と冥し、理、境と會して能證所證を分たす。畢竟何を以て證となす。」弟子義墮、乃ち鐘鼓を鳴さず、後門より出入し、袈裟を返搭す。三藏至つて再び外道を集めて釋して云く、「人の水を飲んで冷暖自知するが如し、道乃ち伏す」と云ふことを擧げて、諸を法師に徴して云く、「冷暖固に知るべし、未審し自知の理如何ん。」衆皆口を杜づ。中に云へるものあり、「汝此を明めんと欲せば、須らく南方に佛心宗を明むる者に見ゆべし。」と、師遂に南に來りて興元に至り、時を経て逗留す。受業の師聞き得て、乃ち書を附して曰く、「汝誓齋を出で、復た齋瓮に入る。」師遂に發して行き、浮山に至り、此の義を理して問ふ。山曰く、「如來に密語あり、迦葉覆藏せず。師乃ち疑を釋く。山因に指して白雲に見えしむ。師到りて因に摩尼珠の話を問うて大悟し、投機の頭を作りて曰



く、山前一片の閑田地、叉手叮嚀に祖翁に問ふ、幾度か賣り來り、還た自ら買ふ、爲めに憐む松竹の清風を引くことを。「雲之を印可す。衆に示して云く、「大凡參學は俊鶻の鷄兒を打つが如し、纔かに地に泊んで便ち飛び去る。若し坐に蹲るあらば即ち堪へず。」と。小參云へるあり、「某十有餘年、海上に參尋、數人の尊宿に見ゆ、自ら謂ふ、了當すと。浮山の圓鑑の會下に到るに及んで、直に是れ口を開くことを得ず、後に白雲の門下に到つて、一箇の鐵酸礬を咬破して、直に得たり、百味具足することを。且く道へ、礬子の一句作廢生か道はん。」乃ち云く、「花發いて鷄冠早秋に媚ぶ、誰人能く紫絲頭を染む、有時風動いて頻りに相倚る、塔前に向つて鬪ふに休せざるに似たり。」角を聞く偈に曰く、「幽幽たる寒角孤城に發す、十里の山頭漸く香冥一種、是の聲限なき意、聽くに堪へたるあり聽くに堪へざるあり。」圓悟侍者となる、偶陳提刑道を問ふ、師曰く、「提刑會て小艶の詩を讀むや否や。頻りに小玉と呼ぶ、元無事只要す檀郎が聲を認得することを。刑契はず、悟聞き得て省あり、師手を握つて巡察して云く、「我が侍者參得禪了るなり、瓦鼓の歌を擧げて無爲の泰を接す、玄武に輸す處に至つて泰、省あり。」と。

贊に曰く、「般若の鋒、智慧の炬。

左縣の蒲許村に生緣、講を成都の大慈寺に聽く。

自知の理を問うて、義虎の咽喉を塞斷す、直指の心を究め、瞎驢の行伍に輓入す。

蟻蟲の齧食に入るが如し、熟處に到つて果して忘れ難し、俊鶻の鷄兒を打するに似たり、纔かに地に泊んで便ち飛び去る。

白雲に到りて南泉摩尼珠を撼碎し、圓鑿に見えて、如來密語有ることを會得す。

山前の田地を愛す、松竹清風を引く、格外の郷談を打す、<sup>①</sup>陽平に白雨を撒す。

烏鹽角聲梅引を傳ふ、暗に愁腸を損す、鷄冠花の紫絲頭を染じ、錯つて礬子となす。

乞兒席を得たり、巡察侍者の禪を會するに誇る、皎玉瑕なし、磨院婦人と同じく歌舞す。

錢酸礬百味完全、活衲僧の吞吐するに一任す。到頭誰か解せん甜苦を知ることを。」

圓悟勤禪師

師諱は克勤、東山に嗣ぐ、彭州駱氏の子、初め講を成都に聽く。范蜀公、詩を作つて勸めて行脚せしむ、云あり、「成都は本是れ繁華の國、打住只花酒に因つて惑ふ」と。遂に蜀を出で、東山に依參す、

① 西遊記二十三回、「ひらちのうちはれた」好き土地を平陽之地と云ふ。同四十四回に、怪猛獸等なき無事な處を清平之地と云ふ。今陽平といふは快晴の天氣を云ふならん、物初録大慈語謝首座章に、「青天撒白雨」とは夕立のことなり。  
② 虛堂牧童頌に、「榕桐又入深々塢」と龍溪抄七、十七、希叟錄、「黃牛角上烏鹽角聲」と、吹作三村田樂、橘州詩、「一盤牛背烏鹽角」とあり解者石蓮子曰、以三相木皮卷爲角也。



入處なし、佛鑑と共に辭し去る。山曰く、「汝浙中に到つて熱病に打せられて、方に我を憶ふことあらん。」と、師金山に至りて大に病み、鑑は定慧に在りて亦病む。書を作つて相約す、病愈えなば復東山に歸らんと、前後旨を悟る。師一日勤遠と同じく東山に侍して、夜坐歸らんと欲するに月黒し、山各をして一轉語を下さしむ。勸曰く、「彩鳳丹霄に舞ふ。」遠曰く、「鐵蛇古路に横ふ。」師曰く、「脚下を看よ。」山曰く、「吾宗を滅する者は克勤のみ。」と、師後歸つて昭覺に住す。南堂の還俗すと聞いて、師之を憶ひ、人の城中に在りて香を賣ると言ふを聞いて、師童子をして彼に到つて香を買はしむ。他の將に香を度さんとするを待つて、便ち問ふ、「如何か是れ祖師西來意と。看よ他何の言句かある、即ち記して歸れ。」童教に依つて彼に到つて便ち問ふ、堂香を舉して云く、「者の一包の香、只五文に賣る。」童回つて師に舉似す、師云く、「者の漢 只在り、と遂に親しく勸めて再び僧と爲らしめ。師舉げて大隋に住せしむ、繼いで昭覺に住す。大慧參する次、師一日上堂、雲門諸佛出身の處、東山水上行の話を舉して、拈じて云く、「我は即ち然らず。忽ち人あり、如何か是れ諸佛出身の處と問はゞ、即ち他に向つて道はん、薰風南より來り、殿閣微涼を生ず。」と、慧省あり。後首座と作つて兼拂、次の日一村僧上問す、「昨夜首座提唱如何ん。」師指を以て鼻を夾む、一下し來つて鼓す、衆大に笑ふ。慧即ち方丈に上つて辭し去る。師云く、「首座昨夜三世の諸佛、汝に罵らる、六代の祖師、汝に罵らる、我只輕く鼻を夾む、爾便ち去ること得ざり。」

① 只是只管也、武庫作猶。  
② 指を以て云々は手ばなかなむなり。

れ。「慧覺えず汗下る。師夾山に在り、雪竇の語を拈じて、碧巖集と號す。三國誌に曰く、「子を生まば當に孫仲謀が如くなるべし、景升の諸郎は豚犬のみ。」と金鴨は師乃ち小玉の聲に於て發明する頌なり、石蟬は乃ち師示寂の時錦江に葬る。

贊に曰く、「牛を食ふ氣宇、翹鶴の精神。」

范蜀公勸めて濯錦繁華の國を離れしむ、老東山詛ひて江南熱病の人と作す。

小玉聲の中、驢鞍橋を認めて阿爺の下領と做す、

薰風句裏、鼠黏兒を捉へて自己の家親に當つ。

童子を教へて香を買はしむ、靜南堂の珠を挽いて合浦に還す、青林の搬土を舉げて、遠佛眼の劍を放ちて龍津に躍らしむ。

碧巖を提唱して、拖泥帶水、昭覺を作興して、玉を憂り金を鏗す。脚下

を看よ、已に滅宗の記を受く、鼻頭を夾む、寧ろ舐憤の心なからん。

金鴨香消す、醉ひて扶けて笙歌叢裏に歸る、石蟬花發く、笑つて錦繡の

江濱に經行することぞ。

天斯の文に祐す、仲謀を臨濟十一世に生む、縱ひ景升諸郎龍の如く馳せ、虎の如く驟るも、芳塵を尾難し。

③ 栗鼠なり、佛光の栗鼠贊に曰く、「鼠粘真可怪、處却待資盤。」と、牛蒡種を鼠粘子と云ふ。  
④ 難尾。尾の字つぐと讀むは、其尾にとりつく義なり。さきの舟のともへ、あとの舟の頭をつないでだん／＼につま、合尾船と云ふ、本邦にては引き船と云ふ。



師諱は元靜、五祖に嗣ぐ、閩州の人、姓は趙氏、師、祖塔に在りしとき、祖、即心即佛、睦州の擔板漢、南泉の斬猫、趙州の狗子の話を擧して之を編辟す。所對了に滯礙なし。又子胡の狗話を擧ぐ、答稍遲し。山遠に面を轉じて曰く、「不是。師曰く、「不是、卻つて如何ん。山曰く、「此の不是、前面に和して都て不是。師曰く、「望むらくは和尚、慈悲指示し給へ。山曰く、「看よ、他の道ふことを、子胡一隻の狗上、人の頭を取り、下人の脚を取る、門に入る者は好く看よ、纔かに僧の入るを見ては、便ち云く、「狗を看よ」と、汝子胡狗を看よと道ふ處に向つて、一轉語を下し得て、子胡をして舌を結しめ、老僧の口を鉗せしめば便ち是れ了當の處なり。」と。師鶏を喫することを嗜む、衆之を惡む。山知つて、一日入室の時、師鶏を袖中に藏す。山話を擧げて之を詰る。師袖より鶏を出して啼く聲を作す、山乃ち笑ふ。師大隋に住す、舊龍有りて方丈の寢室に居れり。累代敢て近かず、師至つて臥さんと欲す、主首白す、師顧みず、竟に去つて臥す。龍の床上に臥すを見て、師手を以て推して曰く、「老畜生、老僧を半榻に留めよ」と云ふて就いて臥す。醒むるに及んで龍見えす、此より來らず。葉縣に一法嗣あり、漢州の方水に住す。偈を作つて衆に示して曰く、「方水潭中の鱉鼻蛇、心を擬して相向へば便ち揄揶す。誰人か蛇頭を拔得て出さん。二百年人の下語するなし。師三句を擧し了つて著語して云く、「方水潭中の鱉鼻蛇。」僧問ふ、「如何か是れ奪人不奪境。」曰く、「魔王を活捉して鼻孔穿つ。」「如何か是れ人境俱不奪。」曰く、「白日に牛に騎つて市を穿つて過ぐ。」愚丘の靜、參する次、師、香嚴枯木龍吟の話を擧して往返徵詰す。靜悟る、師曰く、「寒巖異草の青を守る莫れ、白雲を坐卻するも宗妙ならず。」靜曰く、「直に須らく劍を揮ふべし、若し劍を揮はずんば漁父巢に栖む。」師巽然として曰く、「者の小厮兒、珍重と云ふて便ち行く。回石頭世石匠となりて字を識らず、出家を慕ふ人に求めて、口づから法華を授かり、默して之を誦す、師に投じて洒掃に供す。一日石を取らしむ、回手に鎚を執りて石を撃つて、而も經を誦すること輟まず。師謂つて曰く、「今日も硃磧、明日も硃磧、生死到來作麼か折合せん。」回愕然として其の器を釋て、禮拜して究竟の法を求む。因つて隨ひて方丈に至る。誦經を罷めしめて趙州勘破の話を看せしむ。回之を久しうして石を鑿つ、石堅し力を盡して一鎚す、瞥ちに火光を見る。悟あり、頌を呈して曰く、「工夫を用ひ盡す、渾て巴鼻なし、火光迸散、元者裏に在り。師曰く、「子徹せり。復頌を呈して曰く、「三軍動かす旗閃爍、老婆正に是れ。魔王脚、趙州無柄の鐵掃帚、煙塵を掃盡して風颯々たり。師之を領す。遂に僧と爲り、後出世して師に嗣ぐ。縉雲先生、石頭語録の序を作つて云へるあり、「五祖晩に南堂を得たり、糙暴生獐、勤遠を凌跨す、天道さ地窄し、老を大隋に投す。回石頭鎚を運し石攻むるの手を以て、仰いで堅高を撃ち、力を

國譯希叟和尚五家正宗贊

①硃磧。唐音「こんけ」共に石の聲也。  
 ②魔王脚。脚は脚色なり、やうす模様の氣味なり、官人のそれん、位のいでたちを脚色と云ふ、又汾陽昭贊に、「鬼脚跡胡僧に觀破せらる。」と。  
 ③乖崖。字典崖字注に曰く、「不和物、崖岸」と云ふ、宋張詠性剛介、自から乖崖と云ふ。言は乖也、則ち衆に違ひ、異は物に和せざる也。



出すこと既に巖たり。一鎚に便ち透る。」と、晩に釣魚山中に坐して、乖崖峭壁、其の師に十倍す。狼毒砒霜、口を下すことを容さず。師、超放不群、故に東山、南堂を創めて以て之に居しむ。此に因つて名を得たり。

贊に曰く、「出格、野盤僧、天生沒意智。

魔王を活捉して鼻孔穿つ、故に百丈の叢林を以て廢す。

目を反して母を睨む、陰風猛虎の林を出づるが如し、村氣人に逼る、白日黄牛に騎つて市に入る。

方水の蛇頭を抜くとも出さず、力を用ひ盡す計の施すべき無し、子胡の狗語を出すこと較遅し、

前面に和して一齊に不是。

栴檀牛糞を雜ふ、者の包香只五文に賣る、峭壁乖崖と與に、看よ厮兒の略ぼ小伎を呈することを。

鶏を煮て唾ふ、満口腥臊、龍に伴ふて眠る、通身泥水。

一鈞冷かに松梢の月を掛け、樺林峯幾許の襟懷をか暢ぶ、數陣の香飄へる花信の風、牡丹屏に宴す

甚生標致ぞ。

横に寶劍を揮ふ、靜愚丘電影空に翻る、鐵鎚を颯下す、回石頭金聲地に擲つ。

聖凡情盡く佛眼を覓むるに蹤なし、怪しむこと得ず、蒲許の鄧師翁、別に一寮を起て、安置するこ

佛鑑勸禪師

師諱は慧勸、五祖に嗣ぐ、舒州汪氏の子、初め五祖に參す。毎に唯此の一事實餘二即非真を以てし、之を味ひて省あり、祖の印可せざるを以て辭し去る。後再び歸つて祖の上堂に値ふ、一僧出でて問ふ、

「僧、趙州に問ふ、如何か是れ和尚の家風。」州曰く、「老僧耳聾す、何ぞ高聲に問はざる。」僧再び問ふ。州曰く、「爾我に家風を問ふ、我卻つて爾が家風を識り了れり」と。師乃ち大悟、即ち方丈に上り印

可を求む。祖曰く、「森羅及び萬象、一法の印する所。」師禮拜す。祖翰墨を掌らしむ。師、圓悟と語る次、仰山鎮海明珠の因縁を擧して、理の伸ぶる處なしと云ふに至つて、悟徴して曰く、「既に收得と

云ふ、此の珠を索むるに洎んで、又言の對ふべきなく、理の伸ぶべきなし」と道ふ。師答ふる能はず。次の日、忽ち省す。悟に謂つて曰く、「東寺只一顆を索むれば、仰山一栲

栳を傾け出す。」悟深く之を肯ふ。初め太平に住し、次に鐘山に住す。上堂、

「至道無難唯嫌揀擇、桃花は紅李花は白、誰か道ふ融々只一色、燕子は語り黃鸝は鳴く、誰か道ふ關々只一聲と。祖師の關棧子を透らざれば、錯つて山河を認めて眼睛と作す」と。僧問ふ、「聞く和尚親しく五祖

に見ゆと、是なりや否や。」師云く、「鐵牛齧碎す黄金の草」と。祖忌上堂去年今日の時、紅爐片雪飛ぶ今

日去年の時、曹娥夜碑を讀む、最後の一句子、佛眼も能く窺ふことなし。白蓮峯頂の上、紅日須彌を透る、鳥は啄む珊瑚樹、鯨は呑む麗水の犀、太平基業在り、千古楊岐に襲ぐ。達磨梁王に見ゆる因縁を頌し

栲栳。柳行李なり、玉簪栲栳は器也、柳を以て之を爲る。



て曰く、「始め阿闍一聲の鐘を鳴らす、日午蒼龍睡正に濃なり。再び鳳凰臺上の鼓を撃つ。夜半祥鸞未だ飛舞せず。帝基鞏固盤石の如し。胡僧狂げて平生の力を費す。首を回して少林歸去來、落花滿地春狼藉たり。」定上座、臨濟に參する因縁を頌して曰く、「掣電の機趙州に遇ふ、人の爲めにせば須らく結交頭に到るべし、掌中撃げ出す香山子、直に高々の十二樓に上る。」と。

贊に曰く、「淮甸雲深く、龍眠山小なり。

麟鳳の子殻を脱して出で來る、山川の秀情を盡して奪ひ了る。

胸中の戈甲萬騎に森たり、氣秋風よりも肅し、舌底の笙篁五音を調ぶ、語春鳥の如し。

蘇臺九旬の藥を煮る、東山を恨殺す、阿闍一聲の鐘を鳴らす、迷ふて達磨に逢ふ。

森羅影裏、潑家風幾くか曾て識得し來る、聲色堆頭、祖師の關何ぞ嘗て透得過せん。

單に末後の句を明す、海鯨麗水の犀を呑む、親しく先師に見え來る、鐵牛黄金の草を齧む。

人の爲めに直らく切なるべし、香山子趙州の幾層樓を撃げ上ぐるを看る、義を見て爲すに勇む、鎮海の珠仰山に代つて一栲栳を傾け出す。

室中機峻にして人溲り難し、雲臺の將盡く生擒せらる、筆底耕すこと深くして我自ら豊かなり、翰苑の人専ら藻に擒ぶるに工なり。」

碧油幢下、坐がら太平の基を建つ、鍾山に到つて梁の寶公と手を握つて呵々大笑す。」

佛眼遠禪師

師諱は清遠、五祖に嗣ぐ、邛州李氏の子、幼にして書生となる。祖の會下に在りて常に氣を以て自負す。祖に問ふ毎に、祖輒ち曰く、「我會せず、我爾に如かず。」又曰く、「爾自ら會得せば好し」と。久しうして所入なし。乃ち問うて曰く、「和尚門牆高峻、某甲入ること能はず、座下に誰か親近すべき、乞ふ指示したまへ。」祖曰く、「元禮首座、見處我と一般なり。」師即ち之を扣く、時寒し禮方に火に近く、師所求を陳す。禮即ち師の耳を引いて行々且つ語つて曰く、「我會せず、我爾に如かず、爾自ら會得せば好し。」師曰く、「願はくは開發を求めて、而して乃ち相戯る、豈に人の爲めにする法なるべけんや。」禮曰く、「爾若し悟り去らば、方に今日の曲折を知らん。」師漸ちて急に知客寮に歸りて夜坐沈吟の間、寒を覺して火を撥つて大悟し、頓に二老の用處を見る。乃ち曰く、「深々を撥へば些子あり、生平の事只此くの如し、」と、遂に燈を點じて傳燈を讀む、破窳墮の因縁に至つて洞かに所證に符ふ。頌に曰く、「切々幽鳥啼く、衣を披いて終夜坐す、火を撥して平生を悟り神を窮めて破墮に歸す、事皎かにして人自ら迷ふ、曲談誰か能く和せん、之を念ひ永く忘れず、門開いて人の遇ぐることに少なり。」と。圓悟、師の誓を悟るを聞いて五更に門を扣く、師遂に所得を擧ぐ。悟云く、「只青林搬土の話に鐵輪の天子寰中の勅と道ふ如き、知客作麼生か會せん。」師曰く、「帝釋宮中に赦書を放す。」悟曰く、「且喜すらくは兄に活人の句あり。」後雪堂頌して曰く、「我れ會せず爾に如かず、笑ふに堪へたり千花。確背を生



善財護に百城に向ふて遊ぶ、何ぞ曾て自家底を踏著せん。佛鑑、文殊普賢佛見法見を起す因縁を頌して曰く、「彩雲影裏仙人現す、手に紅羅扇を把りて面を遮る、急に須らく眼を著けて仙人を見るべし、仙人手中の扇を看ることなかれ。師聞いて甚だ喜ぶ。悟曰く、「此の頌一切處用ひ得ん。」龍門に住する時、一僧蛇に咬る。室中に擧して云く、「既に是れ龍門の僧、甚に因つてか蛇に咬まる。」衆、下語皆契はず、高庵悟云く、「果然として大人の相を現す。」師之を頌す。圓悟、昭覺に在りて聞き得て、乃ち歎じて曰く、「龍門に此の子あり、東山の道未だ寂寥ならざるなり。」と。師、三自省有りて世に傳はる。

贊に曰く、「黙して而も神に、語つて而も當る。

天生骨に靈あり、聖養胎に恙なし。

業東魯を窮め、忝く曾て孔夫子に就いて經を受く、旨西來を覓む、苦だ嘗て老東山に無狀せらる。

會不會急に歸つて打坐、火を撥つて浮漚を覓む、到來到普請して茶を喫す、晴甌雪浪を翻へす。

仙人手裏の紅羅扇、佛鑑の看んと要する底は眼を著けて宜しく親しむべきを喜ぶ、帝釋宮中に赦書を宣ぶ、青林必死の人を勅して情を盡して疎放ならしむ。

龍門萬仞、晴空燒尾の雷を轟かす、邛水千尋、截流香を噴くの象を産す。

確に花を生ず、雪堂の善財を引いて遊ぶことを許す、蛇僧を咬む、高庵の大人の相を現することを聽す。

心と説き性と説く、用ひず他を管することを。三自省一篇を寫して萬古叢林參禪底の榜樣となす。」

大慧杲禪師

師諱は宗果、圓悟に嗣ぐ。宣州奚氏の子、初め湛堂に參じて侍者と爲る。堂、病革かなり、師曰く、「和尚此の疾若し起たすんば、某甲去つて誰にか依附せん。」堂曰く、「勤巴子甚だ好し、我渠を識らずと雖も、子若し之に見ば必ず能く大事を了せん。」後往いて悟に見えて旨を得たり。師、堂の爲めに無盡に見えて塔の銘を求む、龍安の照の書を紹介と爲す。盡に見えて云ふことあり、「金剛の眼睛、相公の筆頭上に在り。」盡曰く、「恁麼ならば則ち某他のために光明を點出して、天を照し地を照さしめ去らん」と、師進前して揖して曰く、「先師多幸、相公の塔の銘を謝す。」盡大いに笑ふ。師、徑山に在り、因に頌して曰く、「神臂弓一發すれば、千重の甲を透過す。衲僧門下より看れば、甚の臭皮襪に當らん。」と、時に朝廷方に神臂弓を作る、秦相、師の張九成と竊かに大師に議し、兼ねて以て朝廷を譏諷すと云ふを以て、遂に衡州に竄せらる。次に梅州前後十七年にして放されて還る。再び徑山に住す、梅州より返つて福州に至る。張參政、洋嶼を以て之を延ぶ。一夏に十三人を打發す、龜山の光を首と爲す。趙巨濟參する次、謂つて曰く、「老僧去る後、若し別人有りて爾に禪を教へて云はん、者箇の公

●確覺。五雜俎に、「宋之令文提確覺一書四十字、可謂震世神力」と、又訓蒙字會に曰く、梓浴稱確覺、確杵程確杖」と。共に明王相晉升世事通考といふ書に見ゆ。



案如何が參せよ、那箇の因縁如何か會せよと、便ち熱尿を呑んで潑ぎ將ち去れ、記取せよ。師、應座金輪の提唱を聞いて甚だ喜ぶ。乃ち曰く、「楊岐の正脈、此の老に在り」と。遂に正傳衣并に頰を將て之に寄せて曰く、「坐斷す金輪の第一峯、千妖百怪、盡く蹤を潛む、年來又眞の消息を得たり、報じて道ふ楊岐の正脈通すと。」

贊に曰く、「花木瓜、包家の虎。

狐狸跡を屏け陰木風を生ず、雪霜憑凌、春陽煦嫗す。

金剛の眼睛筆頭點出す、龍安に因つて無盡翁を靠倒す、董風殿閣句下に

活埋す、湛堂の指して勤巴子に見せしむるを恨む。

烏石嶺を掀翻す、黒竹篋亂指胡揮、五峯の雲を撥亂す、折拄杖、東に

撐へ西に拄ふ。

雲門の掲示、閻闍を誑諱す、悅老重ねて來り、佛祖を欺瞞す。

① 猛將の相殺を會するが如し、賊馬を奪ふて騎つて便ち行く、別人有りて偏に禪を教へば、熱尿

を呑み潑ぎ將ち去れ

衡梅も貶竄せらるること十七載、臭皮襪香梵天に透る、冤を洋喚に伸ぶ十三人、塗毒鼓聲寰宇に喧

佛法を將て人情に當てず、楊岐正傳の衣を把りて金輪華姪の處に分付す。法王の法令此くの如くなるべし。」

虎丘隆禪師

師諱は紹隆、園悟に嗣ぐ、和州の人なり、初め長蘆の信に見えて其の大略を得、園悟の語を傳へて至る者あり、師之を聞して嘆じて曰く、「酸を想ふて液を生ず、未だ腸に澆ぎ胃に沃がすと雖も、且く人に快を發せしむ。第だ恨む未だ聲咳を聆かざるのみ」と。遂に去つて悟に見ゆ。一日入室問うて曰く、「見見の時、見是れ見に非ず、見猶ほ見を離る、見も及ぶこと能はず。」拳を擧げて云く、「還つて見るや。」曰く、「見る。」曰く、「頭上に頭を安す。」師脱然として契悟す。叱して曰く、「箇の什麼をか見る。」曰く、「竹密にして妨げず、流水の過ぐることを。」悟之を肯ふ。後藏主と爲る。人曰く、「隆藏主柔易なる此くの如し、何ぞ能く爲さん。」悟曰く、「睡虎なり。」上堂曰く、「凡そ展托あれば盡く今時に落つ、展せず托せず坑に墮し塹に落つ。直饒ひ風吹けども入らず、雨打ても着けざるも、點檢し將ち來れば自救不了なり。豈道ふことを見ずや、直に寒潭の月影静夜の鐘聲に似て、扣擊に隨つて虧けることな

く、波瀾に觸れて散せざるも、猶ほ是れ生死岸頭の事。」拄杖を拈じて畫一畫して云く、「生法師多年の葛藤を畫斷すれば、點頭石覺えず掌を撫して大笑す、且く道へ箇の什麼をか笑ふ、腦後に腮を見れば與に往來することなかれ。」と。上堂曰く、「目前に法なし、萬象森然、意目前に在り、突出辨じ難し、是れ



目前の法にあらず、觸處渠に逢ふ、耳目の到る所にあらず、見聞覺知を離れず、然れども是くの如し  
 と雖も、また須らく向上の關候子を踏著して始めて得べし。所以に道ふ、羅籠すれども肯て住せず、  
 呼喚すれども頭を回さず、佛祖も安排せず、今に至るまで處所なし、是くの如くなれば則ち念を斂む  
 るを勞せず、樓閣門開く、寸歩し百城俱に到る。」と、幕に拄杖を拈じて畫して云く、「路に死蛇に逢はゞ  
 打殺することなかれ、無底の籃子に盛り將て歸れ。」と。僧問ふ、「如何か是  
 れ大道の眞源。」曰く、「和泥合水。」曰く、「恁麼に去る時如何ん。」曰く、「草鞋  
 跟を截斷す、云ふことあり、渴驥の泉に奔るが如く、應機、怒猊の石を扶  
 するに似たり。云ふことあり、醜鷄甕中に處す、自ら其の樂みを得。」と。  
 費長房毎に一先生の壺を肆上に懸くるを見る。長房之に謁して遂に同じく  
 壺中に入れば、乃ち眞の神仙の境なり。  
 贊に曰く、「襟懷 秋冷かに、笑語春温かなり。  
 垂棘の壁積に癡して價を待つ、盤に走る珠影落ちて痕なし。  
 少室密傳の心を慕ふ、渴驥驟々岩下の水に奔る、碧巖無義の語を味ふ、醜鷄自ら甕中の天を樂む。  
 路長うして踏斷す草鞋跟、源 大道を尋ぬ、竹密にして流水の過ぐることを妨げず、見龜拳を豎  
 つ、魚欄菓を拈起す、點頭石葛藤の畫斷することを笑ふ、一大藏を演出す、瞋睡虎貫索に縈纏せ

① 安排。安置排列なり、安は置  
 くべき處に物を置くなり、排  
 はならざるなり。「安ニ排筵  
 席ニは座敷をとりつくらふな  
 り。「計較安排」は工面しつも  
 るなり。「明窓下安排」は安置  
 さすなり。大惠武庫十七に、  
 「栗毛伽梨撩亂搭誰能勢力、  
 と、あり強排安はつくらふ也、  
 今は佛祖も自由にいらふこと  
 ならんの意なり。

らる。

深地の劍氣冷かにして霜を含む、痴頑を斬つて横に石上に磨す、古洞の桃花紅錦を簇らす、嬌兒  
 と與に別を風前に語る。

路に死蛇に逢ふ、無底の籃盛つて歸る何の用ぞ、春は百鳥に喧かに、曲闌干徒倚して言なし。

東山の龍鳳、臨濟の兒孫。

玉壺塵染ます別にはれ一乾坤。」

應庵華禪師

師諱は曇華、虎丘に嗣ぐ、蘄州江氏の子、初め方遇首座に參ず、入室、師近前す、座云く、「來つて  
 什麼をか作す。」師云く、「首座の首を取らん。」座云く、「後生年少、者般の語話を作す、嘔血し去ること  
 あらん。」師云く、「某甲は嘔血せず、首座嘔血し去ることあらん。」座後に果して師の言の如し。師水南  
 の途の處に在りて侍者と作る。入室の次、南、捉住して云く、「侍者、汝と與に箇の公案を商量せんこ  
 とを待つ。」師曰く、「盡大地是れ箇の公案、箇の什麼をか商量せん。」南機鈍なり、師、拂袖して去る。  
 後、虎丘に見えて維那と作る、命じて首座に充てんと欲す。時に座下多悟の會中なりき。耆宿あり、  
 師の後生を言ふ、師聞いて偈を作つて曰く、「江上の青山殊に未だ老いず、屋頭の春色放教あれ遅きこ  
 と、人は言ふ洞裏桃花嫩しと、未だ必ずしも人間此の枝有らず」と。遂に去る、後衆に示して云く、「三



十三州、七十の僧、驢馬領、人の憎みを得たり、諸方若し羅籠の手を具せば、今日淨明に到るに由無けん。」と。上堂、「五百の力士、揭石の義、萬仞崖前手を撒して行く。十方世界一團の鐵虛空、背上白毛生ず。直饒ひ膩脂帽子を拈却し、<sup>①</sup>塌臭布衫を脱却するも、報恩の門下に向つて正に好し棒を喫するに。何が故ぞ半夜起き來つて膝を屈して坐す、毛頭星現す衲僧の前。」と。上堂、「若し一句の商量を作さば、喫粥喫飯阿誰か會せざらん。一句の商量を作さずんば屎坑裏の蟲子も閻梨を笑殺せん。」驢に拄杖を拈じて云く、「拄杖子罪犯彌天、二鐵圍山に貶向す、且く道へ薦福還つて過ありやまた無しや。」卓一下して云く、「遅一刻。」と。僧問ふ、「昔僧あり、雲門に問ふ、「如何か是れ清淨法身、」門云く、「花藥欄。」此の意如何。」曰く、「深沙努眼睛。」僧問ふ、「只者の是れ自己を埋没す、只者の不是、先聖に辜負す。此の二途を去つて和泥合水の處、請ふ師道へ。」曰く、「玉筋虎口を撐ふ。」僧問ふ、「橈を呈し棹を舞すことは即ち問はず、且く道へ、婆娑手中の兒子、甚の處より得來る。巖頭船舷を扣つこと三下、未審し、意旨如何。」曰く、「焦磚打著す連底の凍。」曰く、「當時若し和尚に問はば、如何か他に對せん。」曰く、「一棒に打殺せん。」曰く、「者の老和尚、大いに帽を買ふに頭を相し去るに似たり。」曰く、「爾甚の處に向つてか巖頭を見ん。」曰く、「箇。」曰く、「杜撰の禪和。」曰く、「婆、七子を生む、六箇は知音に遇はず、只者の一箇もまた消得せずと云ふて便ち水中に抛向す、又且つ如何。」曰く、「<sup>②</sup>少

① 塌は玉篇。胡骨切、膝病也、又骨差ひ也、今の義に非ず、音鶴と同じ、鶻臭は「わきが」臭きなり、鶻の匂ひ腋臭の如し、又孤臭鶻臭。  
② 少實弄。ひけらかすと譯す、

賣弄。」曰く、「巖頭覺えず舌を吐く、意作麼生。」曰く、「樂しきときは則ち權を同じうす。」僧、坐具を提起して云く、「但者箇を識取せよ。」曰く、「放下著。」南書記、師の會中に在り、狗子の話を頌して曰く、「狗子無佛性、羅睺星、命に入る、是れ人を打殺するにあらずんば、人に打殺定せられん。」師之を肯ふ。虎丘忌に香を拈じて云く、「平生沒興、者の無意智老和尚に撞著す、伎倆を做し盡すとも湊泊し得ず、此より干戈を卸却して、分に随つて著衣喫飯二十年來、曲象木に坐して、羊頭を懸けて狗肉を賣る。知んぬ他甚の憑據かある。然りと雖も一年一度焼香の日、千古人をして恨轉た深からしむ。」  
贊に曰く、「斬陽の人、鬼も見ることを怕る。

虛空の背白毛を生出す、古墓の中に深く暗箭を藏す。  
頭を研取し去る、首座と熱血相噴く、袖を拂つて便ち行く、水南の機思遲鈍なることを笑ふ。  
孩兒を漢陽渡に抛つ、樂むときは則ち同じく歡ぶ。拄杖を鐵圍山に貶す、過應に免れ難かるべし。  
折玉筋を拈す、彊ひて巖前の虎口を把つて撐ふ、落韻の詩を題す、謾に云ふ洞裏桃花嫩しと。  
夜叉の心菩薩の面、南書記の劍刃上に行くことを説ぶ、正法眼破沙盆、傑侍者を引いて草窠裏に輓す。  
七十の僧驢馬領、諸方の手を羅籠に具せざることを薄んず、二十載狗肉羊頭、先師を憶ふて便ち



眼を呑んで恨を發す。

楊岐の正脈を通ず、金輪峯影千江に落つ、宏智の芳塵を繼ぐ、狎鷗池の光八面に生ず。  
超宗異目誠に佛日の品題に負かず、後生源深くして流遠きことを致す。

卍庵顔禪師

①一渦風とは盜賊の人と云ふこと。

師諱は道顔、大慧に嗣ぐ、東州鮑氏の子、久しく圓悟に參じて金山に在り、一渦風の亂に因りて、僧をして自殺せしむ。智を以て死せず、虜去りて後、方に脱することを得。悟歸寂す、復た大慧に依り、衆に徑山に首たり。無著未だ僧と爲らざりしとき、慧方丈に館せしむ。師常に之を叱す、慧曰く、「彼れ婦人と雖も大いに長處あり。」師諾せず、慧抑へて相見せしむ。師已むことを獲ずして通報す。著曰く、「首座、佛法の相見を作すか、世法の相見か。」座云く、「佛法の相見。」著云く、「左右を卻去して請ふ、師入れ。」師帳前に至つて著の寸絲掛けず、仰いで床に臥すを見る。師指して曰く、「者裏是れ什麼の去處ぞ。」著曰く、「三世の諸佛、六代の祖師、天下の老和尚皆此の中より出づ。」師曰く、「還つて老僧が入ることを許さんや否や。」著曰く、「者裏驢を度し馬を度せず。」師、語なし。著曰く、「首座と相見了也。」遂に身を轉じて裏を觀せしむ、師憐憫して出づ。慧曰く、「卻つて是れ老畜生、見識なきにあらざるや。」師愧づることあり、慧入室、南泉住庵の時、山に上りて作務す。一僧至る、飯を做して喫せしむる因縁を擧して、師云く、「珊瑚枕上兩行の涙、半は是れ君を思ひ半は君を恨む。」侍者をして牌を收

めしめて曰く、「只者の一轉語、佛恩を報するに足れり。」初め東林に住し、後郷に歸りて雲頂に住す。僧問ふ、「如何か是れ佛。」曰く、「誌公和尚、如何か是れ法。」曰く、「黃絹幼婦外孫壘曰。」「如何か是れ僧。」曰く、「釣魚船上の謝三郎。」衆に示して曰へることあり、「筋籠撓匙を亂さず、老鼠飢算を咬まず。」韓子蒼、師と寇を避くる詩に云く、「昔二子と明心に居す、賊を避け夜走る南山の陰、大寒更に踏む沮洳の徑、月黒くして錯つて楊梅の林に至る、險を涉り危に登る四三里、少しき復た前行溪水を過ぐ、平明に火を乞ふ野人の家、十日深く藏る巖穴の裏、閩俱我が裝賣の空なることを嘆す、蜀僧轉た妖氛の中に墮す、人は言ふ性命針孔を脱すと、忱憂人を傷み衰疾同じ、春風酣々たり柳邊の寺、相對して夢中夢事を論す、嫌ふ莫れ薄飯一莖の壘、郡國而今鼓鞞なし。」

贊に曰く、「麟龍の頭角、弓冶の箕裘。」

項鐵三百片、逸群の倔強、額に數點の墨を跡す、出格の風流。

圓悟の室彩畫已に成る、只一回の點眼を缺く、浮玉山に機を見て作す、三搭頭を回すことを消せず。

錦繡帷前一へに斷魂、返つて婦人の毒手に遭ふ、珊瑚枕上兩行の涙、庵主の機籌を逃れ難し。  
語を出して稽ふることなし、老鼠の飢算を咬まざるに誇る、機に臨んで奔軼す、駿馬に騎つて直に烟樓を撞く。



虎溪の橋を踏斷す、遠法師の蓮社に活埋せらるゝことを斥ふ、行いて蠻瘴の路を窮む、果風子の遠く梅州に竄せらるゝに隨ふ。

侵氣を掃蕩す社稷一戎衣、凌烟の勳業、戈を佛日に揮ふ風塵三尺の劍、筋を借る機謀。

沮洳の徑楊梅の林、早く南山に寇を避くことを憶ふ、牛頭山雲頂寺、晩に西蜀を思ふて歸休す。

若更に老漢の僧となる端的を問はゞ、謝三郎未だ必ずしも漁舟に在らず。

懶庵需禪師

師諱は鼎需、大慧に嗣ぐ、福州林氏の子、本儒業を習ふ。因に寺に入りて遺教經を見て數版を看て省あり。出家せんと欲す、母親迎の近きを以て之を難る。師曰く、「天桃紅杏一時に春風に分付す、翠竹黃花此去つて永く伴侶と爲さん、親を辭し髮を祝る一錫湖湘に名宿を徧參す。心所緣なく身に所依なし。」庵を光峯の絶頂に結ぶ、後に大慧に見ゆ、一日問うて曰く、「内よりも放出せず、外よりも放入せず、正恁麼の時如何」師口を開かんと擬す、慧竹篋を拈じて劈脊に連打すること三下、師大悟。慧印するに偈を以てす、曰く、「頂門豎亞摩醯の眼、肘後斜に懸く奪命の符、眼を瞎却し符を卸卻す、趙州東堂に葫蘆を挂く。」上堂、「懶翁懶中の懶最も懶なるは説禪に懶なり、亦自己を重んぜず亦先賢を重んぜず。又誰か懶が地を管し又誰か懶が天を管せん。物外の逍遙箇の事なし、日高きこと三丈猶ほ更に眠る。」上堂句中の意、意中の句、須彌巨川に聳ゆる、句意を刻り意句を刻る、烈士狂矢を發す、

289605

任ひ侍すとも牙劍樹の如く、口血盆の如し。徒らに詞鋒を逞し、虚しく意氣を張る。所以に淨名口を杜づ早く繁詞に涉る。摩竭に關を掩ふ已に家醜を揚ぐ。自餘の瓦棺老漢巖頭大師、卷峯頂上に向つて風を撃ひ浪を鼓して神變を翫弄するも、脚跟下好し三十棒を與ふるに、且く道へ過什麼の處に在る。「良久して云く、「機關是れ韓光が作にあらずんば、胸襟を把りて等閑に當ること莫れ。」至節上堂、「二十五日已前群陰消伏龍戸を閉づ、二十五日已後一陽來復鐵樹花を開く、正當二十五日塵中醉客驢に騎り馬に騎りて、前街後街遞に相慶賀す。物外の閑人袈裟蒙頭爐を圍みて打坐す、風蕭々雨蕭々冷湫々、誰か懶が張先生李道士胡達磨を管せん。」木庵參する次で、師外道、佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はずの因縁を舉して云く、「良久の處に向つて會することを得ざれ」と云ふて後に隨つて喝す。庵作禮して曰く、「今日の事に因らずんば自前の機を争奈せん。」師之を印す、分庵主を送る偈に曰く、「江頭風急にして浪花飛び、南北相逢ふて眉を展べす、獨り分禪英俊の手あり、等閑に錦標を奪ひ得て歸る。」

贊に曰く、「鐵硯磨穿、心猶ほ奔競す。」

杜文章久爾として邪に隨ふ。遺教經慕然として正を打す。

春風一度桃杏の花、分付已に周し、紅日三竿煙雲の枕、撼搖すれども醒めず。

内放出せず、外放入せず、竹篋を洋嶼庵頭に喫し、身に所依なく心に所緣なし、茅庵を卷峯頂



上に結ぶ。

盲人地を摸る、頂門の眼摩醯を歡晴す、邪鬼身に貼く、肘後の符奪命するに難爲なり。

須彌川に聳え烈士矢を發す、意句を刻り浪りに其の名を得たり、泥龍戸を閉ぢ鐵樹花を開く、陰陽を算して從來定まらず。

錦標を奪ひ得て去る、分禪が蘭蕪花針を拾ふに従す、目前の機を喪盡せば、木庵を引いて良馬鞭影を窺はしむ。

蒙頭打坐偏界覓むるに蹤なし、全く胡達摩李道士張先生の人の管領する無きことを思はず。

密庵傑禪師

師諱は咸傑、應庵に嗣ぐ、福州鄭氏の子、母廬山の僧屋に入ると夢みて生る、髮を下して徧く諸方を扣く、後應庵に見ゆ、庵、室中に問ふ、「如何か是れ正法眼。」曰く、「破沙盆。庵之を肯ふ。未だ幾ならずして辭して親を省す。庵偈を以て送つて曰く、「大徹投機の句、當陽に頂門に廊かなり。相從ふ今四載徵詰洞かにして痕なし、未だ鉢袋を付せずと雖も氣宇、乾坤を呑む、正法眼を把りて喚んで破沙盆と作す、此の行將に省觀せんとす、切に忌む便ち踉蹌すること。吾に未後の著あり、歸つて汝導はんことを要するを待つ。」上堂、世尊不説の説、曲を拗して直と作す、迦葉不聞の聞、空を

破沙盆。「われすりばち」と譯す、無冤録、仍帶一沙盆植、以研三上件物、注、沙盆は研レ物の器、植は棒椎「すり、ぬぎ」也。

望んで啓告す。馬祖即心即佛、羊頭を懸けて狗肉を賣る。趙州、庵主を勸す、貴く買ふて賤く賣る分文も直らず。只文殊は是れ七佛の師の如く、甚に因つてか女子定を出すことを得ざる。天河月暈して魚子を生み、榭葉風微にして鹿茸を養ふ。上堂、婆燒庵の話を擧して拈じて云く、「者の公案叢林の中拈提する者あること少なり、傑上座、面門を裂破して敗缺一上を納ることを免れず、また諸方の點檢を要することを。乃ち大衆を召して云く、「者の婆子洞房深穩にして水泄げども通せず、枯木上に向つて花を糝けし、寒灰中に骸を發す。箇の僧孤身迥々洪波に入るに慣ふ。等閑に坐斷す潑天の潮、到底身に涓滴の水なし、子細に檢點し將ち來らば枷を敲き鎖を打つことは即ち無きにあらず。若し是れ佛法ならば夢にも見ざることあり。烏巨恁麼の提唱、畢竟の意何れの處にか在る。」良久して云く、「一把の柳絲收むること得ず、烟に和して搭在す玉闌干。」師松源破庵を接して烏巨に出世し、天童に終ふ。

贊に曰く、「枳林錦荔を生ず、榕樹旃檀を出す。

廬山の僧夢に何の面目を見る、蠱毒の水沾着すれば心肝を爛かす。向上的路干聖と共に行く、泥犁獄に入つて慚愧々々、破沙盆分文に準するに直らず、正法眼に換ふ大難々々。



女出定を拈じて楊州に髣髴たり、鹿茸を養ふ微風榭葉より生ず、婆燒庵を判す越國に依稀たり、柳絲を垂る烟に和して欄干に搭在す。

松源を喝して兩耳聳せしむ、錦に特石を包む、破庵を殺して全心死せしむ、鐵泥團を裏む。

冷泉百日の主人と做る、郭汾陽が中書の考に勝れり、屹たる鄞江の中流の砥柱、覺隴州の既倒の瀾に回す。

大徹投機頂門を廓かにす、初めより奇特なし、信に道ふことを知んぬ、江南兩浙秋熱し春寒し。

臨濟此に至りて十四世共に二十六人。

曹洞宗

洞山悟本禪師

師諱は良价、雲巖に嗣ぐ、越州諸暨の人、姓は俞氏。初め忠國師に謁して、無情說法を問うて契はず、後に瀉山に到る。山問ふ、「聞く、閩梨會て國師に無情說法を問ふとは是なりや否や。」師云く、「是。瀉山云く、「試みに擧せよ、看ん。」師擧し了る。瀉山云く、「我が者裏もまた些子あり、只是れ其の人に遇ふ罕なり。」師云く、「便ち請ふ。」瀉拂子を以て點一點す。師云く、「請ふ、和尚某甲が爲めに説け。」瀉曰く、「父母所生の口終に子が爲めに説かず。」師云く、「此の間に同年道を慕ふ者あることなしや。」瀉、雲巖に見えしむ。師辭して直に雲巖に造りて前話を請益す。巖云く、「見すや、彌陀經に云く、水鳥樹林悉く皆念佛念法」と。師因つて省あり。偈を作つて曰く、「也太奇也太奇、無情說法不思議、若し耳を將て聽かば終に會し難し、眼處に聲を聞いて方に知ることを得ん。」一日巖に問ふ、「某甲餘習あり、未だ盡さず。」巖云く、「汝會て甚麼をか作し來る。」曰く、「聖諦も亦爲さず。」曰く、「還つて歡喜地を得るやまた未だしや。」曰く、「歡喜は即ち無きにあらず、糞堆頭に一顆の明珠を拾ひ得るが如し。」師、巖を辭して問ふ、「百年の後忽ち人あり、還つて和尚の眞を遡得せば、如何が祇對せん。」巖良久して云く、



「只者れ是れ。師沈吟す。巖云く、「价閣梨、箇の事を承當す、大いに須らく審細なるべし。師猶は疑に渉る。後水を過ぎ影を觀るに因つて、方に頓悟を得て偈を作つて云く、「切に思む、他に從ふて覺むることを。迢々我と疎なり、我今獨り自ら往く、處々渠に逢ふことを得たり。渠今正に是れ我、我今是れ渠にあらす、應に須らく恁麼に會せば、方に如々に契ふことを得ん。乘に示して云く、「末法の時代は人乾慧多し、若し眞偽を辨驗せんと要せば、三種の滲漏あり。一には見滲漏、機位を離れざれば毒海に墮在す。二には情滲漏、智常に向背して見處偏枯す。三には語滲漏、體妙、宗を失ふて機終始に味し。曹山辭する次で、師山に先雲巖の付する所の寶鏡三昧五位の顯訣を授け畢りぬ。山再拜して去る。北院の通、參する次で、師上堂云く、「主人翁を坐斷して第二見に落ちず。通、衆を出でて云く、「須らく知るべし、一人あり、合伴せず。師云く、「猶ほ第二見。通、便ち禪床を掀倒す、師云く、「老兄作麼生。」通云く、「某甲が舌頭の爛れるを待つて即ち和尚に向つて道はん。」後師を辭して嶺に入る。師云く、「飛猿嶺峻なり、好く看よ。」通、沈吟す、師云く、「通閣梨は何ぞ嶺に入り去らざる。」通省あり、更に嶺に入らず。欽山、師に參す、師問ふ、「甚の處より來る。」曰く、「大慈より來る。」曰く、「大慈を見るや。」曰く、「見る。」曰く、「色前に見るか色後に見るか。」曰く、「前後の見に非ず。」師黙して後に山衆に對して過を省す。前話を舉げて乃ち曰く、「師を離るること太だ早うして師の意を盡さず。」師頷して曰く、「枯木花開く劫外の春、倒に玉象に騎つて麒麟を趁ふ、而今高く隠る千峯の外、月皎く風清し好日

辰。」

贊に曰く、「雲巖跳竈の兒、諸塵と對せず。」

蘆花に輓入して白馬を鞭つ、蹤由を覚め難し、倒に玉象に騎つて麒麟を趁ふ、單に向背を明す。水鳥樹林何ぞ曾て說法せん、徒に自ら奇と歎す、墻壁瓦礫汝が爲めに機を發す、灼然として會せず。

糞堆頭に明珠顆を拾ひ得たり、習氣未だ除かず、水影邊に先師の眞を逸得す、失錢遺罪、金針玉線、暗に錦縫の千重に通ず、石女木人、密かに寶鏡の三昧を付す。

何ぞ嶺に入り去らざる、通閣梨の肯へて道はずして舌を爛了して休するに聽す、還つて大慈を見るや、遼欽山の早く師を離れて心に悔ゆるに似たることを覺す。錮鏘に生鐵を著く、見情滲漏破綻轉た多し、安排心を用ひ盡す、偏正君臣憲章するに計ることなし。」

曹山元證禪師

千里書を持って家に到らず、金鳳の龍巢に宿して斜月夜明簾外に掛くことを看る。

師諱は耽章、洞山に嗣ぐ、泉州黃氏の子、初め洞山に謁して依止すること數載。乃ち山を辭す、山問ふ、「什麼の處にか去る。」曰く、「不變異の處に去る。」曰く、「不變異ならば豈去ることあらんや。」曰く、「去るも亦不變異。」遂に辭し去る。曹山に止まる、學徒雲の如く集る。僧問ふ、「佛未だ出世せざ



る時如何。「曹山は如何かす。」「出世して後如何。」曰く、「曹山に如何かす。」僧問ふ、「如何か是れ枯木裏の龍吟。」曰く、「血脈斷せず。」「如何か是れ獨體裏の眼睛。」曰く、「乾き盡くさす。」乃ち偈を作つて曰く、「枯木龍吟、眞の見道獨體識無くして、眼初めて明なり。喜識盡くる時消息盡く、當人那ぞ濁中の清を辨せん。」僧問ふ、「清税孤貧なり、乞ふ師拯濟せよ。」師税閣梨と召す。税應諾して曰く、「青原自家三盞の酒喫し了つて猶ほ道ふ、未だ唇を沾ほさずと。」僧問ふ、「璞を抱いて師に投ず、乞ふ師雕琢せよ。」曰く、「雕琢せず。」曰く、「什麼としてか雕琢せざる。」曰く、「須らく知るべし、曹山好手なることを。」僧問ふ、「如何か是れ和尚の眷屬。」曰く、「白髮連頭に戴く、頂上一枝の花。」師三種の墮あり、一には披毛戴角、二には不斷聲色、三には不受食。稠布衲あり。問ふ、「披毛戴角是れ什麼の墮ぞ。」「これ類墮。」「不斷聲色是れ什麼の墮ぞ。」「これ隨墮。」「不受色是れ什麼の墮ぞ。」「これ尊貴墮。」「寶鏡光寒く、獨體眼活す。」

武を接いで門牆を闢く、宗綱掌握に歸す。身を尊貴に墮す、彩鳳啣み來る玉樹の花、法を立すること森嚴なり、金鳥啄破す琉璃の殼。自家の酒唇沾すること未だ著す、幾か會て清税が孤貧を濟ふ、荆山の璞懷抱相投ず、輕しく者の僧の與めに雕琢せず。萬機俱に掃蕩す、佛も亦如何かす、一位鎮長に存す、人皆錯と道ふ。

五圓相を示す、潑家生惡情悰を拈出す、一枝の花を戴く、惡眷屬粧成つて誰か觀著す。

① かくはもの也。

曹山高隱、雲を摩す怪石露稜々、洞水逆流、浪を衝く錦鱗活鱗々。不變異の處、臂を掉つて獨行く、故鳥道通玄人の湊泊するなし。

雲居宏覺禪師

師諱は道膺、洞山に嗣ぐ、幽州玉田王氏の子、師洞山に謁す、山問ふ、「甚れの處より來る。」曰く、「翠微より來る。」曰く、「翠微何の言句有りてか徒に示す。」曰く、「翠微羅漢を供養す。某甲問ふ、「羅漢を供養す、還つて來るや否や。」曰く、「爾毎日箇の什麼を唾ふ」と。山曰く、「實に此の語ありや否や。」曰く、「有り。」曰く、「虚しく作家に參見し來らず。」一日山問ふ、「甚の處より來る。」曰く、「山を踏み來る。」曰く、「那箇の山か住するに堪へたる。」曰く、「那箇の山か住するに堪へざらん。」曰く、「恁麼ならば則ち國內の山盡く閣梨に占卻せらる。」曰く、「然らず。」曰く、「恁麼ならば則ち子箇の入路を得たり。」曰く、「路なし。」曰く、「若し路なくんば争でか老僧と相見ることを得たる。」曰く、「若し路あらば則ち和尚と隔てんなり。」山乃ち曰く、「子をば已後千人萬人も把不住ならん。」南泉、僧に問ふ、「什麼の經をか講生ず。」曰く、「彌勒下生經。」曰く、「彌勒幾時にか下生せん。」曰く、「見に天宮に在り、當來下生せん。」曰く、「天上に彌勒無く、地下に彌勒無し。」師舉して山に問ふ、「未審し誰と與に名を安する。」山問はれて



禪床震動す。乃ち曰く、「膺閣梨と吾雲巖に在つて、曾て老人に問ふ、直に火爐震動することを得たり、今子に一間せられて直に得たり、通身汗下ることを。」師三峯に庵す、旬を経て堂に赴かず。山問ふ、「子近日何ぞ堂に赴かざる。」曰く、「毎日自ら天神の食を送るあり。」曰く、「將に謂へり、汝は是れ箇の人と猶ほ者箇の見解を作すか、汝晩間に來れ。」師晚に至る、山、「膺閣梨」と召す。師應諾す、曰く、「不思議不思議是れ什麼ぞ。」師庵に回つて冥坐す、天神來らず、後歐阜に登つて樹に就いて屋を縛して居す、雲居と號す。衆に示して曰く、「人の三貫錢を將て箇の獵犬を買ふが如し、只蹤跡ある底を尋ね得ることを解す。忽ち羚羊の角を掛くるに遇ふて蹤跡と道ふこと莫れ、氣息も亦無し。」僧便ち問ふ、「羚羊未だ角を掛けざる時如何。」「六六三十六。」「掛くる後如何。」「六六三十六。」僧禮を作す。師云く、「會すや。」云く、「不會。」云く、「豈道ふことを見ずや、蹤跡を絶すと。」衆に示して云く、「得る者は輕微ならず、明むる者は賤用せず。識る者は咨嗟せず、解する者は厭惡なし。天より降下するときは則ち貧窮、地より湧出するときは則ち富貴。門裏身を出すことは易く、身裏門を出すことは難し、動けば則ち身を埋むこと千丈、動かざれば則ち當處に苗を生ず。一言迥に脱すれば當時に獨拔す、言語多きことを要せず、多ければ則ち用處なし。」衆に示して云へる有り、「體得底の人は心臘月の扇の如し、口邊直に醜出することを得たり、是れ強ひて爲すにあらず、任運に此くの如し。」又云く、「見ずや古人の道はく、學處立ならずんば盡く是れ流俗閭閻の中の物、捨つること得ず、俱に滲漏とす、一切の事

を併せ盡せば、始めて過なきを得、人の頭々の上に明め、物々の上に通するが如し、只喚んで了事の人と作す、終に喚んで尊貴と作さず、將に知る、尊貴の一路自ら別あることを。道ふことを見ずや、門より入る者は實に非ず、捧げ上ぐれども龍と成らず、知るや。」僧問ふ、「人ありて錦を衣て入り來る、師に見えて後甚として寸絲掛けざる。」曰く、「直に瑠璃殿上に行くことを待つて撲倒せば、須らく粉碎すべし。」師侍者をして袴を送つて、一庵主に與へしむ。主曰く、「自ら嬢生の袴あり。」受けず、再び送り去つて問はしめ、「嬢未だ生れざる時、箇の甚麼をか著く。」主語無し。後遷化、焼いて舍利を得たり、持し以て師に似す。師曰く、「直饒八斛四斗を出し得るも、如かじ當初一轉語を下取るの好からんには。」僧問ふ、「山河大地何よりしてか有なる。」曰く、「妄想よりして有なり。」曰く、「某甲がために一錠の金を想出せん、得てんや。」師休し去る。佛日の空、參する次で、問ふ、「二龍珠を争ふ、誰か是れ得る者。」曰く、「業身を卸却し來れ、子と相見えん。」曰く、「已に業身を卸く。」曰く、「珠甚の處に在る。」空、語なし。遂に誠を投じて入室す。師示寂、主首、師に白す、「誰か席を繼ぐべき。」曰く、「堂中の簡時簡密に師の印を受く、人知る者なし、臘の高きを以て第一座となす。衆師の意を曉らす、謂へり、揀擇せしめんと。第二座に命じて任持せしめんと欲す、且つ禮を備へて先づ簡に請ふ、簡讓らず、即ち自ら道具を持して方丈に入る。衆愜はず、簡其の情を察して乃ち棄て去る。其夜安樂樹神號泣す、旦に及んで、衆奔つて麥莊に至つて過を悔いて哀請して衆に歸す、聞く、空中連聲唱へて曰く、「和



尙來也」と。

贊に曰く、「作家に參見し來る、語を出せば人驚恐す。」

幽州江口是れ生緣にあらず、天上の雲居渠が賣弄するに従す。

山を踏んで閑梨の入路あり、幾か曾て和尚と生を隔つ、是れ誰か彌勒のために名を安ず、禪床の震動することを得るに到らず。

羚羊氣息を絶す、軒かに知る獵犬の尋ね難きことを、庵主機關なし、争か天神の供を送ることを得ん。

寸絲掛けず、琉璃殿上輕しく脚を著けて人を撲倒す、千丈身を埋む、貧富門頭大いに眼を開いて夢を説き出す。

孃生の袴拈出することを休めよ、一轉語を下し得ば方に持論すべし、妄想の心掃除し難し、一錠の金を想出す何の用をか作すに堪へん。

口邊に醜を生ず、臘月の扇子正に好し揮搖するに、學處立ならず、閨閣の中の物徒に寶重するに勞す。

業身を卸して佛日と相見る、龍奮迅して明珠を奪ふ、破院を囑して首座をして住持せしむ、鬼號咷して漆桶を争ふ。」

門より入る者は捧げ上せども龍と成らず、點檢し將ち來ればまた是れ方木圓孔を逗る。

同安不禪師

師は雲居に嗣ぐ、諱は道丕、洪州の人、師看經する次で、僧の來り參するを見る、遂に袖を以て頭を蓋ふ、僧弔慰の勢を作す、師袖を放下し、經を提起して云く、「會すや。」僧袖を以て頭を蓋ふ、師云く、「蒼天々々。」僧問ふ、「如何か是れ點額の魚。」曰く、「波瀾を透らす。」曰く、「慚耻する時如何。」曰く、「終に面を仰がず。」曰く、「恁麼ならば則ち其の身を變せざるなり。」曰く、「是なり、青雲の事作麼生。」僧問ふ、「如何か是れ和尚の家風。」曰く、「金鷄子を抱いて霄漢に歸り、玉兔懷胎して紫微に入る。」曰く、「忽ち客の來るに遇はゞ何を將てか祇待せん。」曰く、「金果早朝に猿摘み去る、玉花晩後に鳳啣み來る。」曰く、「湖南。」曰く、「還つて同安が者裏風雲の體、道花搖旋璣を知るや。」曰く、「知る。」曰く、「公の境界に非ず。」僧使ち喝す、師曰く、「短

の蒼天々々。かなしやと譯す、南無天道さまとの意なり、告ぐるところなき故に、天に向つて歎くなり、詩の泰風黃鳥に、彼蒼者天、曷我良人。水滸傳四十一回、皇天可憐、垂救宋江、則箇。

販は樵人徒に書劍に誇る。僧進語せんと擬す。師曰く、「劔甲未だ施さざるに、賊身已に敗る。」僧問ふ、「纔かに言詮あらば盡く今時に落つ、言詮に落ちざる、請ふ師直說せよ。」曰く、「木人語を解す、舌に于るに非ず、石女梭を抛つ、豈に絲を亂さんや。」僧問ふ、「經に依り義を解す、三世佛の冤、經の一字を離るれば即ち魔說に同じ、此の理如何。」曰く、「孤峯迥かに秀で煙蘿を掛けず、片月空に行く白雲



自在。「僧問ふ、「佛未だ出世せざる時、如何。」曰く、「藕絲大象を繋ぐ。」曰く、「出世の後如何。」曰く、「鐵  
 鎖石牛を鎖す。」僧問ふ、「如何か是れ異類中の人。」曰く、「露地に白牛を藏し、長空日月を吞む。」  
 贊に曰く、「奔軼絶塵、了に羈絆なし。  
 偏正位中より來る、聖凡情已に泮く。  
 青雲何の事かある、點額の魚已に波瀾を透る、家風論するを要せず、金鷄の子豈に霄漢に歸せん  
 や。

公の境界に非らず親しく喝せらる、樵人の短販書劍徒に誇る、言詮に落ちず直説し來る、石女梭  
 を抛ち機絲紛亂す。

彩鳳花を啣み霜猿果を摘む、賓客を待して未だ真情を見ず、孤峯迥かに秀で片月空に行く、佛魔を  
 辨じて元正眼なし。

瞞肝佛未だ出世せずと答ふ、截流して象藕絲頭に繋ぐ、依稀たり異類中の人を説く、露地の牛は芳  
 草の岸に藏る。

鴛鴦繡し罷みて金針冷かに、綿密誰か知る、鸞鳳巢空しうして玉帳寒し、森嚴犯し難し。」

持人要是れ弔慰の僧、衣袖頭を蓋ふ蒼天々々、賊過ぎて後弓を張ること  
 已に晩し。

持人要。人をつぶしてなぐさむと譯す。

同安志禪師

師諱は觀志、同安の丕に嗣ぐ、洪州の人、丕將に示寂せんとす、上堂云く、「多子塔前宗子秀づ、五  
 老峯前事若何。」是の如く三問未だ對ふる者あらず、師出で、「曰く、「夜明簾外班を排して立つ、萬里歌  
 謠道太平。」丕曰く、「須らく是れ者の漢にして始めて得べし。」遂に寂を示す。僧問ふ、「二機到らず如何  
 が提唱せん。」師曰く、「偏處逢はず、玄中失せず。」僧問ふ、「凡そ言句あらば、盡く今時に落つ。學人上  
 來請ふ、師直指せよ。」師曰く、「目前現せず、句後迷はず。」曰く、「向上の事如何。」曰く、「迥然として  
 換ず、標準すれば即ち乖く。」

贊に曰く、「鶴寒松を夢み、鶯幽谷に啼く、  
 正偏に墮せず、寧ろ背觸を分たんや。

多子塔前宗子秀づ、先師の金槲の雙趺を露はすことを笑ふ、夜明簾外立班齊し、瞎驢の頂門の三目  
 を豎するに還へす。

偏處逢はず、玄中失せず、二機到らざる處轉た紛拏を見る、目前現せず句後迷はず、直に本來の  
 心を直指し翻つて迂曲と成る。

寶殿人無くして孤月冷じ、南風物を阜かにするの琴を清彈するを聴く、宸昔路を封じ彩雲深し、垂  
 棘無瑕の珠を妙琢するを見る。



梁山の破家種を出す、蒼龍の子彩鳳の雛豈に的傳に當らんや、曹洞五位の宗を繼ぐ、青山の父白雲の兒是れ何の昭穆ぞ。

迴然として換へず、標準すれば即ち乖く、向上の事海底に金針を摸る、然るに妙挾正中拈出し來れば、花簇々錦簇々。

梁山觀禪師

師諱は緣觀、同安志に嗣ぐ、朗州の人、僧問ふ、「如何か是れ和尚の家風。」曰く、「益陽水急にして魚行溢む、白鹿松高うして鳥泊ると難し。問ふ「師誰の家曲を唱へ、宗風阿誰にか嗣ぐ。」曰く、「龍龍子を生じ、鳳鳳兒を生む。」問ふ、「如何か是れ西來意。」曰く、「葱嶺唐土の信を傳へず、胡人謾に太平の歌を説く。」問ふ、「如何か是れ學人が自己。」曰く、「寰中は天子塞外は將軍。」曰く、「便ち恁麼にし去る時如何。」曰く、「朗月空に懸つて室中暗に坐す。」問ふ、「如何か是れ衲衣下の事。」曰く、「密。」問ふ、「如何か是れ正法眼。」曰く、「南華裏。」曰く、「什麼としてか南華裏に在る。」曰く、「汝が正法眼を問ふが爲めに。」上堂、「鈞を四海に垂れて只獐龍を釣る、格外の玄機知己を尋ねんが爲めなり。」座下に一園頭あり、人謂つて曰く、「何ぞ出で來つて

碧巖第六十五則評に見すや、古人道く、千聖の靈機親しみ易からず、龍龍子を生ず、因循するとなかれ、方語解に云く、龍生龍子と訓むは非也、龍生龍子と點すべし、娘生と字例同じ、若し初の如くよめば、下の莫因循が上の龍に屬す、後の如くよめば、龍子に屬する也、因循とは古きにまかせて改めぬを云ふ、宗門には新機を尙ぶ、故に莫因循と云ふ也、覺鐵鷲が先師に無二此話と云へるは、豈に新機に非ずや、不二抄に因循を緣循環と解するは非なり、或は論じて云く、必ずしも娘生と同例と心得るも偏なり、とかく處によりて解すべし。

一兩轉語を問はざる。」曰く、「我れ若し出で問はゞ、須らく者の老和尚をして禪床を下つて立たしむべし。」人之を怪しむ、一日出で問ふ、「家賊防ぎ難きとき如何。」曰く、「識得すれば冤をなさす。」曰く、「識得して後如何。」曰く、「無生國裏に貶向せん。」曰く、「便ち是れ他の安身立命の處なる莫からんや、また無しや。」曰く、「死水龍を藏さす。」曰く、「如何か是れ活水裏の龍。」曰く、「波を興して浪を作さす。」曰く、「忽ち湫を傾け嶽を倒し來るに遇ふ時如何。」師禪床を下つて把住して曰く、「閻梨、老僧が袈裟の角を濕卻せしむることなかれ。」衆遂に之に服す。太陽の玄參する次で、問ふ、「如何か是れ無相道場。」師觀音を指して云く、「者箇は是れ吳道子が畫く。」玄進語を擬す、師急に索めて曰く、「者箇は是れ有相如何か是れ無相底。」玄即ち旨を言下に悟つて拜起して侍す。師曰く、「何ぞ一句を道取せざる。」曰く、「道ふは即ち辭せず、恐らくは紙筆に上せんことを。」師笑つて曰く、「此の語、碑に上り去ることたらん。」玄偈を呈して曰く、「我れ昔初機學道迷ふ、萬水千山見知を覓む、今を明め古を辨す、終に會し難し、直に無心と説くも轉た更に疑ふ、師の秦時の鏡を點出することを蒙りて父母未生の時を照見す、如今覺了す何の所得ぞ、夜烏鷄を放つて雪を帯びて飛ぶ。」師、洞上の宗倚むべしと稱す、偈あり、曰く、「梁山一曲の歌、格外人和し難し、十載知音を訪ひ、未だ嘗て一箇に逢はず。

贊に曰く、「益陽水急に、白鹿松高し。鶴睡清うして月魄を飛ばす、魚行細くして金梭を擲つ。



死水龍を藏さず、家賊を貶して無生國に向ふ、鄭音空しく雅を亂る、胡人を引いて太平の歌を唱ふ。  
 衲衣の事密用の中に在り、拈じ來れば破綻多し、正法眼南華裏を指す、幾諸説を用ひ出す。  
 寰中は天子塞外は將軍、學人と自を塗糊す、格外の玄機鈎頭の絲線、獐龍を釣つて洪波に活葬す。  
 一語太陽の碑に上すを許す、人をして惡心少からざらしむ、十載梁山に在りて曲を唱ふ、風に臨んで耳を掩ふこと應に多かるべし。

妙盡き功亡す、玉斧を揮つて夜月靱を修す、環虚に機泯す、仙槎に駕して曉星河を渡る。  
 更に亡僧の遷化を問へば、紅爐焰上絲線なし、豎に拽き横に拖く。

大陽玄禪師

師諱は警玄、梁山に嗣ぐ、江夏張氏の子、仲父沙門と爲り、智通と號し、金陵の崇孝に住持す、往いて依つて師と爲し、圓覺の了義を聴き、棄て去りて梁山に謁して旨を悟る。上堂云く、「嵯峨萬仞鳥道通じ難し、劔及輕氷誰に憑りてか踐履せん、宗乘の妙句語路陳じ難し、不二法門淨名口を杜づ、所以に達磨九年面壁、始めて知音に遇ふ、大陽今日また端無く、珍重。」僧問ふ、「如何か是れ和尚の家風。」曰く、「滿瓶傾け出さず、大地飢人なし。」上堂云く、「手を撒す那邊千聖の外、祖堂少室根芽を長ず、鷺雪巢に倚る猶ほ自ら可なり、更に看よ白鳥蘆花に入ること。」上堂、「諸禪德須らく明むべし、平常無生の句、妙玄無私の句、體明無盡の句、第一句一路を通ず、第二句賓主なし、第三句兼帶し去

る、一句に道ひ得ば師子嘯呻、二句に道ひ得ば師子返擲。三句に道ひ得ば師子踞地、縱つや十方に周徧す、擒するや一時に坐斷す。正徳庵の時作慶生か箇の消息を通せん。大衆證明若し通不得ならば、來朝更に楚王に獻じて看よ。」時に僧あり、出で、問ふ、「如何か是れ平常無生の句。」曰く、「白雲青山を覆ひ、青山頂露はれず。」如何か是れ妙玄無私の句。」曰く、「寶殿人の侍立せざるはなし、梧桐を種るざれば鳳の來るを免る。」如何か是れ體明無盡の句。」曰く、「手指空する時天地轉ず、石馬紗籠を出づ。」如何か是れ師子嘯呻。」曰く、「終に回顧の意なし、爭か肯て平常に落ちん。」如何か是れ師子返擲。」曰く、「周旋往返全く父に歸す、大用を繁興して體虧くることなし。」如何か是れ師子踞地。」曰く、「去來の機を迴絶して古今變異なし。」上堂、夜半烏鷄鷓鴣卵を抱く、天明起き來つて老鶴を生す、鶴毛鷹背驚鷺の身、卻つて烏鷄と伴侶となり、高く烟雲に入り低く柳岸に飛ぶ、晚に向つて歸來子細に看れば、依倚として雲中の鴈に似たり。」僧問ふ、「如何か是れ透法身の句。」曰く、「大洋海底紅塵起る、須彌頂上水横流。」師年八十、其の法を繼ぐ者無きを嘆じて偈を作つて、皮履布襪を并せて遠録公に寄せて、法器を求めて之を傳續せしむ。曰く、「楊廣山前の草、君に憑りて價の惇なることを待つ、異苗蕃茂の處、深密に靈根を固うす。」其の尾に云く、「得法の者衆に潛ること十年にして、方に闡揚すべし。」遠拜して受く。師嘗て曹山三種の語を釋す、須らく轉位を明め得て始めて得べし、一には曰く、「水牯牛と作る是れ隨類墮、是れ沙門轉身の語、是れ異類中の事、若し此の意を曉めずんば、即ち所滯あり、直に是



れ伊が一念無私なることを要す。即ち出身の路あり。二には曰く、「不受食是れ尊貴墮、須らく那邊を  
 知り了つて卻つて者邊に來つて行履すべし。若し此の位を虚しうせずんば即ち尊貴に坐在せん。」三に  
 は曰く、「不斷聲色、是れ隨處墮、聲色を明めざるを以ての故に、隨處に墮す、須らく聲色の裏に向つ  
 て出身の路あるべし、作麼生か是れ聲色外の一句。」曰く、「聲自ら聲ならず、色自ら色ならず、  
 故に不斷と云ふ。指掌當に何の掌をか指すべき。」浮山、師の眞に贊して曰く、「黒狗銀蹄を爛す、白象  
 崑崙に騎る、斯の二に於て無碍なれば木馬火中に嘶ゆ。」  
 贊に曰く、「惡毒種、寧馨兒。」

漢陽渡頭に奪胎して出づ、智通寺裏顛脱して羈るなし。

圓覺場を掀翻す、跳つて言詮不及の處に入る、秦時の鏡を打破す、父母未生の時を照し見る。

語路信に陳じ難し、宗乘の句灰に和し土に合す、滿瓶傾け出さず、大地の人餓を忍び飢を吞む。

千聖の外手を撒して經行す、蘆花に入つて白馬に騎り去ることを笑ふ、寶殿の中人の侍立するなし、

梧桐を種う寧ろ鳳凰の栖むことを免れんや。

消息既に通ず、惜むらくは師子爪牙未だ具らず、機縁契はず、青山父子相違することを致す。

須彌頂上水横に流る、透法身疑團未だ破れず、楊廣山頭苗茂盛す、死歎を供して老淚交々垂る。

老梁山の抑逼太だ多きに苦しむ、烏鷄が鷓卵を生ず、遠録公に塗糊せらるること少からず、黒狗

爛銀蹄。

聲色堆頭強ひて出身の路ありと説く、央庠座主に非ずんば、誰か備が破皮履潑禪衣を受く。

投子青禪師

師諱は義青、大陽に嗣ぐ、青社李氏の子、初め百法論を習ふ、歎じて曰く、「三祇途遠し、自ら困せ  
 ば何の益かあらん。」洛に入りて華嚴を聽く、義貫珠のごとし、講じて諸林菩薩の偈の即心自性と云ふ  
 に至つて、猛省して曰く、「法は文字を離る寧ぞ講すべけんや」と、棄て去つて、浮山に會聖巖に謁す、  
 山、俊鷹を得て之を蓄ふと夢む、既に覺めて師至る。山以て吉徴となす、留まること三年、山問うて曰  
 く、「外道佛に問ふ、有言を問はず無言を問はず、世尊默然たるは如何。」師進語せんと擬す、山其の口  
 を掩ふ、是に於て師悟つて拜起す。山曰く、「汝玄機を妙悟するや。」曰く、「設ひ妙悟あるもまた須らく  
 吐卻すべし。」時に資侍者旁らに在つて曰く、「青華嚴今日病に汗を得るが如し。」師回顧して曰く、「狗口  
 を合取せよ、汝更に切々たらば我即ち便ち嘔かん。」山、大陽の皮履布襪を以て師に付す、吾に代つて  
 洞上の宗を續がしむ。上堂、「宗乘若し舉せば凡聖躐を絶す、樓閣門開く、別戸相見、設使簾を捲いて  
 悟り去るも、豈旁觀を免れんや、春桃花に遇ふ、重ねて病眼を増す、所以に古人道く、向上一路千  
 聖不傳と、諸仁者既に是れ不傳なるに、甚してか鐵牛新羅國に走過す。」喝して曰く、「達者は須らく知る  
 べし、暗裏に驚くことを。」僧問ふ、「師誰家の曲を唱へ宗風阿誰にか嗣ぐ。」曰く、「威音前の一箭兩重



の山を射過す。上堂、默すれば陰界に沈み、語すれば深坑に墮す、擬著すれば則ち天地懸殊なり、之を棄つるときは則ち千生萬劫洪波浩渺、白浪滔天、鎮海の明珠誰に在りてか掌を收む。良久、主杖を卓して云く、「百雜碎。」示衆に云く、「若し此の事を論せば、鸞鳳の霄に冲するが如し、其の跡を留めず。羚羊角を掛く、那ぞ其の蹤を覓めん。金龍寒潭を守らず、玉兔豈に蟾影に栖まん。其の或は主賓若し立せば、須らく威音世外に頭を搖すべし、問答言陳すれば、乃ほ玄妙路旁唱をなす。若し能く是の如くならば猶ほ半途に在り、更に眸を凝さば相見に勞せざらんや。」師五位君臣を叙して曰く、「夫れ長空一色、星月何ぞ分る、大地偏なし、榮枯自ら異なり。是を以て法に異法なし、何ぞ迷悟あつてか及ぶべき。心自ら心ならず、言象を假つて而して提唱す。其の言や偏圓正到、兼帶叶通、其の法や是非に落ちず、豈に萬象に關らんや。幽旨既に水月に融す、宗源派れて金河に混す、虚疑に墮せず、迴途復た妙なり。」師大陽の秦時の鏡を點出する語を擧して、頌して曰く、「偏中正、夜半天明自影を羞づ、朦々たる霧色河分を辨つ、混然として秦時の鏡に落ちず。」

贊に曰く、「嶽英靈を降し、天の碣斗を生む

因明を習うて未だ網羅を透らず、華嚴を究めて重ねて枷杻を増す。

浮山不祥の夢に入る、折翅の鷹何の用にか畜ふことをなさん。洞下既墜の風を追ふ、蹶蹄の狗卒に醫救し難し。

碣は山時に立つの貌、斗は斛と音同じ、峻立なり。

金鳳龍巢を借つて宿す、豈知んや會聖の重圍に陥らんとは、良馬鞭影を行く、初めより世尊の良久を待たず。

即心自性、佛も亦強ひて名く、妙悟玄機、我れ即便ち嘔たん。

鐵牛走過す新羅國、向上的路千聖不傳、石女輕く彎く月子弓、兩重の山一箭に射透す。

鎮海の珠を撼つて百雜碎、語黙到らざる處未だ轉身を會せず、秦時の鏡一重の光を添ふ、明暗未だ分たざる前豈に手を出すことを容さんや。

玉兔豈に蟾影に栖まんや、甚れの處よりか者の消息を得來る、金龍は寒潭を守らず、者の漢別に條路を尋ねて走る。

章を偏正に分つと雖も、虚疑に墮せず、轉位回功極則の處に到つて、何ぞ曾て有ることを知らん。

芙蓉楷禪師

師は投子に嗣ぐ、諱は道楷、沂州雌氏の子、初め投子に參じて問ふ、「佛祖の言句は家常の茶飯の如し、此を離れての外別に爲人の言句ありやまた無しや。」曰く、「汝道へ、寰中は天子の勅、還つて禹湯堯舜を假るやまた無しや。」師之に酬いんと擬す。子拂子を以て師の口を撼つて曰く、「汝意を發し來らば早く二十棒あらん。」師即ち開悟再拜して便ち行く。子曰く、「且來闍黎」と、師顧みず。曰く、「汝不疑の地に到るや。」師即ち耳を掩ふ。一日子に侍して園に遊ぶ、子拄杖を以て師に付して曰く、「理與廢



なるべし。曰く、「和尚と鞋を提げ杖を撃ふ、分外となさず。」曰く、「同行の在るあり。」曰く、「那一人教を受けず。」子休し去る、晚に至つて子謂つて曰く、「早來の説話未だ盡さず。」曰く、「更に請ふ舉せよ、看ん。」曰く、「卯に日を生じ戌に月を生ず。」師即ち燈を點じ來る、曰く、「上來下去、總に徒然たらす。」曰く、「左右に在つて理此の如くなるべし。」曰く、「奴兒婢子誰家の屋裏にか無き。」曰く、「和尚尊年他を缺かば不可なり。」曰く、「與麼に慙慙。」曰く、「恩を報ずるに分あり。」上堂、晝祇陀の苑に入り、皓月天に當る、夜靈鷲の山に登る、太陽目に溢る、烏鴉雪に似たり、孤鴈群を成す。鐵狗吠えて霄を凌ぎ、泥牛闘ふて海に入る。正當恁麼の時十方共に聚る、彼我何ぞ分たん。古佛場中祖師門下、<sup>●</sup>大家一隻の手を出して往來の知識を接待せよ。諸仁者且く道へ、箇の什麼邊の事をか成し得たる。良久して云く、「臍るに無影樹を栽るて後人に留與して看せしむ。」僧問ふ、「胡家の曲子、五面に墮せず、韻、青霄に出づ、請ふ師吹唱せよ。」曰く、「木鷄夜半に啼き、鐵鳳天明に叫ぶ。」曰く、「恁麼ならば則ち一句の曲千古の韻を含む、滿堂の雲水盡く知音。」曰く、「無舌の童子能く繼和す。」曰く、「作家の宗師人天の眼目。」曰く、「兩片皮を禁取し去れ。」大觀の初め京尹李孝壽奏す、「師の道行、叢林に卓冠す、宜しく褒顯あるべし。」上紫衣を賜ふて定照禪師と號す。内侍勅命を持して至る、師恩を謝し竟つて、乃ち己が志を陳す。「出家せし時嘗て重誓あり、名利の爲めにせず、誠を學道に專にして用ひて九族を資けん、苟も願心に違はず當に身命を棄つべし、父母此を

●さうくと譯す。

以て出家を聽許す、今若し本志を守らずして竊かに龍光を冒さば則ち佛法下衰せん、是に於て表を修め力めて辭す。旨を京尹に降して堅く之を受けしむ。師確く守つて回らず、命を拒むを以て罪に坐せらる。旨を奉じて收めて有司に付す、有司師の忠誠を知り、疾ありやを問ふ、師曰く、「平日疾あり、今實に無し。」曰く、「疾有りと言はば法に於て罪を免れん。」師曰く、「已に厚意を悉す、但妄りに安んずる所に非ず。」恬然として刑を受けて行く、之に従ふ者市に歸するが如し。淄州に抵つて屋を僦りて居す、學者愈々親しむ。明年冬勅して自便せしむ、芙蓉に庵す。四衆雲の如く集まり、大いに洞宗を闡く。示衆、「山僧行業取ることなし、忝く山門を主る、豈に坐ながら常住な費して頓に先聖の付囑を忘るべけんや。今は輒ち古人に倣ふて住持の體例をなさん。諸人と議定す、更に山を下らず、齋に赴かず化主を發せず、唯本院莊課一年の所得を將て均しく三百六十分と作し、日に一分を取つて更に人に隨つて添減せず、以て飯に備ふべくんば則ち飯と做さん。足らずんば則ち粥と作さん。又足らずんば則ち米湯と作さん。新到相見には茶湯のみ、更に煎點せず、惟一の茶堂を置いて自ら去つて取用し、務めて縁を省かんことを要して專一に道を辨せよ。」師放たれて還つて後有司爲めに跡を去らんと欲す、師曰く、「先帝の遺墨豈に去るべけんや。」帝謂く、「此の老終身偏強」と。靈源の師を贊するに曰へることあり、「嚴天の大雪始めて松筠を見る、媚草天花も亦造化と成る、苟も世榮を竊まば、實に恩に孤くものなり。」



贊に曰く、「**倔強の老尊慈、脊梁生鐵鑄る。**

寰中の勅、堯舜禹湯を假らず、洞下の宗、寧ろ偏正回互分たんや。

眞に不疑の田地に到る、快に一雙の耳を將て掩ふて休す、纔かに作家の宗師を説く、好し兩片皮を禁じて出で去るに。

胡家の曲子音韻なし、苦だ夜半木鷄啼くと言ふことを休めよ、祖師門下功勳を絶す、徒に手を出して無影樹を贖裁す。

同行教を受けず、謾に伊をして杖を拏げ鞋を提げしむ、來去總に徒然、誰家にか奴兒婢子なき。

石女梭を抛ち木人錦を開く、潑笑褻的に是れ家傳、泥牛海に入り鐵狗膏を凌ぐ、爛葛藤偏に能く

路布す。

翻々たる形影溜川に去る、松筠の操幾ど雪霜に傲る、濟々たる威儀漢

節回る、芙蓉の花親しく雨露を承く。

粥足り飯足る、三百六十日合火家私を語る、僧か俗か、三萬六千場

床を對して夢事を論ず。

垂々たる白髮、先帝の遺墨猶ほ新しきを守る、媚草天花の造化を成すに視へ、苟も世榮を竊まば顔に汗すること雨の如し。

①合。火夥同音通用、仲間的事也、合夥はそうなひまと云ふこと也、こゝはさうんくと見るべし、家私にこゝは身代なり、正字通火字註に、火隊の義を辨ず、強ひてこれに拘るべからず。

丹霞淳禪師

師は芙蓉に嗣ぐ、諱は子淳、劍州賈氏の子、師上堂舉す、「**徳山云く、「我宗に語句なし、亦一法の人に與ふるなし」と。**徳山恁麼の説話只草に入り人を求むることを知つて、覺えず通身泥水なることを。子細に看來れば只一隻眼を具す。丹霞は則ち然らず、我宗に語句あり、金刀剪れども開けず、深々たる玄妙の旨、石女夜懷胎<sup>①</sup>示衆舉す。「**肇法師云く、「乾坤の内、宇宙の間一寶あり、形山に秘在す。」**肇法師恁麼に道ふ、只蹤を指し跡を話すること能はず。丹霞今日宇宙を劈開し、形山を打破して諸人の爲めに拈出せん、具眼の者は辨取せよ。「**卓一下、「還つて見るや、鷲鷲に立つ、同色に非ず、明月蘆花他に似ず。」**上堂、「**寶月輝を流す、澄潭影あり、水に月を蘸すの意なく、月に照を分つ心のなし、水月兩ながら忘じて方に斷と稱すべし。所以に道ふ、昇天底の事は、直に須らく颺卻すべし、十成底の事は、直に須らく去卻すべし。地に擲つ金の聲回顧することを須るす。若し能く是の如くならば始めて異類中行を解せん、諸人者裏に到つて還つて相委悉するや。」**良久して云く、「**行に當つて人間の歩を擧せず、披毛戴角泥塵に混す。」**上堂、「**亭々たる日午猶ほ半を虧く、寂々たる三更尙ほ未だ圓かならず、六戸曾て曉意を知らず、往來月明の前に在り。」**僧問ふ、「**牛頭未だ四祖に見えざる時如何**」曰く、「**金菊乍ち開いて蜂競ひ採る。」**曰く、「**見ゆる後如何**」曰く、「**苗枯れ花謝して了に依ることなし。」**眞歇參する次で、師問ふ、「**如何が是れ空劫已前の自己**」歇對せんと擬す、師



云く、「爾開在ならば且く去れ。」一日鉢孟峰に登つて忽ち悟つて歸つて侍立す。師掌して曰く、「將に謂へり、爾有ることを知る」と。歌忻然として之を拜す。翌日上堂、「日照して孤峰翠に、月臨んで溪水寒し、祖師玄妙の訣、寸心に向つて安することなかれ。」便ち下座。歌直前して曰く、「今日陸座更に某甲を謾することを得ざるなり。」師曰く、「爾試みに我が今日の陸座底を擧せよ、看ん。」歌良久す、師曰く、「將に謂へり、爾營地なり」と。歌便ち出づ宏智參する次で、師問ふ、「如何が是れ空劫已前の自己。」智曰く、「井底の蝦蟇月を吞卻す、三更借らず夜明簾。」師曰く、「未だ更に道へ。」智擬議す、師打つこと一拂子して云く、「又借らずと道ふか。」智言下に於て大悟す。

①繪蠟燭なり、花は模様の事なり。  
②道地。其土地に出来たるものを土産と云ふ、他國より來る物を道地(わたりもの)と云ふ、覺後禪に見ゆ、宣曰く、覺後禪とは肉滿團也、先輩此書の名を諱みてかく改められき。

贊に曰く、「明珠蚌腹より生ず、野鶴鷄群に在り。木佛を焼いて遺風未だ泯せず、鴈鳥を賦して家譜親しく聞く。心光を點發す。花蠟燭、鄧州の道地、殺氣を慘舒す劍門關、棧閣雲に連る。

玉女懷胎恰も半更、玄妙の旨深淺を分ち難し、鷲鷲雪に立つ同色に非ず、形山の寶分文に直らず。

水月兩ながら忘す、昇天底固に當に颺下すべし、塵泥既に混す、異類の中殷勤を惜むなけれ。

兔魄未だ分たざる時、軒かに知る六戸曉意を知らすと、牛頭相見の後、可憐生百花亂落ちて繽紛。暗に金梭を擲ちて古洞の機絲を織る、輕々に杼を鳴す、細かに玉線を排して曹山の綿縫を開く、簇簇紋を成す。

威音王已前、菩薩を收へ了て毫光一掌に歸す、夜明簾借らず、覺夫子を擒にして筆陣千軍を掃はしむ。

等閑に一句を道へ、正中妙挾縦ひ金刀綿密の處を剪破するも、依然として巧動に墮せず。

真歇了禪師

師諱は清了、左縣の人、俗姓は雍、始め丹霞に見えて旨を悟る。後長蘆の照に謁す。照一見して之を器とす、命じて侍者となす。年を踰えて分座、未だ幾くならざるに、照病を稱して退閑す。師命じて席を繼がしむ、學者歸するが如し。拈香の時照衣を付して、師に與へて拈出することを望む、見るに及んで霞の爲めにす、照左右をして衣を扯き去け、師預め布伽梨を袖に備へて遂に搭く。示衆拄杖を撼して云く、「看よ看よ、三千大千世界一切搖動くことを。雲門大師は即ち得たり、雪峯門下は即ち然らず。」拄杖を卓して云く、「三千大千世界什麼の處に向つてか去る、還つて會すや、重梅の雨を得ずんば秧苗争か青きことを得ん。」上堂、「絶峯頂に上り獨木橋を過ぐ、驀直恁麼に行くも猶ほ是れ時の人。脚高く脚低き處なり。」



り、若し見得徹せば、戸を出でずして身十方に徧く、未だ門に入らずして常に屋裏に在り、其れ或は未だ然らずんば涼を趁ふて一轉の柴を搬せば好し。上堂、「微を窮め本を喪ひ、妙を體し宗を失す、一句流を截つて淵玄及盡す、是を以て金針蜜なる處、鋒鋒を露はさず、玉線通する時潛かに異彩を舒ぶ、然れども是の如しと雖も猶ほ是れ交互雙べ明かなり、且く道へ、巧拙不到作麼生か相委せん。」良久して云く、「雲蘿秀づる處青陰合す、巖樹高低翠鎖深し。」上堂、「幻化の空身即法身。」遂に舞を作して云く、「見るや見るや、恁麼に見得せば橋を過ぎて村酒美なり。」又舞を作して云く、「見るや、恁麼に見ずんば岸を隔てて野花香し。」上堂、「苦古徑を封す虚凝に墮せず、霧寒林を鎖す肯て風姿を彰さんや、釣針穩密孰か云ふ漁父巢に栖むと、恁麼に承當せば自ら、是れ平常の快活、還つて透關の眼を具する底ありや。直饒ひ聞くこと早くして便ち歸り去るも、争でか從來門を出でざるに似かん。」上堂、「巧を轉じて位に就く、是れ向去底の人、玉荆山に蘊んで貴し、位を轉じて功に就く、是れ卻來底の人、紅爐片雪の春、功位俱に轉す通身滯らず、手を撒して依ることを亡す、石女夜機に登る、密室人の掃ふなし。」上堂、「久しく斯の要を黙して務めて速かに説かず、釋迦老子歎曲に賣弄せんことを要するを待つ、争でかせん未だ母胎を出でざる時、已に人に觀破せらるゝことを。且く道へ箇の什麼をか觀破する、雪峯を護することを得ず。」

贊に曰く、「真正左綿の人、親しく丹霞老に見ゆ。」

胸破壁徹して量汪汪、萬頃痕なし、心月孤圓にして影團々、千江照を分つ。

人前に主を辨す、布伽梨を把つて當面に換へ來る、鬧裏に身を翻す、鉢盂峰を將て一脚に踢倒す、芍薬花開く菩薩の面、玉欄古洞の春を藏す、綠楊纒盡す木人の眉、寶鏡曹家の曉を照す。

重梅の雨を得たり、寒に乗じて幾下の杖を卓して休す、獨木橋を過ぐ、涼を趁ふて一轉の柴を搬せば好し。

巖樹翠深うして雲蘿青合す、截流の句巧拙分ち難し、橋を過ぎて酒美に岸を隔てて花香し、見法身郎當少からず。

虚凝墮せず泥牛月に吼ゆ、古徑苔の封するに任す、手を撒して依を亡す、石女機に登る、密室人の掃ふなし。

星兒香餌好し、龍淵の赤梢鯉を引いて鱖々鉤を吞ましも、些子藥頭靈なり、南山の驚鼻蛇を禁じて深く草に竄れしむ。

功を轉じて位に就き、位を轉じて功に就く、底を盡くし掀翻す、黄面老瞿曇未だ母胎を出でざる時、已に阿師に觀破せらる。

宏智覺禪師

師諱は正覺、丹霞に嗣ぐ、隰州李氏の子、母夢らく正臺の僧環を解いて右の臂を環らすと、乃ち孕



む、生るゝに及んで右臂に一環を起す。上堂、「心、縁すること能はず、口議すること能はず、直饒歩を退けて荷擔するも、切に忌む當頭に諱に觸るゝことを。風月寒清古渡の頭、夜船撥轉す琉璃の地。」上堂、「黄閣簾垂る誰か家信を傳へん、紫羅帳合す暗に眞珠を撒す、正恁麼の時視聽到らざる所あり、言詮及はざる所あり、如何か箇の消息を通じ去らん、夢回つて夜色依稀として曉く、笑つて家風を指す爛熳の春。」上堂、僧問ふ、「如何か是れ向去底の人。」曰く、「白雲壑に投じて盡く、青嶂空に倚つて高し。」曰く、「如何か是れ卻來底の人。」曰く、「滿頭の白髮巖谷を離る、半夜雲を穿つて市塵に入る。」曰く、「如何か是れ不來不去底の人。」曰く、「石女喚回す三界の夢、木人坐斷す六門の機。」乃ち云く、「句裏に宗を明かすは即ち易く、宗中の辨ずることは即ち難し。」良久して云く、「還つて會すや、凍鶏未だ報せず家林の曉、隠々たる行人雪山を過ぐ。」辭世に云く、「夢幻空花六十七年、白鳥烟没して秋水天に連る。」

贊に曰く、「精進幢、慈悲種。

隰州の古佛、未だ放光を解せず、五臺の老僧、何ぞ曾て夢に入らん。

紫芝の眉宇黄金の骨、天上の麒麟、黄蘗の襟懷錦繡の腸、僧中の鸞鳳。

尊貴に墮せず、三世何ぞ用ひん國王となることを、苦に清吟を事とす、一詩未だ唐宋を追ふことを見ず。

琉璃殿滑かにして船輕く撥す、尙ほ玄微を帶ぶ、黄閣簾垂れて信通せず、猶ほ向奉を存す。

二十里の松濤霽月を翻へす、沒絃琴時に清彈を發す、一百尺の樓影清池に蘸す、不幸の功全く

妙用を彰す。

風斤巧に琢く連城の壁、瑩徹了に痕なし、燭火輕く然す照渌の犀、虛凝會て動せず。

青嶂空高うして白雲壑に投す、來機に應じて者の僧の眼睛を睛卻す、白鳥烟没して秋水天に連る、

死款を供して他人の鼻孔を笑破す。

泰華を擘開して儘伊が河源を逗出することを容す。三世佛を呑む是れ死蛇なりと雖も、また活弄せん

ことを要す。

天童珪禪師

師は眞歇に嗣ぐ、諱は宗珪和州の人也、上堂云く、「劫前に歩を運び世外に身を横ふ、妙契意を以て到るべからず、眞證言を以て傳ふべからず、直に得たり虚靜氣を斂む、白雲寒巖に向つて斷ゆ、靈光暗を破る、明月夜船に隨つて來る、正恁麼の時、作廢生か履踐せん、偏正會て本位を離れず、縱横那ぞ因縁を語るに涉らん。」僧問ふ、「如何か是れ道。」曰く、「十字街頭に斫額を休めよ。」雪竇の鑑、海山に入つて發明して後乃ち曰く、「威音王已前無師自證、威音王已後無師自證の者は即ち邪魔外道。」山を出でゝは空中の語を聞くに云く、「鄭行山は肉身

①手にて頼をひさす也、高きを望む貌。



の菩薩なり」と。長蘆に至つて師に見えて印證を求む、師之を肯ふ。

贊に曰く、「參軍俊逸、開府清新。一葦亭九成の儀鳳、新豐洞五色の祥麟。

大道虛凝、十字街頭徒に斫額を勞す、玄微銷鑠、威音世外正に好し身を横ふに。

眞證言を以て傳ふべからず、言天下に滿つれども口の過なし、妙契豈に意を以て到るべけんや、意萬有を窮めて根塵を絶す。

暗に靈光を燭す、夜船娟々の月を載す、氛虛凝を消す、寒巖片々の雲を斷つ。

縱横那ぞ因縁を語るに涉らん、水を辱んで鴛鴦を潑ぐ影迹を藏し難し、偏正曾て本位を離れず、枯

椿瀨馬を繫ぐ徒に心神を死せしむ。

錦縫輕く開いて、花香を噴き蝶清曉に眠る、機絲動かす、柳烟を含み鶯芳春に織る。

眼有つて筋なし、錯つて鄭行山肉身の菩薩なりと印證す、飛雪千丈冤苦を伸ぶる聲、叢林を撼すことを致す。

自得暉禪師

師は宏智に嗣ぐ、諱は慧暉、會稽張氏の子、上堂、「巢は風を知り、穴は雨を知る。甜き者は甜く苦

きものは苦し。計較して思量を作すことを須ゐず、五五從來二十五、萬般の施設平常に到る。此は

是れ叢林飽參の句、諸人還つて委悉するや。野老は知らず堯舜の徳、擊々鼓を打つて江神を祭る。」

上堂云く、「皮膚脱落して方隅を絶す、身心を明了すれば一物無し。妙に道寰深靜の處に入つて、

玉人端馱す白牛車、妙用の田地達る者還た稀なり。識情到らず唯證して乃ち知る。白雲の兒靈々

自ら照す、青山の父卓々常に存す。機頂後の光を分ち智劫前の眼に契ふ。所以に道ふ、新豐の路

峻にして仍ほ跛かなり、新豐の洞湛然として沃ふ、登らんものは登れ動搖せず、遊ばんものは遊

べ勿速することなかれ、亭堂到る人有ること稀なりと雖も、林泉尋常の木を長せず。諸禪徳向上の一

著尊貴明め難し。琉璃殿上尊と稱せず、翡翠簾前還つて合伴す。正與麼の時針線貫通眞宗墜さず、

合に作麼生か施設せん、滿頭の白髮巖谷を離る、半夜雲を穿ちて市塵に入る。」師に六牛の圖あり、一

に曰く、「始めて知識の示誨を聞いて即ち信心を起す、信心既に萌して永く道の本となる、故に牛の首の

一點白し、一念信を本となし、千生入道の因、自ら憐む覺性に迷ふて隨處埃塵に染ることを、野草時

々縁に狂花日々新なり。家を思ふて得るに計無し、但覺ゆ涙の中を沾すことを。」二に曰く、「信心既

に發して念々措磨す、忽ち發明を示す、心歡喜を生ず、最始に入頭す、故に頭全く白し、問訊す者

の牛兒非を知ること何ぞ太だ遅き、家を抛つて幾劫をか經、妄を逐ふ許多時ぞ念々無念に歸し、思々

所思を絶す、入頭此より始めて次第に無爲を證せん。」三に曰く、「既に發明あり、漸漸に熏煉す、智慧

明靜にして未だ純一なること能はず、將に半身を白うせんとす、看牧す幾春秋ぞ。將に露地の牛を

成せんとす、荒草を出離し去つて、向つて雪山に近き遊ぶ。正念一に歸すと雖も邪思尙ほ流れ混す。



愁を脱して心迹盡く六處收むること能はず。四に曰く、「更に妄念なし、唯一真心清淨湛然として通身明白、六處該ぬること能はず、優曇火裏に開き、了然として系屬なく、明淨にして纖埃を絶す、繩索將た用なし、人牛安んぞ在らんや。迢々たり空劫の外、佛祖能く猜ふことなし。五に曰く、「心法雙べ忘じて人牛俱に泯す、永く象外を超ゆ、唯一空々是を大解脱門佛祖の命脈を名く。人牛消息盡き古路知音を絶す、霧捲いて千巖靜かに、苔生じて三徑深し、心空所有なし、情盡きて今に當らず、把釣公何に在るか、磻溪綠陰を鎖す。六に曰く、「命根斷する處絶後還つて甦す、隨類受身場に逢ふて戲を作す、只舊時の人を改めて、舊時行履の處を改めず、妙盡きて復た窮通還つて六道の中に還る、塵々皆佛事處々是れ家風、皓玉泥中に異なり、精金火裏に逢ふ、優遊す無間の路、隨類且つ漂蓬。」贊に曰く、「石火電光、雷霆一默。」

若耶溪沙裏の精金、苧羅山棘中の蘆荀。

眞歇に花を挿んで老婦の装を見る、寧ろ羞慚を識らんや、宏智に飯を嚼んで嬰孩に饑る、敢て自得と言はんや。

明暗の路を踏翻す、眼睛偏地の疾藜、離微の根を剗斷して、脚跟下參天の荆棘。

十成尊貴、香車に駕して豈に宸苔を輒らんや、一路平常、江神を祭つて舜力を知らず。

烟霏れて寒沙孤鷺立つ、野溪頭雪正に、模糊す、凍消して枯木老龍吟す、竹戸の外春に消息なし。

し。

道寰深靜の處、腦後の光劫前の眼猶ほ是れ金鹿、情識未だ融せざる時、

青山の父白雲の兒總て家賊と成る。

正偏兼到、十洲の花寧ろ凋殘を免れんや、收放未だ全からず、六牛の

圖何の奇特かある。

長庚門下、潑生涯を掃蕩す、信に神駒汗血の功あり、金鷄司晨の徳を抱く。洞山此に至つて十一世共十四人。

① 模糊作模、字典に模糊は漫なる貌、杜詩、背錦模糊、漫滅して見えわからぬなり。  
② やくざなしんだい也、生涯は生計と同心。



雲門宗

雲門匡真禪師

師は雪峯に嗣ぐ、諱は文偃、秀州の人、俗姓は張、空王寺にして受業す、四分律を聽く棄てて睦州に見ゆ、州纔かに見て便ち門を掩て、師の足を摺折して曰く、「秦時の轆轤鑽。」師大悟す、州指して雪峯に見えしむ。師、峯の莊に至つて僧を見て問ふ、「上座山に上り去る那。」僧云く、「是。」師曰く、「一則の語を寄せて堂頭和尚に問はしめん、是れ別人の語と道ふことを得ざれ。」僧曰く、「諾。」師曰く、「上座、寺に到つて和尚の上堂に衆の集るを見て便ち出でて腕を握つて地に立つて曰へ、者の老漢項上の鐵枷、何ぞ脱卻せざる。」と其の僧、師の教に依る。峯者の僧の與麼に道ふを見て、便ち下座、欄胸に把住して曰く、「速かに道へ、速かに道へ。」僧語なし、峯拓開して曰く、「是れ汝が語にあらず。」僧曰く、「是れ某が語。」峯曰く、「侍者細棒を將ち來れ。」僧曰く、「是れ某が語にあらず、是れ莊上一りの浙中の上座、某に教へ來りて道はしむ。」峯曰く、「大衆莊上に去つて五百人の善知識を迎へ取り來れ。」師次の日山に上る、峯一見して便ち曰く、「甚に因つてか到ること與麼なることを得たる。」師手を以て口を拭うて趨り出づ、峯之を奇とす、靈樹二十年首座を請せず。一日師至る、即ち之に命ず、辭せずして職に就く。劉王、

寺に入る毎に樹接せず、王其の過を檢せんと欲す、樹已に之を知りて遂に入寂す。王至る、衆之を言す、王曰く、「何の言句かありし。」衆曰く、「和尚去りし時一合子を封じて王の至るを待ちて自ら開かしめよと云ふ。」王開いて一小帖を見るに、云く、「人天眼の眼目堂中の首座」と。王即ち師に命じて席を繼がしむ。前世の因に劉王は乃ち香を鬻ぐ人なり、寺に入りて僧堂の中に涕唾す、樹は堂司と爲る、偶して之を叱して曰く、「面上に唾するが如し」と。之を争うて休まず、師之を諫めて去らしむ。師に願鑑一字關、紅旗、横骨の宗旨あり、示寂に臨んで遺表に曰く、「風霜に十七年間に困ず、南北を數千里の外に渉る」と。

贊に曰く、「菰蒲異材を生ず、浩氣雲漢を呑む。空王寺を出づ。

四分の葛藤椿に繋るに心なし、睦州の門に跨る、折脚秦時の轆轤鑽を悟る。

果は霜を経て熟す、軒かに知る靈樹の明窓下に安排することを、金は指を繞つて柔かなり、更に雪嶠洪爐の中に入りて烹煨せらる。

劉王に見えて僧堂に唾面の未だ乾かざるを憶ふ、玄沙を友として漁舟の通身紅爛なることを笑ふ。洞山に三頓の棒を放す、徹底老婆心、雲門の一字關を豎つ、宗師の眼を瞎却す。

水上の紅旗立てて未だ收らず、暗中の横骨抽んで何の限りかあらん。十七年風霜に逆旅途間に困ずと雖も、然も數百世奇勳を瘴烟城畔に策つ。



僧鳳や人龍、緊誰か九成を奏し重淵を攪て、來儀をして祖庭の秋晩に奮飛せしむ。」

香林遠禪師

師は雲門に嗣ぐ、諱は澄遠、漢州の人、姓は上官、師、侍者となり、紙衣を將て門の語句を録す、後に蜀に歸りて水晶宮に於て往來に茶湯を接待す。僧問ふ、「美味の醍醐、甚としてか變じて毒藥となる。」曰く、「導江紙貴し。」僧問ふ、「如何か是れ室内一椀の燈。」曰く、「三人龜を證して驚となす。」僧問ふ、「如何か是れ衲衣下の事。」曰く、「臘月火山を燒く。」僧問ふ、「如何か是れ香林の一脈の泉。」曰く、「念間斷なし。」曰く、「飲む者如何。」曰く、「隨方の斗秤。」師、衆に謂つて曰く、「老僧四十年、方に打成一片。」將に示寂せんとす、知府宋公瑞を辭して曰く、「老僧行脚し去らん。」通判曰く、「者の僧、風狂八十歳にして行脚して那裏にか去る。」宋曰く、「大善知識去住自由。」遠録公、雲門の宗を探り蜀に入りて、師に人面山に見ゆ。

贊に曰く、「頂五峯よりも峭し、眼三角を生ず。」

韶石の象龍群裏、犀牛を奪ひ得たり、岷峨山水の窟中、鸞鷲を奮飛す。

紙衣他人の語句を録す、魚目を認めて明珠と作す、沙瓶客を待つ湯茶を煮る、醍醐を翻して毒藥となす。

水晶宮冷かにして香篆を浮ぶ、團蒲に倚つて露月光風に宴す、人面山高うして翠屏を列ぬ、瘦

節を尾いて青猿野鶴を訪ふ。

龜を證して驚となす、室内の燈光明を滅卻す、臘火山を燒く、衣下の事恐くは提撥し難からん。

四十年打成一片、明皎々暗昏昏々、八十歳諸方に行脚す、峭巍々活潑々。

鑿叟の宗旨を探る、遠録公を引いて走得して脚皮を穿たしむ、落頼の門風を起す、祚智門些の辛苦を喫し著するを聽す。

香林の一脈泉間斷すること多時、若し隨方の斗秤の上を要せば自ら宜しく斟酌すべし。」

洞山初禪師

師は雲門に嗣ぐ、諱は守初、鳳翔傅氏の子、初め雲門に參す、門云く、「近離甚の處ぞ。」曰く、「查渡。」曰く、「夏甚の處に在りし。」曰く、「湖南の報慈。」曰く、「幾時か彼を離れし。」曰く、「八月二十五。」曰く、「汝に三頓棒を放す。」次の日、師上つて問訊して曰く、「昨、和尚の三頓棒を放すことを蒙る、知らず過甚廢の處に在る。」曰く、「飯袋子、江西湖南便ち恁麼にし去るか。」師大悟、遂に曰く、「他後人烟なき處に向つて箇の庵子を卓てて、一粒の米を畜へず、一莖の菜を種ゑず、十方の往來を接待して盡く他のために釘を抜き楔を抜き、炙脂帽を拈却し、鶴臭衫を脱却して、伊をして洒々地に箇の無事の衲僧となり去らしめんこと、豈に快からずや。」門云く、「爾が身、椰子の大きいさの如くして、許多の大口を開き得たり」と。示衆云く、「言、事を展ぶるなく、語、機に投せず、言を承くる者は喪し、句に滯る



ものは迷ふ、還つて得るや。爾衲僧分上、者裏に到りて須らく擇法眼を具して始めて得べし。只洞山が恁麼に道ふが如きは、また一場の過あり。且く道へ、過什麼の處にか在る。僧問ふ、「文殊普賢來參の時如何。」曰く、「水牯牛の欄裏に趁向し著せん。」曰く、「和尚地獄に入ること箭の射るが如し。」曰く、「全く子が力に憑る。問ふ、「師、師子座に登る、請ふ師道情を唱へよ。」曰く、「晴乾水道を開き、無事曹司を設く。」曰く、「恁麼ならば則ち師の指示を謝す。」曰く、「賣鞋の老婆脚趂越。」問ふ、「心機意識を離却して、請ふ師一句。」曰く、「道士黄を著け瓮裏に坐す。問ふ、「大衆雲の如く臻る、請ふ師其の樞要を撮つて略ぼ大綱を舉せよ。」曰く、「水上の浮漚五色を呈す、海底の蝦蟇月明に叫ぶ。」問ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」曰く、「楚山頭倒に卓つ。」曰く、「水を出づる後如何。」曰く、「漢水正に東に流る。」問ふ、「如何か是れ佛。」曰く、「麻三斤。」僧に問ふ、「甚處より來る。」曰く、「汝州。」曰く、「此去つて多少ぞ。」曰く、「七百里。」曰く、「幾緇の草鞋を踏破す。」曰く、「三緇。」曰く、「甚の處にか錢を得て買ふ。」曰く、「笠子を打す。」曰く、「參堂し去れ。」僧應喏。

贊に曰く、「問世の賢、眞の法器。

報慈を離れて未だ常情を出でず、雲門に見えて方に始めて警地なり。

鳳黃壑に生ず、虎豹の子氣已に牛を食ふ、電掣城を傾く、龍馬の駒足驥を展ぶるに應へたり。

①道士はすべて黄色を用ふ、因つて道士を黄冠と云ふ。

②とまきの棒はれちの類也。

渾身を視るに椰子の如し、能く幾くの長かある、大口を開いて紡車に似たり、略ぼ少愧なし。

先師の會中に於て何の過か有ると問ふ、幾藤條をか喫すべき、人烟なき處に向つて往來を接待す、一粒の米を畜へず。

酒は公子の面を粧ひ、黄頭碧眼を把りて屎坑頭に倒卓す、花は美人の頭に挿む、文殊普賢を將て牛欄裏に趁向す。

賣鞋の老婆脚趂越、道情を唱へて蠻子郷談を打す、瓮に著く道士坐して鬼堆、雜意識の波斯闍市に入る。

大海の浮漚蝦蟇月明に叫ぶ、錯つて韶石の綱宗を稱提す、楚山倒に卓ち漢水東に流る、謾に蓮花の出水を塗糊す。

僧に問ふ此去つて路多少ぞ、幾緇の草鞋をか踏破する、佛に答へて麻三斤を亂撮す、渾て星兒の臭氣なし。

言事を展ぶるなく、語機に投せず、道理を説くことは即ち無きにあらず、少室の門風を望むことは白雲萬里。

智門衲禪師

師は香林に嗣ぐ、諱は光祚、隨州の人、上堂云く、「山僧記得す、母胎に在りし時一則の語あり、今



日大衆に舉似せん。諸人道理の商量を作すを得ざれ、還つて人の商量し得るありや。僧問ふ、「金剛眼中に箇の甚麼をか著得する。」曰く、「一把の沙。」曰く、「甚麼として此の如くなる。」曰く、「公の境界に非ず。」問ふ、「荷花未だ水を出でざる時如何。」曰く、「蓮花。」曰く、「水を出づる後如何。」曰く、「荷葉。」上堂云く、「汝等諸人横に拄杖を擔つて一叢林を出で、一叢林に入る、備道へ、叢林幾種かある、或は旃檀叢林、旃檀の圍繞するあり、或は旃檀叢林荆棘の圍繞するあり、只四種の叢林の如き、是れ汝諸人阿那箇の叢林に在りてか、安身立命する、若し安身立命の處なくんば虚しく草鞋を踏破せん、閻羅王欄に草鞋錢を徴むるに日の在るあらん。」上堂、「東家の李四婆西家に來つて火を乞ふ、門外に立つこと少時、他の我を停滯せしむるを瞋つて、惡發して走つて家に歸る、虚心にして屋裏に坐す。群小兒終日、飢餓を受く、眼ありて睛を點せず、空しく獨體を鎖し破る。僧問ふ、「如何か是れ般若の體。」曰く、「蚌明月を含む。」曰く、「如何か是れ般若の用。」曰く、「兔子懷胎。」問ふ、「如何か是れ佛。」曰く、「草鞋を踏破して赤脚にして走る。」曰く、「如何か是れ佛向上の事。」曰く、「拄杖頭上に日月を挑ぐ。」問ふ、「曹溪路上に還つて俗談ありや、またなしや。」曰く、「六祖は是れ盧行者。」問ふ、「古鏡未だ磨せざる時如何。」曰く、「また只是れ箇の銅片。」曰く、「磨して後如何。」曰く、「且く收取せよ。」雪竇、師に見ゆ、問うて曰く、「不起一念云何か過あらん。」師召して竇に近前來せしむ。竇纒かに近前す、師拂子を以て幕口に打す、竇口を開かんと擬す、師又打す、竇大悟す。

贊に曰く、「舌本 瀾 翻、胸襟物なし。

滄海親しく翫月扉を生ず、香林放出す遼天の鶴。

母胎の中一則の語、鋒鋦簇々誰か肯て商量せん、金剛眼一把の砂、翳膜重々如何か洗刮せん。

荷葉蓮華後先に水を出づ、截流の機に當らず、旃檀荆棘叢林を圍繞す、無生國に活贖す。

少時門外に立つ、李四婆が來りて丙丁童を乞ふを知る、一念未生前、顯閣黎の痛く龜毛の拂を喫することを要す。

兔子懷胎蚌明月を含む、般若の體用を將て沈埋す、鯉魚棒を喫して雨盆を傾くに似たり、詔石の家財を把りて籍没す。

拄杖頭邊日月を挑ぐ、老瞿曇の々擲揄せらる、曹溪路上俗談あり、盧行者惺々 涸涸となる。

古鏡を拈出す、將に謂へり、是れ一片の頑銅放下すれば、元來卻つて是れ箇の木槽。」

雪竇明覺禪師

師は智門に嗣ぐ、諱は重顯、遂州の人、姓は李氏、初め翠峯に住し、次に雪竇に住して法道大に行はる。遂に雲門の中興と號す。舊嘗て竇を大陽に典る、客と栢樹子の話を論ず、時に韓大伯旁に

●涸涸 不分曉なり、鵠突と同じ、涸は正韻に胡骨切、涸は字書に見えず、涸の字音突なれば、同音なるべし。



倚つて匿笑す、客去る、師謂つて曰く、「汝何ぞ笑ふや。」韓曰く、「知客古今を定むる舌ありて、古今を定むる眼なきを笑ふ。」師曰く、「豈に説あるか。」對ふるに偈を以てす、曰く、「一兔身を横へて古路に當る、蒼鷹一見して便ち生擒す、後來獵犬靈驗なし、空しく枯椿の舊處に向つて尋ぬ。」師之を異とす、乃ち結んで友となす。李殿院嘗て福嚴の雅禪師を訪ふ、時に師藏主となる、李と論話の間忽ち道士と秀才に至る。李曰く、「三教の中那教か最も尊き。」師起ちて側立す。李曰く、「口あり、何ぞ道はざる。」師曰く、「夫子に對して言ひ難し。」李曰く、「休みね休みね。」と云ふて便ち起つ。師曰く、「適來造次なり。」師大龍の堅固法身の公案を頌す、問も曾て知らず、答も還つて會せず、月冷かに風高し古巖の寒槍、笑ふに堪へたり路に達道の人に逢ふて、語黙を將て對せざることを。手に白玉鞭を把つて驪珠盡く擊碎す、擊碎せずんば瓊類を増さん。國に憲章あり、三千條の罪、忠國師の無縫塔の公案を頌して、無縫塔見ること還つて難し、澄潭は許さず蒼龍の蟠ることを。屑落々影團々、千古萬古人に與へて看せしむ。自贊に。上下三指彼此七馬、拈花未だ曾て微笑せず、何ぞ也石を玉と謂ふ、器必ず分つ水虛を凌ぐ月下に非ず、知らず誰か是れ旁觀の者、重部禪者を送る。春雨膏の如く春雲鶴の如し、忽ち此へ、忽ち彼、乍ち休し乍ち作る。枯荻離々維れ風太だ遅し、幽石片片遼空亦危し。一花五葉相似す、獨運孤明還つて自知す、還つて自知す、魏を歷て梁に遊んで徒爾として爲す、晦跡自ら貽す、圖畫當年洞庭を愛す、波心七十二峯青し、如今高臥前事を思へば、添へ得たり盧公の石屏に倚るを。

贊に曰く、「隋侯照乘の珠、趙國連城の壁。

岷峨の秀を奪ふ、眉宇の精華を形はす、涇渭の流を分つ、心源の絡繹に在いて。

萬象を披剌す、蘇翰林が錦繡を擒ぶるの才を擅にす、五宗を褒貶す、魯の司寇の春秋を作るの筆に富む。

遂府の鉢盂の與に柄を安す、黃梅の半夜未だ是れの傳ならるを笑ふ、冷泉の屎概光を放つを見る、韶石の一言供する所の詣實なることを信す。

白玉鞭驪珠を擊つて瓊類を増さず、光皎々として灰よりも冷かなり、無縫塔澄潭蒼龍をすましめざることを要す、影團々漆よりも黒し。

古今を定むるの眼なし、韓太伯に蒼鷹路に當つて生擒せらる、立どころに儒釋の尊を分つ、李殿院をして老虎通身汗出でしむ。

多子塔前曾て拈花微笑せず、三指七馬何ぞ唇に掛くることを用ひん、少林雪裏初めより斷臂安心なし、五葉一花徒に指的に勢す。

翠峯に住するが好き雪竇に住するが好き、狗熱油鑊を舐る、祖師禪を説き文字禪を説く、蝸新泥の壁に篆す。飛雪一千餘丈。を噴て。瀑布と成す。と。胸襟より流出す、洞庭七十二峯を愛す石屏に和す、收めて圖籍に歸す。



高風逸韻古來今只許一人北斗泰山の如くなることを、之を仰げば彌々高く、之を望めば及ばず。  
洞山聰禪師

師は文殊の眞に嗣ぐ、諱は曉聰、韶州杜氏の子、初め文殊に見ゆ、示衆に云く、「直鉤には驪龍を釣り、曲鉤には蝦蟇蚯蚓を釣る、還つて龍ありや。」良久して云く、「勞して功なし。」乃ち省あり。師雲居に在つて燈頭と作る、僧の泗洲の大聖、近る楊州に在りて出現すと説くを見て、問を設くるあり。曰く、「即ち是れ泗洲の大聖什麼としてか卻つて楊州に向つて出現する。」師曰く、「君子財を愛す、之を取るに道あり。」後僧蓮華峰の祥庵主に舉似す、主大いに驚き、曰く、「雲門の兒孫猶ほ在り、中夜に雲居を望んで之を拜す。」上堂舉す、寒山云く、「井底に紅塵を生じ、高峰に白浪を起す、石女石兒を生ず、龜毛寸寸長ず、若し菩提を學せんと要せば、但此の模様を看よ。」良久して云く、「還つて落處を知るやまた無しや、若しまた落處を知らずんば、看よ看よ菩提僧堂に入り去ることを。」久立、僧問ふ、「達磨未だ心地の印を傳へず、釋迦未だ髻中の珠を解かず、此の時若し西來意を問はば、還つて西來意ありやまた無しや。」曰く、「六月雨淋々、其の萬姓の心を寛にす。」曰く、「恁麼ならば則ち雲は散す家々の月、春は來る處々の花。」曰く、「脚跟下金剛水際に到ることは多少ぞ。」僧無語、乃ち曰く、「祖師西來特に此の事を唱ふ、自らは是れ上座薦せず、所以に門より入る者は是れ家珍にあらず、影を認めて頭に迷ふ、豈大錯に非ずや。既に是れ祖師西來、特に此の事を唱ふ、又何ぞ必ずしも更に衆に對し

て切々たらん、珍重。」上堂、「晨鷄曉を報じて靈なり、粥後天便ち明かなり、燈籠猶ほ瞌睡、露柱卻つて惺々。」復曰く、「惺々は直に是れ惺々、歴々は直に是れ歴々、明朝後日奴を認めて郎と作すことなかれ、珍重。」示衆、「天晴れて屋を蓋卻し、閑を趣ふて禾を刈卻す、王租を輸納し了つて腹を鼓ちて自ら高歌す。」僧問ふ、「徳山門に入れば便ち棒す、猶ほ是れ模を起し様を畫く、臨濟門に入れば便ち喝す、未だ免れず、目を捏して花を生ずることを。此の二途を離れて未審、洞山如何か人の爲めにせん。」師曰く、「天晴れて久しく雨なし、近日雲の騰るあり。」曰く、「他日若し人ありて洞山の宗旨を問はば、學人をして如何か舉似せしめん。」曰く、「園蔬枯稿甚だし、水を擔つて ② 波稜に潑ぐ。」僧問ふ、「如何か是れ聲色を離るゝの句。」曰く、「南瞻部洲北鬱單越。」曰く、「恁麼ならば則ち學人恩を知りて味さざるなり。」曰く、「四大海深きこと多少ぞ。」師一日不安上堂、「衆を辭し法身を述する頌に曰く、「參禪學道茫茫たることなかれ、透法身を問へば北斗に藏る、余今 ③ 老倒厓巖甚だし、人を見て商量を得るに力なし、唯鑿頭の我が道を知るあり、松を種へて時に復た金剛に上るに。」言ひ訖つて寂す。

② 波稜。はうれん草なり、波稜草唐音如此。  
③ 疊韻にて老到切老なり。

立關を新豊洞前に立す、化機を筠陽城裏に闡む。  
文殊の鉤頭に就いて脱去して、獐龍の窟宅に入つて誰か敢て伊を保明せん、泗洲の轉語に答へて顛



頤に、雲門の兒孫と作る未だ爾を打得する暇あらず。

塵に和して古鏡を磨す、黃鶴樓前鸚鵡洲、水に入りて長人を見る、瞎驢脚下金剛際。

菩提を學んで石女兒を生ずるを見る、奴郎を辨じて燈籠の瞌睡を要す。

屋を蓋ふて官を輸し都て了辨す、歌を唱へて腹を鼓うちて恣に昇平を樂しむ、參禪學道商量することなかれ、鏝を荷ひ松を栽ゑて且つ遊戯を圖る。

身を翻して北斗に藏す、未だ是れ良謀にあらず、水を擔つて菠稜に潑ぐ、錯つて宗旨を明む。聲色を離る句、謾に云ふ北鬱單越南瞻部洲と、直饒ひ者の僧を謾じ得とも、自己を謾じ難し。

雲居舜禪師

師諱は曉舜、洞山に嗣ぐ、瑞州の人、姓は胡氏、初め洞山に參す。一日武昌に行乞して首として劉居士に謁す。士高行時の爲めに敬せらる。意の與奪する所之に従はざるはなし。師時に年少、其の飽參なることを知らず、頗る之を易る。士曰く、「老漢一問あり、若し相契はゞ則ち疏を開かん、如し契はずんば請ふ山に還れ。」遂に問ふ、「古鏡未だ磨せざる時如何。」曰く、「黒うして漆に似たり。」磨して後如何。曰く、「天を照し地を照す。」士長揖して曰く、「且く請ふ、上人山に還れと云ふて拂袖して宅に入る。師懷懼して回る、山問ふ、「師其の事を言す。」山曰く、「爾我に問へ、爾が爲めに道はん。」師前問を理す、山曰く、「此去つて漢陽遠からず。」師後語を進む、山曰く、「黃鶴樓前洲。」師省あり、師廬山の栖賢

に住す、槐斗官南康に守たり、私の忿に因つて其の衣を民にす、大覺の璉曾て師の室に入る、師の還俗を聞いて人を遣し、取つて淨因に至り、正寢を以て之に居しめ、覺は偏室に處す。仁宗數々覺を召し入内せしむ、竟に師の事を言はず、偶一日嘉王旨を取りて淨因に出で僧に飯す。覺の師の旁に侍して甚だ恭しきを見て、回つて奏す。仁宗召し、便殿に對す、之を見て歎じて曰く、「道韻奇偉眞に山林の達士なり。」扇上に於て書して曰く、「曉舜に舊に依つて僧となることを賜ふと特旨あり、再び栖賢に住す、仍つて紫衣銀鉢を賜ふ。師栖賢を退く時、二力を以て橋を昇がしむ。羅漢寺に至つて、二力曰く、「既に是れ我が院の長老にあらず、遠去すること能はず」と云ふて、橋を棄てて回る。師の再住するに暨んで、人をして先づ二夫を慰めしめて曰く、「爾當時の做得是れ但心を安せよ、必ずしも疑懼せざれ。」師入院、上堂曰く、「端なく讚せられて枉げて逆に遭ふ、半年有餘俗人と作る、今日再び歸る、三峽の寺、幾多か歡喜し、幾多か噴る。上堂舉す、「夾山道く、開市門頭に天子を識取し、百草頭上に老僧を薦取せよと。雲居は即ち然らず、婦機を搖して軋々、兒口を弄して「啗々。」師常に天衣の葛藤禪を説くことを譏る。一日懷遷化す、師法堂上に於て曰く、「且喜すらくは葛藤樁子倒し了れり。」秀圓通會中に在りて維那と作る、呵罵せらる毎に。同列に謂つて曰く、「我れ須らく者の

① 取はつれると云ふ意、とらへることには非ず、水滸四十二回、李達道這箇もや去つて取爺、那箇もや去つて取娘云々、我只有一個老娘、我要去取他來、這裡、快樂幾時也好。  
② 常御殿也、居間の便室と云ふ。  
③ 仕方尤もぢやと譯す。  
④ 音和、唐音おうおう、日本の「あわ」なり。



老漢と理會一上すべし。夜參に及んで又罵らる、秀聲を勵して衆を出で、曰く、「豈に見ずや、圓覺經の中に道ふことを。」師邊に曰く、「久立、大衆伏して惟れば珍重。」便ち方丈に歸る、秀曰く、「この老漢通身是れ眼、懷和尚を罵得せられたりと。」上堂曰く、「諸方は蛇頭を弄し、虎尾を撥し、大海に跳り、劍刃裏に身を藏すあり、雲居が者裏天寒には熱水に脚を洗ひ、夜間には襪を脱して打睡す。早朝には旋、行纏を繫ぐ。風籬を吹いて倒すれば、人夫を喚んで箆を劈きて縛起す。」上堂「唯一堅密身、一切塵中に現す、蝦蟇蚯蚓各窟穴あり、鳥鵲鳩鴿亦巢集あり、正當與麼の時甚麼人の爲めにか説法せん。良久して云く、「方は類を以て聚まり、物は群を以て分る。」上堂「雲居禪を會せず、脚を洗ふて床に上りて眠る、冬瓜は直くして備伺、瓠子は曲つて彎々。」師一日鹽官和尚の侍者を喚んで、犀牛の扇子を將て來れと云ふ因縁を舉し、拈じて曰く、「三伏當時正に扇子を須む、侍者が事を了せざるが爲めに、然れども是の如しと雖も、鹽官太だ絮なり。何ぞ大家侍者を割捨せざる、當時若し鹽官の扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還し來れと道はんを見て、便ち向つて道はん、已に植楹堆頭に麗在し了れりと。」

- ① 撥擲の撥にて、なぶりおだてる氣味なり、水滸傳に那箇の九紋龍史進は、是れ箇の大蟲なり、不レ可去撥擲他。
- ② 行纏。脚絆も、ひきの類。
- ③ 劈篋。竹をわつてそれをにする也。篋正韻竹皮也。
- ④ 不濟事と同じ、埒があかぬと譯す。
- ⑤ 紫武庫、作「緊可」從、いかうきふいと譯す、きびしくしわいの意なり。
- ⑥ 大家割捨。大家に兩義あり、一はさうんぐ也、一は大家小家と對す、大家の閑秀はれきくゝのむすめ、詩法源流の時法家數に、大家數とあるは大しんたいと云ふ意也、今ここの意なり。

贊に曰く、「艱棘の中より來る、靈明不昧。」

霽漢を凌ぐ深院の修筠、雪霜に傲る古巖の寒檜。

身は三峽の寺に歸る、五老幾多の眼をか添へん、脚鷄鷓洲に跨る、古鏡を撲して百雜碎。

婦機を搖して軋々、鬧市頭天子を識ること未だ眞ならず、兒口を弄して囁々、百草上老僧を薦め會せず。

通身是れ眼、天衣の懷が葛藤橋を倒了することを喜ぶ、平地に堆を生ず、槐都官が拵けて民衣の罪に入るることを笑ふ。

脚を洗ひ襪を脱して打睡す、初めより出格の生涯なし、人を喚んで箆を劈き籬を縛せしむ、また是れ尋常の家計。

鳥鵲の巢窠蝦蟇の窟穴、堅密の身塵中に出現す、冬瓜は備伺瓠子は曲彎、祖師禪迴かに言外に超ゆ。蛇頭を弄し虎尾を撥ふ、諸方の劍刃裏に影を露し身を藏すを聽す、破扇子撥犀牛、鹽官の糞堆頭に

團を成し塊を作すと謂ふ。  
道韻奇偉、山林達士の名を得たり、合浦珠還る、蛟盤に走つて了に瓊類なし。」

大覺禪師

國譯希叟和尚五家正宗贊



師は渤海潭に嗣ぐ、諱は懷璉、漳州陳氏の子、母僧伽を夢みて生る、因つて小字して泗州と云ふ。師は渤海潭の法席に造りて機を投じて印可、之に師とし事ふること十餘年、去つて廬山に游んで、記を圓通の訥が處に掌る。仁宗、訥を召す、訥倦んで師を奏して代らしむ。旨ありて淨因に住す、化成殿に召對し、佛法の大意を問ふ、旨に稱ふて大覺と賜ふ。後中使を遣して問うて曰く、「才去つて拂を堅つ、人立つて當り難し。師頌を以て回奏するに曰く、「節あり竹に干るに非ず、三星月宮を繞る、一人日下に居す、衆人と同じからず。」帝覽て大いに悦ぶ。又便殿に召對す、羅扇を賜ふに、元寂の頌を題して師に與ふ、問答詩頌書して以て之を賜ふ、凡十七篇至和中に山中に歸老せんと乞ふ。頌を進めて曰く、「六載皇都に祖機を唱ふ、再び曾て金殿に天威に奉ず、青山隠れ去つて忻ぶ何ぞ得ん、滿篋唯御頌を將て歸る。」帝頌を和して允さず、宣諭に曰く、「山は即ち如々の體、また將に安くに歸らんとするや、再び京國に住して且く佛法を興せよ。」師再び頌を進めて、謝して曰く、「中使宣傳して禁園を出づ、再び臣をして此の禪扉に住せしむ、青山未だ千拙を藏すことを許さず、白髮何を將てか萬機を補はん、霄露の恩輝方に湛々、林泉の情味苦だ依々、堯仁況んや是れ天の濶きが如くならんや、應に孤雲の自在に飛ぶに任すべし。」帝龍腦の鉢を賜ふ、師恩を謝了つて、鉢を捧げて曰く、「吾が法壞色の衣を以てし、瓦鐵の器を以てす、此の鉢は非法なり」と云ふて遂に之を焚く。中使回つて奏す、上加歎已ます。僧問ふ、「聖君御願親しく頼ち賜ふ、和尚何を將てか此の恩に報いん。」師手を以て地を托す、曰く、「慈

廢ならば則ち一人慶あれば兆民之に頼る。」曰く、「半尋の拄杖黃河を攪す。」開堂僧問ふ、「諸佛出世群生を利濟す、猊座師登らば何を將てか拯濟せん。」曰く、「山高く水濶し。」曰く、「花は發く無根樹、魚は跳る萬仞峰。」曰く、「新羅國裏。」曰く、「慈舟棹さず清波の上、劍峽徒に木鷄を放つに勞す。」曰く、「衣裳を脱却して荆棘に臥す。」曰く、「人は語を將て試む。」曰く、「其の便を得るに慣る。」僧掌を撫して曰く、「更に跨跳せよ。」上堂、文殊の寶劍得る者を尊しとす。乃ち拄杖を拈じて曰く、「淨因今日恁麼に直に得たり、千聖路絶ゆることを。然れども是の如しと雖も、猶ほ是れ矛盾相攻む、鋒鏑を犯さず如何か運用せん。」良久して曰く、「野蒿自ら發いて空しく水に臨む、江燕初めて歸りて人を見ず、參。」治平中に疏を上つて歸を乞ふ、頌を進めて曰く、「千簇の雲山萬壑の流、歸心終に此の峰頭に老いん、餘生願はくは無疆の壽を祝し、一炷の清香石樓に滿つ。」英宗之を留むれども可かず、詔許して自便せしむ。師江を渡つて金山に留まる。西湖四明の守育王を以て迎へ至らしむ。詔九峰、勸請の疏を作り、四明人相與に力を出して閣を建て、賜ふ所の詩頌を藏す、榜して宸奎と曰ふ、東坡杭に知たり、書を以て師に問うて曰く、「承る宸奎閣の碑を作るを要すと、謹んで以て撰し成す、衰朽廢學知らず、石に上に堪へんや否や、參。」參の說を見るに、師京を出づるとき英廟手詔を賜ふと、其の略に曰く、「性に任せて住持といふは知らず果して有りや、如し有らば切に請ふ録して全文を示せ。」此の一節を添へんと欲す、師終に藏して出さず、委順の後に逮んで篋笥に獲たり。師佛國白を以て蒙堂を造つて之に處しむ、



後世の叢林因つて法を取る、師育王に住して逸老堂を造る。

贊に曰く、「家は博桑國に近し、波斯耳に環を帯ぶ。

潭泉の匾頭と謂ふ、灼然として心毒なり、泗州の夢に入ると説く、人に謾せらるゝことなかれ。

萬象を胸中に羅ぬ、風雷陟頓、片言を舌上に吐いて、錦繡爛斑。

澄散聖の虎頭關を抜く、笑つて虎尾を收む、銀瑠使龍腦の鉢を焚く、喜び龍顔を動す。

拄杖を拈じ將て黃河を攪す、報恩分あり、衣裳を脱卻して荆棘に臥す、物を濟ふこと何ぞ慳まん。

道徳を尊んで韋布の交を忘れず、舜老夫に譲つて身正癢に居せしむ、佛法の爲めに代つて紫泥の詔

に赴く、訥圓通をして名塵寰に播さしむ。

江燕初めて歸りて人を見ず、文殊の劍鋒鉞太だ露はる、野蒿自ら發いて空しく水に臨む、千聖

の路踏斷すること應に難かるべし。

錦帳花を鋪く、蘇内翰が雄文を得て觀を宸奎閣に壯んにす、囊錐脱穎、韶九峯の一疏の爲に來つて

育王山に住す。

屋敷根の椽を縛す、大地の人をして蒙居して正を養はしむ、雲三事の

衲を披す、住山翁を學んで逸老閑に投す。

梅影に就いて肱、胡床に枕す、斫額して明月を望む、竹陰を破つて屢苦

徑を穿つ、檻に倚つて狂瀾を看る。

青は藍より出でて藍よりも青し、端的の意を窮めんと欲せば、幽鳥語綿蠻。」

天衣懷禪師

師諱は義懷、雪竇に嗣ぐ、永嘉陳氏の子、世々漁を以て業となす、母夢

みらく星屋除に隕つと、産するに及んで吉祥多し。兒稚にして父の船尾に

坐す、魚を漁し得て師に命じて貫かしむ。師忍びずして私かに江中に投す、

父怒つて笞ち詬る、甘諾して以て意に介せず。長じて京師に遊んで景德寺に依つて童行となる。天聖

中に試經得度し、金鑿の善業縣の省に調す、皆契はず、洛に由り龍門に抵り、復た都下に至る。宗風

を繼がんと欲して意に未だ決せざるあり。忽ち言法華に遇ふ、師の背を撫して曰く、「雲門臨濟にし去

れ。」東游して姑蘇に至り、明覺を翠峯に禮す。入室の次で、覺曰く、「恁麼もまた得ず、不恁麼もまた

得ず、恁麼不恁麼總に得ず。」師擬議覺打ち出す、是の如くなるもの數四、尋いで水頭となる、因に

水を汲みて擔折る、忽ち悟る、投機の偈を作る、曰く、「一二三四五六七、萬仞峯前獨足にして立ち、

驪龍領下の珠を奪得して、一言に勘破す維摩詰。」覺凡を拈つて善しと稱す。鐵佛に出世す、上堂、「譬へ

ば鴈の長空を過ぐ影寒水に沈むが如し、鴈に遺蹤の意なく水に留影の心なし、若し能く是の如くなら

ば方に異類中行を解せん、用ひず鳧を續ぎ鶴を截り、岳を夷げ壑を盈つることを。放行すれば百醜千

○事文類聚、今之交床制本自唐來、始名胡床、隋以職有胡、改名交床、古今制作原始胡床、劉劭所作改曰交床、

按、胡床交床交椅同物にして「たみしやうき」なり、字兼に俗呼坐臺爲椅子とあれば、小さき物のやうなれども、肱枕といへば其の上になれるほどの物と見ゆ、學語篇に交椅胡床交床拔步牀。穿は脚にはくことも穿と云ふ。服を著けることも穿と云ふ。



拙、收來すれば攀々拳々、之を用ふるときは則ち敢て八大龍王と富を闘はしむ、用ひざれば都て半文  
 錢に直らす參。次で、平江の薦福に住して、冲本秀夫を接す、後方丈に榜して烹金爐と曰ふ。楊無爲  
 贊するに曰く、「冲本秀夫、四碧眼胡、中間坐する者、烹金の爐。」上堂、「夫れ宗師たるものは須らく耕夫  
 の牛を驅り、飢人の食を奪ひ、賤に遇ふては即ち貴、貴に遇ふては即ち賤なるべし。耕夫の牛を驅つ  
 て他の苗稼をして豊登ならしむ、飢人の食を奪ふて他をして永く飢虚を絶せしむ、賤に遇ふては即ち  
 貴、土を握つて金と爲す、貴に遇ふては即ち賤、金を變じて土となす。老僧亦耕夫の牛を驅らず、  
 亦飢人の食を奪はず、何の謂ぞ耕夫の牛、我何ぞ用ひん、飢人の食復た何ぞ喰はん。我また土を握つ  
 て金と成さず、また金を變じて土と作さず。何ぞや金は是れ金、土は是れ土、玉は是れ玉、石は是れ  
 石、僧は是れ僧、俗は是れ俗、古今の天地、古今の日月、古今の山河、古今の人倫、然も此の如しと  
 雖も、大散關を打破して幾箇か迷ふて達磨に逢ふ。上堂、「須彌頂上金鐘を扣たす、畢鉢巖前人の聚  
 會するなし、山僧倒に佛殿に騎り諸人返に草鞋を著く、朝に檀特に遊び暮に羅浮に到る、拄杖針  
 筒自家收取せよ。」上堂、「夜來寒霜凜冽、黃河凍結して陝府の鐵牛腰折る。盡く道ふ女媧石を煉つて天  
 を補ふと、西天の一缺を爭奈せん、如今他のために補卻せんことを欲す、又恐らくは大地の人氣を出  
 す處なからんことを。且くこの一竅を留めて、大地の人に與へて氣を出さしめん、參。」僧問、「牛頭  
 未だ四祖に見えざる時如何。」曰く、「長江六月なし。」曰く、「見えて後如何。」曰く、「一年一度の春。」上

堂、「蜀魄連宵叫ぶ、圓通門大に啓く、何事ぞ雲泥を隔つ。」辭世に曰く、「紅日搏桑を照す、寒雲華嶽を  
 封す、三更鐵圍を過ぐ、驪龍の角を拶折す、瑠璃雙磎の月、分破す翡翠千峯の雲、掃開すれば乃ち天  
 衣の境なり。」

贊に曰く、「笑花の正眼、立雪の元樞。」

早に京師に往いて試經、三車に駕して自ら殼觥に鞭つ、長く翠峯に就いて聖を養ふ、九成を奏し  
 て日に鷄鳴を樂しむ。

巨口つり鉤を呑む、颺下すること知んぬ幾赤梢鯉、精金冶に躍る、不祥なるは是れ四碧眼胡。

寒水一匳清し、長空に印し鴈影を沈む、匾擔兩頭折る、驪頷を扶して明珠を奪ふ。

眼に瞳人あり、初より土を握つて金と成し耕を驅り食を奪ふにあらず、身異類に行く、又何ぞ須ひ  
 ん嶽を夷げ壑に盈ち鶴を截り鼻に續ぐぞ。

徹骨貧窮、敢て龍王と富を闘はさん、一言勘破す、豈摩詰の名模を容れんや。

人をして返に鞋を著けしむ、暮に羅浮に到つて朝に檀特に遊ぶ、僧に輕しく背を拵たる、急に明覺  
 を尋ねて遠く姑蘇に到る。

半夜霜寒し、黃河の凍を結んで陝府の鐵牛腰折る、一年春到る、牛頭を引いて四祖に見えしむ枯  
 木花敷く。



鷓鴣夜に啼き蜀魄霄に吟す、圓通門大いに肩鑰を啓く、翡翠雲を掃ひ琉璃月を分つ、天衣の境巧に畫いて圖と成る。

林を出づる師子、塊を歷る神駒。鐵圍を走過して尋ねて得ず、趙州東壁に葫蘆を掛く。

圓照本禪師

師は天衣に嗣ぐ諱は宗本、常州管氏の子、初め天衣に見ゆ、室中師に問ふ、「即心即佛の時如何。」師曰く、「殺人放火甚麼の難きことかあらん。」是に於て名顯はる。元豐の間、李漕氏復圭、師に命じて法を瑞光に開かしむ、法席日に盛なり。杭州の守陳公襄、承天、興教の二刹を以て師に命じて擇び居らしむ。蓋人之を留むること益々甚だし。又淨慈を以て堅請す。移文して道俗を諭して曰く、「師を借ること三年、此の邦の爲めに福を植ゑしむ、敢て久しく占めず」と。道俗始めて従ふ、元豐五年神宗詔を下して、相國寺の六十四院を開いて八となし禪二つ、律六つ、師を召して慧林の第一祖となす、既に至る、使を遣はして問勞す、翌日廷和殿に召對して道を問うて坐を賜ふ、師即ち跏趺す。帝問ふ、「卿受業何の寺ぞ。」奏して曰く、「承天・永安」と。帝大いに悦んで茶を賜ふ、即ち盞を舉げて長く吸ふ。又之を蕩撼す、帝其の眞なることを喜ぶ、諭すに方に禪宗を興さん、宜しく善く開導すべきを以て奏して曰く、「陛下、此の道あることを知る、日の照臨するが如し、臣豈に敢て自ら怠らんや」と云ふて、即ち辭して退く。帝之を目送す、左右に謂つて曰く、「眞の福慧の僧なり。」僧問ふ、「如何か是れ祖師西來意。」曰く、「韓信朝に臨む底。」曰く、「中下の流如何が領會せん。」曰く、「伏屍萬里。」曰く、「早く今日の事あるを知らば、悔ゆらくは當初を慎まざることを。」曰く、「三皇塚上草離々。」上堂、頭圓なるは天に像り、足方なるは地に似たり、古貌稜層丈夫の意氣、須彌を趨倒し、海水を踏翻す、帝釋と龍王と身を著る處なし。乃ち拄杖を拈じて曰く、「卻つて拄杖上に来つて廻避す、咄。任ひ汝神通變化するも究竟して須らく者裏に歸すべし。」卓拄杖一下、元祐元年老を以て歸を求む旨を得て任便、州郡に雲游す、抑へて住持せしむることを得ず。鼓を撃つて衆を辭して曰く、「本是れ無家の客、那ぞ任便して遊ぶに堪へん。順風に櫓棹を加へ、船子揚州に下る。」既に都城を出づ、王公大臣送る者車騎相屬す。師別に臨んで之に誨へて曰く、「歲月把翫すべからず、老病人の爲めに期せず、唯勤修して怠ること勿れ、是れ眞相の爲るなり。」聞くもの流涕せざるはなし、其の眞慈善導、人を感せしむること此の如し、晩に蘇の靈巖に居して示寂す、後門弟子全身を寺の左に塔す。

贊に曰く、「眞の福慧の僧、丈夫の氣を稟く。」

烏藤に倚つて古貌稜々、清談を發して春風塵々。

南泉不疑の地に到る、樊噲鴻門を蹈む、少室濫觴の源を窮む、韓信朝に臨む底。

大海を踏翻す、龍王の宅を他方に改むるに聽す、須彌を踢倒す、帝釋をして身を容るるに地なからしむ。



圓照堂前光皎々、祖師の心を揭示す、三皇塚上草離々、東君の意を漏洩す。

一機を垂れて人に活路を指す、大用雷奔、三年を借つて福を此の邦に植う、惡聲鼎沸す。

一錫晩に林下に歸る、輦寺心なし斷雲を宿せしむるに、七絃高く壁間に掛く、琴臺月あり秋水に翻へる。

即心即佛、殺人放火、甚麼の難きあらん、船子揚州に下るに到つて、甚麼に因つてか人を感じて流涕せしむ。」

圓通秀禪師

師は天衣に嗣ぐ、諱は法秀、秦州の人、俗姓は辛、母、老僧宿を投すと夢みて乃ち娠むあり。是より先き麥積山に老僧あり、應乾寺の魯和尚と善し、毎に魯に従ふて游方せんと欲す、魯之を老として既に去る、乃ち曰く、「他日當に我を竹鋪坡の前に尋ぬべし。」俄に兒あり、其の所に生ず、往いて觀れば兒一笑をなす。三歳にして魯に隨ふて歸らんことを願ふ。十九にして試經得度、志を講肆に勵ます。圓覺華嚴を習ふ、妙に精義に入る、無爲の鐵佛の懷禪師法席盛なりと聞いて、徑ちに往いて參禮す。懷問ふ、「座主甚麼の經を講す。」曰く、「華嚴。」曰く、「華嚴何を以てか宗とする。」曰く、「法界を宗とす。」曰く、「法界何を以てか宗とする。」曰く、「心を以て宗とす。」曰く、「心何を以て宗となす。」師語なし、懷曰く、「毫釐も差あれば天地懸隔す、汝當に自ら看るべし、必ず發明あらん。」後「僧の白兆報慈

に問うて云く、「情生すれば智隔たり、想變すれば體殊なり、情未だ生ぜざる時如何。」慈云く、「隔」といふことを擧するを聞いて忽ち悟る。直に方丈に到つて所證を陳す。懷曰く、「汝は眞の法器なり、吾宗異日汝に在つて行はれん。」師服勤すること八年、懷推して導首となし、四面に出世し、後本山に住す。上堂、「少林九年冷坐卻つて神光に觀破せらる。如今玉石分ち難し、只麻纏紙裹することを得たり、還つて會すや、我を笑ふ者は多く、我を哂る者は少し。」示衆、「山僧解説を會せず、大都箇の時節に應ず、相喚んで椀湯茶を喫せしむ。亦祖師の妙訣なし。禪人若しまた未だ相諍んせずんば、秤鎚を踏著すれば硬くして鐵に似たり。」上堂、「寒雨細く朔風高し、砂を吹き石を走らしめ、木を抜き條を鳴す、諸人盡く有ることを知る、且く道へ風何の色をか作す。若し識得し去らば爾に許す眼を具すること。若しまた識らずんば怪しむことなけれ相謾することを。」僧問ふ、「生死を離れずして涅槃を得たり、魔界を出でずして佛界に入る。」師曰く、「赤土牛欄を塗る。」曰く、「師の答話を謝す。」曰く、「爾が話頭什麼と道ふぞ。」僧擬議す、師便ち喝す、師の嚴冷なり叢林號して鐵面となす。李伯時馬を畫いて神に入る、師勸めて曰く、「當に馬腹の中に入ることと思ふべし。」李省あり、因つて改めて觀音を畫かすむ、李之に従ふ。山谷好んで艶詞を作る、人争ふて之を傳ふ、師之を呵す、谷笑ふて曰く、「又當に我を馬腹の中に置くべきか。」師曰く、「公艶詞を作つて以て人心を蕩かす、止だ馬腹のみならず、正に恐らくは泥犁の中に生せんのみ。」谷驚愕して乃ち止む。



贊に曰く、「羈束なし、何ぞイテたる。」

麥積山夢裏に身を翻へす、竹鋪坡笑中に毒を含む。

頂門眼正し、天地を等しうして浮漚の如くす、魏闕心に遊ぶ、江湖を以て桎梏と爲す。

報慈の情生すれば智隔たることを悟る、冷汗通身、華嚴の法界心宗を指す、狂花目を眩ます。

玄中に自得す、幾星沙か善く玉連環を解す、妙處不傳、一蟻絲巧に珠の九曲を穿つ。

赤土牛爛を塗る、佛魔に入つて命懸絲のごとし、生鐵面皮を裏む、龍

蛇を辨つ機鏃を嚙むが如し。

金鎚影動いて掌上に輪し、圭角稜々、寶劍光寒うして眉間に挂く、鋒

鋒簇々。

神駒を畫き妙處を得て馬腹に入る、李龍眠を喚び醒す、艶詞を作つて

人を惑亂し泥犁に陥る、黃山谷を霍殺す。

天衣紅爐の裏に烹らる、未だ金鎗を辨せず、少林深雪の中に坐す、石玉を分ち難し。

巧説會せず、時節に應ず、椀湯茶を喫すること又何ぞ曾てせん、雨砂を吹くことを解し、風能く木を

抜く。

大通本禪師

師諱は善本、圓照に嗣ぐ、穎人董仲舒の後、弱冠にして博く群書を極む、仕官の意なし。京師に往

いて試經得度、圓照に瑞光に參じて旨を悟り、雙林に出世す。次に淨慈に住す、神考其の名を聞いて

詔あり、上都の慧林に住せしめ、大通の號を賜ふ。上堂曰く、「上天を見ず下地を見ず、虚空に逼塞

して廻避するに處なし、君が爲めに明破するに即ち中らず、且く南山に向つて鰐鼻を見る。」拄杖を擲

ちて下座、僧問ふ、「寶塔元縫なし、如何か人に指示せん。」曰く、「烟霞背面に生ず、星月簷楹を繞る。」

曰く、「如何か是れ塔中の人。」曰く、「日竟知らず清世の事、終年坐斷す白

雲の郷。」曰く、「向上に更に事ありやまたなしや。」曰く、「太無厭生。」上

堂、僧問ふ、「若し此の事を論せば譬へば兩家の碁を著くるが如し、學人上

來請ふ師一著。」曰く、「早く輸け了れり。」曰く、「錯。」曰く、「是。」曰く、「近前

するに路なし。」師拄杖を卓して一下して曰く、「者箇を奈何せん。」曰く、「只

黑白未分の時の如きんば又作麼生。」曰く、「且く一著を饒す。」僧問ふ、「百尺

の竿頭如何か歩を進めん。」曰く、「嶮。」曰く、「便ち恁麼に去る又作麼生。」曰く、「百雜碎。」僧問ふ、「九夏

賞勞は即ち問はず、今より向去の事如何。」曰く、「光剃頭淨洗鉢。」曰く、「師の指示を謝す。」曰く、「滴

水も消し難し。」

贊に曰く、「諸縁を併息し、單に自己を明む。」

① 光はさつぱりと譯す、さつぱりと焼き拂ふたと云ふを焼得光地など云ふ。ばくちなどにさつぱりきれいにまけたと云ふを輪得清光などと云ふ、坊主あたまを光頭・光腦袋と云ふ。

② 霍殺。霍嚇音通、驚懼の義、希叟廣錄、維石號頌、等閑擊著火星迸、霍得大唐人、眼開同上開善語、無文和尚計至、上堂、東湖瀉恨浪滔天、驚懼瑞巖殘夢醒、霍懼同義に用ふ。



面を仰いで天を見ず、頭を低れて地を見ず。

優かに聖域に入る、雲門胡餅の機を透る、博く羣經を綜ぶ、仲舒絳帷の志を抱く。

烟霞背面に生じ、無縫塔勉強名模す、黑白未分の時、一局の碁顛頂に指示す。

百尺竿頭輕しく歩を進む、懸崖よりも峻し、九夏堂中の光剃頭、滴水も消し難し。

直鉤香餌あり、滄海に入りて金鰲を釣る、兩眼腫人なし、南山に向つて鰲鼻を見る。

竟日知らず清世の事、獨體の識未だ全く灰せず、長年坐斷す白雲の郷、聖凡の心猶ほ欠洗す。

碧梧陰合す、慧林祥鳳の巢を穩かにす、白雨聲喧し、南岩老龍の臂を奮ふ。

沒巴鼻の處、八稜の槌を抛出し、虛空に逼塞す、大地の人をして廻避に處なし。

雪峯慧禪師

師諱は思慧、大通に嗣ぐ、錢塘の人、俞氏の子、上堂、「大教の綱を布いて人天の魚を擲す。護聖、老胡の拖泥帶水するに似ず、只是れ兔を見て鷹を放ち、鷹に遇ふて箭を發す。」乃ち高聲に大眾を召して曰く、「中れり。」上堂、「昔日藥山早晚參せず、動もすれば旬月を経。一日大眾纔かに集る、山便ち方丈に歸る。諸禪德彼の時佛法早く自ら淡薄なり、論じ來れば猶ほ些子に較れり。如今毎日鐘を鳴して陸堂、切々怛々地、問ふ者は口、紡車に似たり、答ふる者舌霹靂の如し、總に今日に似たらば、靈山の慧命殆んど懸絲の如し、少室の家風危くして

の紡車。糸をつむぐ車也。

累卵の如し。又安んぞ箇の慨然として宗乘を扶堅するに志ある底の褙子を得ん。出で來りて大眾を喝散せよ、唯耳邊靜辨のみに非ず、當に正法をして久住せしむべし、豈に偉ならざらんや。如し或は捧げ上ぐれども龍と成らず、山僧倒に此の令を行はん、拄杖を以て一時に趁散す。上堂、「南の方諸友を詢ねて草鞋を踏破す、絶學無爲、坐ながら日月を消す。凡情脱し易く聖解忘じ難し、但纖毫あれば皆滲漏と成る。可の中爲めに道ふ、地の山を擎ぐるに似たり、物に應じて形を現す、驢の井を戯るが如し。縦ひ計較なきも途轍已に成る。若し相應を論せば轉た沒交涉、勉めよや、諸仁者錯つて用心することなかれ、各自に歸堂更に何事をか求めん。」上堂、「一法若し通すれば萬縁方に透る。」拄杖を拈じて曰く、「者裏に悟了せば拄杖を提げ海に横行せよ、若し雲居山頭に到らば、我が爲めに雪峯和尚に傳語せよ、咄。」上堂、「一切法差ふことなし、雲門の胡餅、趙州の茶、黃鶴樓前玉笛を吹く、江城五月落梅花、慚愧す太原の孚上座、五更に畫角を聞いて天曉に琵琶を弄す。」喝一喝。僧問ふ、「古殿燈なき時如何。」曰く、「東壁西壁を打す。」上堂云く、「眼睫横に十方に亘り、眉毛上青天に透り下黄泉に徹す、且く道へ、鼻孔什麼の處にか在る。」良久して云く、「割。」

贊に曰く、「雲門八世の孫、巨いに門牆を把りて闢く。

一機を垂る平地上の波濤、一境を示す嶮崖中の妙密。

龍を羅し鳳を打す、藕絲網密に縵天に布く、兔を獵り麀を射る、蒿枝箭硬く的に中らしむ。



口紡車に似て舌霹靂の如し、雪峯門下窖を掘つて深く埋む、身累卵の如く命懸絲の如し、靈鷲山前に胸を槌ちて屈と叫ぶ。

無爲を學んで坐ながら日月を消す、水を渡つて魚蹤を覓む、諸友に詢つて草鞋を踏破す、山を過ぎて蟻跡を尋ぬ。

萬縁未だ透らず、徒らに拄杖を拈じて海上に横行するに勞す、一法差ふことなし、且く落梅花江城に狼藉なるを聴く。

嵩山滿庭雪に立つことを笑ふ、小魚大魚を呑む、破院に住して古殿燈なし、東壁西壁を打す。

聖解凡情纖毫を絶して滲漏なし、途轍の上轉た岐の分るを見る、眉毛眼睫十方に亘り青天に透る、鼻孔の中元氣の出づることなし。

徹骨風流、人の企て及ぶなし。

錢塘江上に琵琶を弄し、黃鶴樓前に玉笛を吹く、千峰萬峰寒碧を鎖す。

月堂昌禪師

師は雪峯の慧に嗣ぐ、諱は道昌、寶溪吳氏の子、上堂に云く、「未だ祖師の關を透らざれば千難と萬難と、既に祖師の關を透れば千難と萬難と、未だ透らざる時の難は則ち且く置く、既に透り了る、甚に因つてか卻つて難き、箴籬を放下して價を得と雖も、他に杓柄を動かすことまた端なし。」上堂に云

く、「我と相似て我と共に縁なし、藥銚を打翻して爐烟を傾き出し、還丹一粒分明に在り、人間に流落す是れ幾年ぞ。」師、玉几冷泉に住して南山に塔す、真歇和尚徑山に住する時、寶溪に行化す。師の家の中に到つて乃母を見る、歌手を以て其の腹を摸る、人之を訝る。歌曰く、「我れ重ねて婆子者裏に一員の古佛を出さん。」

贊に曰く、「寶溪の寶、常の寶に非ず。

鯨水を呑んで珊瑚枝を露出す、龍淵に躍つて驪珠の顆を打出す。

眞臘を辨じて、晴波斯に撞著す、重輕を較べて、迷ふて胡達磨に逢ふ。

玉几に鋪陳す瞿曇の舍利、寂々として聞くことなし、冷泉に抛擲す靈鷲山王、忙々として尋討す。

祖師關寒光射透す、箴籬杓柄脱體現成することを見はす、大還丹冷燄一揮す、藥銚爐烟を把りて情を盡して傾倒す。

場に當つて價を定む、隋侯照乘を壓して分文に直らず、積に韞めて諸を藏したり、趙國連城の甘じて死貨となるを笑ふ。

老娘肚裏他人の捫摸することを苦しむ、古佛の放光に同じきことを愛す、無星の秤子の銖兩の分明なることを等しうす、先師に謔了せられず、白玉

①等銖兩分明等は輕重を稱すと  
謂す、はかるなり、故にはかり  
秤子秤子と云ふ。



鞭擊碎して覓むるに蹤なし、千古萬古南宕山前草離々日杲々たるに聽す。  
雲門此に至つて九世共に一十四人

澆 仰 宗

澆山大圓禪師

師諱は靈祐、百丈に嗣ぐ、福州趙氏の子、初め百丈に參す、侍立する次で、夜深けぬ、丈曰く、「看よ爐中に火ありや否や。」師之を撥つて曰く、「なし。」丈身を起して深く撥つて少火を得、擧げて之に示して曰く、「汝無しと道ふ、者箇。」師大悟、禮謝して所見を陳す。丈曰く、「此は暫時の跂路のみ、經に云く、『佛性の義を識らんと欲せば、常に時節因縁を觀すべし、時節既に至りぬれば迷ふて忽ち悟るが如く、忘じて忽ち憶ふが如し、方に己物の他より得ざることを省む。』故に祖師云く、『悟了未悟に同じ、無心亦無法。』只是れ虛妄凡聖等の心なければ、本來の心法元より自ら具足す。汝今既に爾り、善く自ら護持せよ。」師茶を摘む次で、仰山に謂つて曰く、「終日茶を摘む、只子が聲を聞いて子が形を見ず。」仰、茶樹を撼す、師曰く、「子只其の用を得て其の體を得ず。」師曰く、「子に三十棒を放す。」し、和尚如何。」師良久す、仰曰く、「和尚只其の體を得て其の用を得ず。」師曰く、「子に三十棒を放す。」

目、亦靈に作る、正字通に音、爾、梵書に靈は語の助と爲す、禪錄の何故靈云、未見桃花時、靈皆語餘聲とあり、按するに、多く疑の辭にて、なんぢや、どうぢやと問ひかける處に用ゆ、俗語に呢の字を疑の辭に用ゆ、平上のちがひあれども、畫少き字を借り用ひたる者か、噲も同じこと也。



雲嵩來る、師問ふ、「聞く汝久しく藥山に在りと、是なりや否や。」嵩云く、「是。」師曰く、「如何か是れ藥山大人の相。」嵩曰く、「涅槃後有。」師曰く、「如何か是れ涅槃後有。」嵩曰く、「水洒げども著けず。」嵩卻つて師に問ふ、「百丈大人の相如何。」師曰く、「魏々堂々、煒々煌々、聲前聲に非ず、色後色に非ず、蚊子銕牛に上る、爾が背を下す處なし。」劉鐵磨來る、師曰く、「老特牛、汝來る也。」磨曰く、「來る。」曰く、「臺山に大會齋あり、和尚還つて去るや。」師乃ち身を放つて臥す勢を作す、磨便ち出で去る。師睡る次で仰山の來るを見て、便ち面壁す。仰曰く、「和尚何ぞ此の如きを得る。」師起きて曰く、「我が適來一夢を得たり、爾試みに我が爲めに原せよ看ん。」仰一盆の水を度す、師便ち面を洗ふ。少頃あつて香嚴至る、師曰く、「我適來一夢を得たり、寂子我が爲めに原せ了れり、汝更に爲めに原せ看ん。」嚴一盞の茶を點じ來る。師曰く、「二子の神通驚子に過ぎたり。」師壁に泥る次で、李軍容、公裳を具し、師の背後に至つて笏を端しうして立つ、師首を回し見て、便ち泥盤を側てて泥を接する勢を作す、李笏を轉じて泥を進むる勢を作す。師泥盤を抛つて同じく方丈に歸る。僧問ふ、「瀉山一頂の笠を作らずんば、莫窠村に到ることを得るに由なし如何か是れ瀉山一頂の笠。」師喚んで曰く、「近前來。」僧近前す、師一踏を與ふ。上堂、「老僧百年の後、山下檀越の家に向つて一頭の水牯牛と作り、左脅に五字を書し曰はん。『瀉山僧某甲』と。恁麼の時に當つて喚んで瀉山僧と作さば、又是れ水牯牛、喚んで水牯牛と作さば、又是れ瀉山僧、畢竟喚んで什麼と作さん。」仰作禮して退く。仰山夏末、師に問訊す、師曰く、「子

一夏上來するを見ず、下面に在りて何の所務をか作す。」曰く、「某甲下面に在つて一片の畚を鋤き得て、一籠の粟を得たり。」師曰く、「子今夏虚しく過さす。」仰卻つて師に問ふ、「和尚一夏箇の甚麼をか作し得たる。」師曰く、「日中一食、夜後一寢。」仰曰く、「和尚今夏亦虚しく過さす。」道ひ了つて乃ち舌を吐く。師曰く、「寂子何ぞ自ら己命を傷ふことを得たる。」

贊に曰く、「蠱毒の家、胡種を滅す。」

心に半點の淳なし、肉に千斤の重きあり。

大雄に火を挾まれて、眼睛を活換す、寂子を引き茶を撼さしめて、全く體用を彰はす。

身を轉じて猶ほ會せず、徒然として軍容か泥を進むるを要す、瞋睡幾くか曾て醒めん、倔強香

嚴をして夢を原せしむ。

畚を鋤く兒一籠の粟を下し得たり、九旬上來を見ざるを怪しむ、笠を做る僧行いて莫窠村に到る、

一踏を喫して皇恐するに勝へず。

名を脅左に書す、誰か是れ大瀉僧にあらずと云はん、身を放ち臥す時、我疑はくは去つて臺山の

供を捉るか。

先師大人の相、衆皆煒々煌々たることを知る、本色の住山翁、初めより備々侗侗に在らず。別に玄風を立し化機を聞く、古路斷碑横ふと雖も、惜むらくは未だ斯文の正統を紀せず。」



仰山知通禪師

師諱は慧寂、瀉山に嗣ぐ、韶州葉氏の子、師親を辭して游方の日、之に戯むる者あり、師の扇上に於て題して曰く、「寂子去つて行脚せば、諸魔誰か滅せしむ。」師續いで曰く、「龍、蛇腹の中に生ず、他の十箇月を借る。」人皆之を異とす。蓋し師は屠門より出づ、諸魔或は猪毛と曰ふ。初め耽源に參じて已に玄旨を悟る。源、師に謂つて曰く、「國師當時六代祖師の圓相、共に九十七箇を傳へ得て、老僧に授與して曰く、「吾滅して三十年、南方に一の沙彌あり、到り來つて大いに此の教を興さん、次第に傳授し、斷絶せしむることなかれ」と、我れ今汝に付す、汝當に奉持すべし。」遂に本を將て師に付す。師一覽して便ち火卻す。源、一日師に問ふ、「前來の諸相甚だ宜しく秘惜すべし。」曰く、「當時看了つて便ち燒卻す。」源曰く、「吾此の法門、人の能く會するなし、唯先師及び諸祖諸大聖人方に委悉すべし。子何ぞ之を燒くことを得たる。」師曰く、「某甲一覽して便ち其の意を知る、但用ひ得ば本を執すべからざるなり。」源曰く、「然も此の如しと雖も子に於ては即ち得たり、後人之を信じ及ばし。」師曰く、「和尚若し要せば重ねて録すること難からず。」即ち重ねて一本を集めて上呈す、且つ遺失なし。源曰く、「然り。」師、瀉山に參する次で、師問ふ、「如何か是れ眞佛の住所。」瀉曰く、「無思の妙を以て靈燄の無窮を返思す、思盡きて源に還る、性相常住事理不二にして、眞佛如々たり。」師大悟す、此より執侍すること十五年、師直歳と爲り、作務して歸る、瀉問ふ、「甚の處より來る。」師曰く、「田中より來る。」瀉曰く、「田中多少の人ぞ。」師鉢を挿んで叉手して立つ、瀉曰く、「今日南山に大いに人の茅を刈るあり。」師鉢を抜いて便ち行く。一日瀉に隨つて游山す、磐石の上に到りて坐す、師侍立す、忽ち鴉一紅柿を銜んで面前に落在す、瀉拾ひ得て師に與ふ、師接して洗ひ了つて瀉に度與す、瀉云く、「子甚處にか得來る。」師曰く、「此は是れ和尚道德の感する所。」瀉曰く、「子もまた分なきことを得ず。」即ち半を分ちて師に與ふ、瀉師に問ふ、「忽ち人あり、汝に問はば作麼生か祇對せん。」師曰く、「東寺師叔若し在らば、某甲寂寥を致さじ。」瀉曰く、「汝に一箇の祇對せざる罪を放す。」師曰く、「生と殺と只一言に在り。」瀉曰く、「汝が見に孤かす、別に一人の肯はざるあり。」師曰く、「阿誰ぞ。」瀉露柱を指して云く、「者箇。」師曰く、「什麼と道ふぞ。」瀉亦曰く、「什麼と道ふぞ。」師曰く、「白鼠推し遷て、銀臺變せず。」師夢に彌勒の内院に入る。堂中の諸位皆足る、惟第二座空す、師就いて坐す。一尊者あり、白槌して曰く、「今當第二座說法せよ。」師起つて白槌して曰く、「摩訶衍の法は四句を離れ、百非を絶す、諦聽々々。」衆皆散じ去る、覺むるに及んで瀉に舉似す、瀉曰く、「子已に聖位に入る。」師便ち禮拜す、香嚴發明の偈あり、瀉聞き得て曰く、「此の子徹せり。」師曰く、「此は是れ心機意識著述し得て成る、某甲が親しく自ら勘過せんことを待て。」師後に嚴に問ふ、「和尚の師弟發明の頌を贊するを見る、爾試みに舉せよ、看ん。」嚴乃ち舉す、師曰く、「此は是れ宿習より記持して來る。若し正悟あらば別に更に説け看ん。」嚴又去年の貧は未だ是れ貧ならざる語を舉す。師は曰く、「如來禪は吾弟の會するを許す、祖師

國譯希叟和尚五家正宗贊



禪は未だ夢にも見ざること有り。嚴又曰く「我に一機あり、瞬目して伊を視る、若し人會せずんば別に沙彌を喚ばん。師、瀉に報じて曰く「且喜すらくは閑師弟、祖師禪を會せるなり。」南塔の湧、臨濟に謁す、後歸りて師に侍す、師曰く「汝來つて什麼をか作す。」湧曰く「和尚に禮觀す。」師曰く「還つて和尚を見るや。」湧曰く「見る。」師曰く「和尚何ぞ驢に似かん。」湧曰く「某甲和尚を見る、亦佛に似かす。」師曰く「若し佛に似かすんば箇の什麼にか似る。」湧曰く「若し似たる所あらば驢と何ぞ別ならん。」師大いに驚いて曰く「凡聖兩つながら忘す、情盡きて體露はる、吾此を以て人を驗すること已に二十年、決了の者なし、子之を保任せよ。」師毎に指して人に謂つて曰く「此の子は肉身の佛なり。」

① 閩人兒を呼んで、田と云ふ。  
 ② 嚇。呼格切、唐音ホ、人をびつくりさせるなり、くらがりなどにて人をおどす聲なり、莊子秋水篇に出づ。

贊に曰く「鎮海の珠、毒龍の団。」

十月蛇腹を借つて出生す、一顆蛟盤に落ちて圓轉たり。

近前叉手、向上の機鋒を單傳す、思ひ盡きて源に還る、無窮の靈燭を撈出す。

兜卒第二座の説法、白槌の處、嚇し得て魂飛ぶ、南山大いに人の芽を刈るあり、鋏を抜き去る何ぞ曾て夢にも見ん。

道德の感する所、烏鴉柿を銜む磐石坐して分つ、生殺言に在り、白鼠推し遷りて銀臺變せず。

諸の圓相を焚卻す、耽源をして尊懷を懊惱せしむ、小釋迦を遇著す、胡僧に當面に塗糊せらる。

沙彌を喚んで香嚴の祖師禪を會得することを印す、何似驢南塔を引いて吹毛の劍を拔出す。人の憎みを得る處、只他家の父子知ることを許す、然も萬古の微猷縱ひ佛手も亦掩ひ難し。」

南塔湧禪師

師諱は光湧、仰山に嗣ぐ、豐城の人、章氏の子、母乳せし夕、神光室を照して厩馬皆驚く、因つて光湧を以て之に名く。少うして俊敏なり、仰山に依りて剃度し、大事を發明す。僧問ふ「文殊は是れ七佛の師、文殊に還つて師ありや否や。」師曰く「縁に遇へば即ち有り。」曰く「如何か文殊の師。」師拂子を豎起す、僧曰く「只是れ便ち是なることなしや。」師拂子を放下す、問ふ「如何が是れ妙用の一句。」師曰く「水到れば渠成る。」問ふ「真佛何れの處にか住在す。」師曰く「言下無相ならばまた別處に在らじ。」清化の付參する次で、問ふ「何れよりしてか來る。」曰く「鄂州。」曰く「鄂州の使君は名は何ぞ。」曰く「化下敢て相觸れず。」曰く「此の地には通じて畏れず。」曰く「大丈夫何ぞ必ず相試みん。」師賑然として笑ふ、遂に印可す、集雲峯下の大禪佛、傳燈に具に載す。

贊に曰く「光乳室に騰る、劍豐城に隠る。」

電空に翻つて淵龍蟄を起す、駒地に墮ちて厩馬群驚く。

臨濟に謁して生死猶ほ昨夢の如し、仰山に見えて凡聖兩つながら情を忘す。

忽爾として大いに驚く、人前に指して肉身佛と謂ふを怪しむ、賑然として笑ふ、知る化下敢て使君



の名に觸れんや。

獨露眞常、雲收つて月現す、全く體用を彰す、水到れば渠成る。

南塔影の中文殊師、錯つて拂子を豎つ、集雲峯下の大禪佛、悞つて師兄と喚ぶ。

一再次東平の鏡を覽る、塵埃面に滿つ、二十年人を驗する眼、歡睛晴なきことを笑ふ。

言下無相則ち固是れ別處に在らず、然れども眞佛の所住、伎倆を窮め、底に到りて明め難し。」

芭蕉清禪師

師諱は慧清、南塔に嗣ぐ、新羅の人なり。師、衆に謂つて曰く、「我十八上、仰山に到り南塔に見ゆ。上堂曰く、『汝等諸人若し是れ箇の漢ならば娘肚裏より屙出し來つて、便ち師子吼を作して好なることを解すや。』我れ言下に於て身心を歇得す、便ち住すること五載。示衆に云く、『爾に拄杖子あらば我れ爾に拄杖子を與へん。爾に拄杖子なくんば我れ爾か拄杖子を奪卻せん。』僧問ふ、『如何か是れ提婆宗。』師曰く、『赤幡左に在り。』問ふ、『如何か是れ達磨西來意。』師曰く、『獨り自ら、恣として暗に江を渡る。』問ふ、『賊來らば須らく打つべし。』客來らば須らく看るべし、忽ち客賊俱に來るに遇はん時如何。師曰く、『屋裏緋破草鞋あり、還つて受用するに堪へんやまたなしや。』師曰く、『汝若し將ち去らば前凶後不吉。』上堂、『人の行く次で、忽ち前面は萬丈の懸崖、背後は野火來り逼め、兩畔は荆棘林な

②さびしき貌なり。水滸傳第五回、我無妻時、猶問下也、爾無夫時、好孤恚ならん。

③看待の看あしらふなり。

るに遇ふが如きんば、若し向前するときは則ち坑に墮ち墜に落つ、若し退後するときは則ち野火身を燒く、若し轉側せば又荆棘林に碍へられん。恁麼の時に當つて作麼生か免れ得ん。若しまた免れ得ば出身の路あるべし。若しまた免れ得ずんば身を死漢に墮せん。僧問ふ、『二頭三首をば問はず、請ふ師本來の面目を直指せよ。』師默然として正坐す。問ふ、『如何か是れ吹毛の劔。』曰く、『進前三步。』曰く、『用ふる者如何。』曰く、『退後三步。』問ふ、『北斗裏に身を藏す時如何。』曰く、『九九八十一。』曰く、『會すや。』曰く、『不會。』曰く、『一二三四五。』問ふ、『古佛未だ出興せざる時如何。』曰く、『千年の茄子根。』曰く、『出興して後如何。』曰く、『金剛の努眼睛。』承天の確、師の會下に在りて發明す、後僧問ふ、衆罪は霜露の如し、慧日能く消除する時如何。確曰く、『庭臺深夜の雨、樓閣靜時の鐘。』曰く、『什麼としてか因縁會遇する時果報還つて自ら受く。』確曰く、『管筆書を能くし、片舌語を解す。』

贊に曰く、『脚頭未だ船舷に跨らざるに、大唐の諸祖に參徧す。』

提婆宗を豎て外道の赤幡を奪ひて回る、西來意に答へて達磨を貶し江を渡り去らしむ。

拄杖子一生與奪、未だ嘗て玉麒麟を敲き出さず、娘肚裏十月出生、幾か會て吼えて金師子と作る。

前凶後不吉、破草鞋受用の時を得難し、退けば火進めば深坑、荆棘林

那ぞ出身の路あらん。

新羅の人語を辨じ難し、當的帝都丁、北斗裏穩かに身を藏す、一一二二

④皆舌音なり、たんでいていとわていん、唐音、日本人が唐人辭をちんぶんかんくと云ふに同じ意なり。



四五。

兩口一無舌、臨溪の石鎖を打開して兩頭搖くことを看る、雜毒深く心に入る、承天の庭臺深夜の雨を吐出することを致す。

默然正坐、本來の面二頭に在らず、用ふる者如何、吹毛の劍豈に三步に拘らんや。

青は藍より出で藍より青し、信に瀉仰の兒孫鸞翔り鳳舞ふ。

芭蕉徹禪師

師諱は繼徹、芭蕉の清に嗣ぐ、廣西の人也、初め風穴に謁す、穴問ふ、「如何か是れ正法眼。」曰く、「泥彈子。」穴之を異とす、後芭蕉に參す、上堂に云へるあり、<sup>①</sup>「兩口一無舌、即是吾宗旨」と云ふを見るに豁然として大悟す。僧問ふ、「如何か是れ深々の處。」曰く、「石人石戸を開く、石鎖兩頭搖く。」問ふ、「如何か是れ臨溪の境。」曰く、「山あり、水あり。」問ふ、「寂々無依の時如何。」曰く、「未だ是れ衲僧分上の事にあらず。」曰く、「如何か是れ衲僧分上の事。」曰く、「行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。」問ふ、「一人あり、生死を捨てず、涅槃を證せず、師還つて提携するや否や。」曰く、「提携せず。」曰く、「什麼としてか提携せざる。」曰く、「臨溪粗ば好悪を識る。」示衆に曰く、「昔日如來波羅奈國に於て梵王請じて法輪を轉す、如來已まざるのみ、宗風を屈するあり、機に隨つて教を逗す。遂に三乘の名字あり、天上人間に流轉す、今に至るまで光揚墜さず。若し祖宗門下に據らば天地懸に殊なり。上上の根機頓超異ならず、作麼生か是れ混融の一句、還つて人の道ひ得るありや、若しまた道ひ得ば參學の眼あり。若し道ひ得ずんば天寬く地窄し。」示衆、「眼中に翳なければ空裏に花なし、水長せば船高く、泥多ければ佛大なり。問を將ち來ることなければ我また答なし、會すや、問は答處に在り、答は問處に在り。」偈に云く、「芭蕉の的旨、唇齒に掛けず、木童唱和すれば石女耳を側つ。」

①碧嵩四、廿六、兩口無一舌。

閑行坐自ら誇張せんことを要す、好悪を識る人信不及。

泥彈子正法眼と作る、豈に知らんや老風穴の綿に羨藜を裹むことを。茄子根古佛の機に應ず、先芭蕉の錦に特石を包むことを學ばず。

混融の句地窄く天寬し、臨溪の境山深く水碧し、衲僧の涅槃生死を問ふに遇ふ、提携せんと要せば且く驢年を待て、瞿曇の頓漸偏圓を説くことを斥ふ、宗風を屈せば卒に了日なけん。

西來意、貼肉衫の汗千重に透る、宗門の事、腳跟下泥深きこと三尺。木童唱和すれば石人耳を側つ、潑宗旨誰か肯て唇に挂けん、眼中に翳沒れば空裏に花なし、閑言語拈出するに勞せず。

人皆謂ふ、瀉山五世にして師に到つて寂爾として傳ふることなしと、殊に知らず、萬仞の門牆登ら



んと擬する者は、銀山鐵壁。」

瀉仰宗此に至つて五世。

法眼宗

清涼法眼禪師

師諱は文益、餘杭魯氏の子、髮を祝つて開元の覺律師に詣して具戒を受く。覺の化を四明に盛にするに及んで、師往いて毗尼を習ふ、文章を工にす、覺之を奇とす、目して吾門の游夏と爲す。師立機一たび發するを以て、雜務俱に捐て錫を振うて南に邁いて福州に抵る。初め長慶に見えて契悟する所なし。進修の輩と湖外に之くことを擬す、既に發して雨に値ふ、少く城西の地藏に憩ふ。堂に入りて藏の地爐に坐するを見る、師に問ふ、「此の行何くに之く。」曰く、「行脚し去る。」曰く、「行脚の事作摩生。」曰く、「知らず。」曰く、「知らざる最も親し、三人火に附く。」因に肇論を擧す、天地と我と同根の處に至つて、藏又曰く、「山河大地自己と是れ同か是れ別か。」修曰く、「同。」藏兩指を堅つ、熟々之を視て兩箇と云ふて便ち起ち去る。雨霽れて辭して行く、藏之を送つて問うて曰く、「上座、尋常三界唯心と説く。」乃ち庭下の石を指して曰く、「且く道へ、此の石心内に在るか心外に在るか。」師曰く、「心内に在り。」曰く、「行脚の人甚の來由を著けてか塊石を安じて心頭に在くや。」師窘んで以て對ふることなし。遂に包を置いて俱に決擇を求む、月餘に近くして見解

① 于游、于夏、孔門十哲中の文學に長ぜし人也。